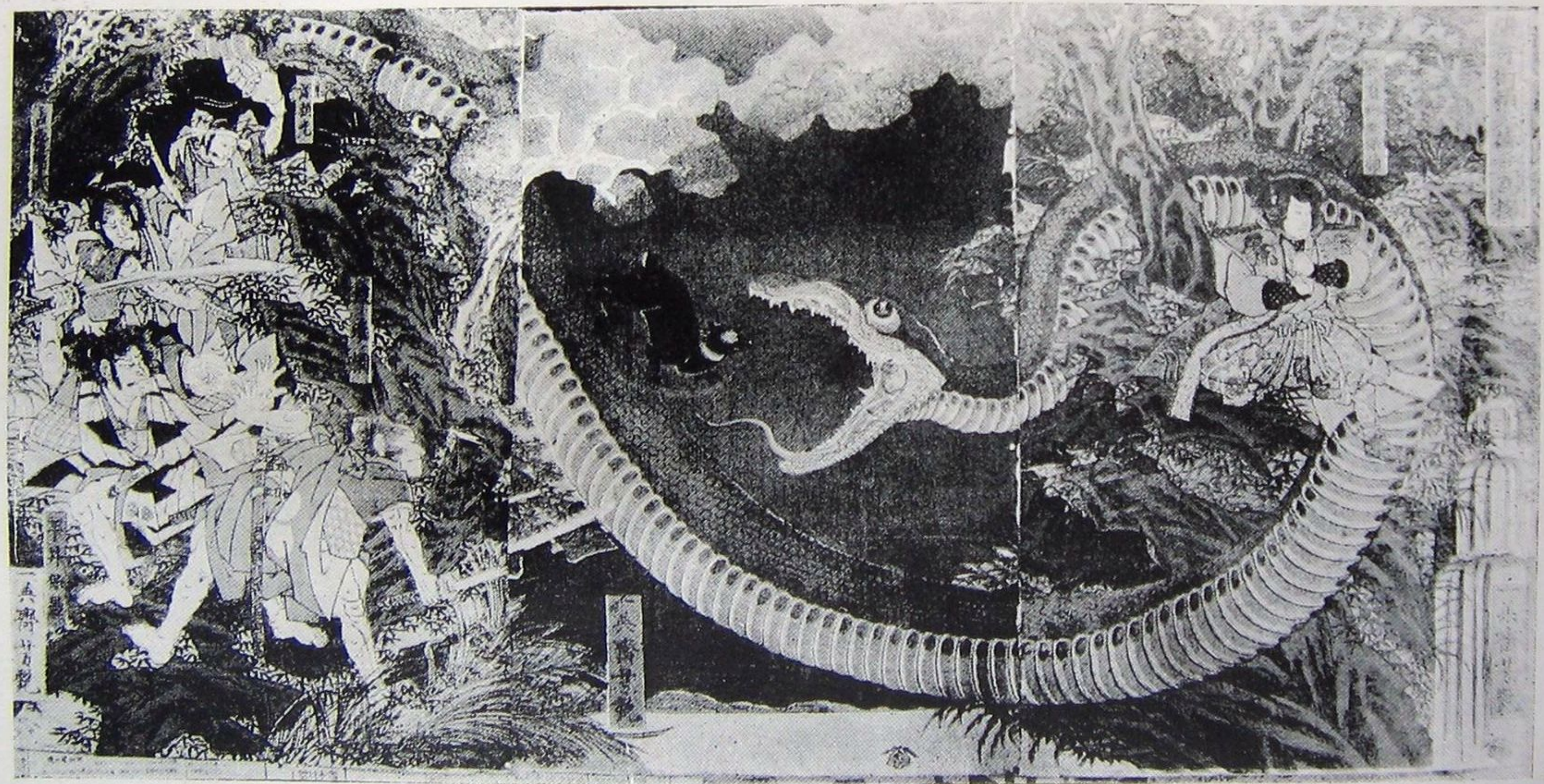
忍術秘録

甲賀流第十四世　藤田西湖

忍術甲賀流
第十四世 藤田西湖著

忍術祕錄

千代田書院刊行



錦繪に現はれたる忍術——袴垂 大蛇を使ふの圖



錦繪に現はれたる忍術——自來也　鷲を利用する圖



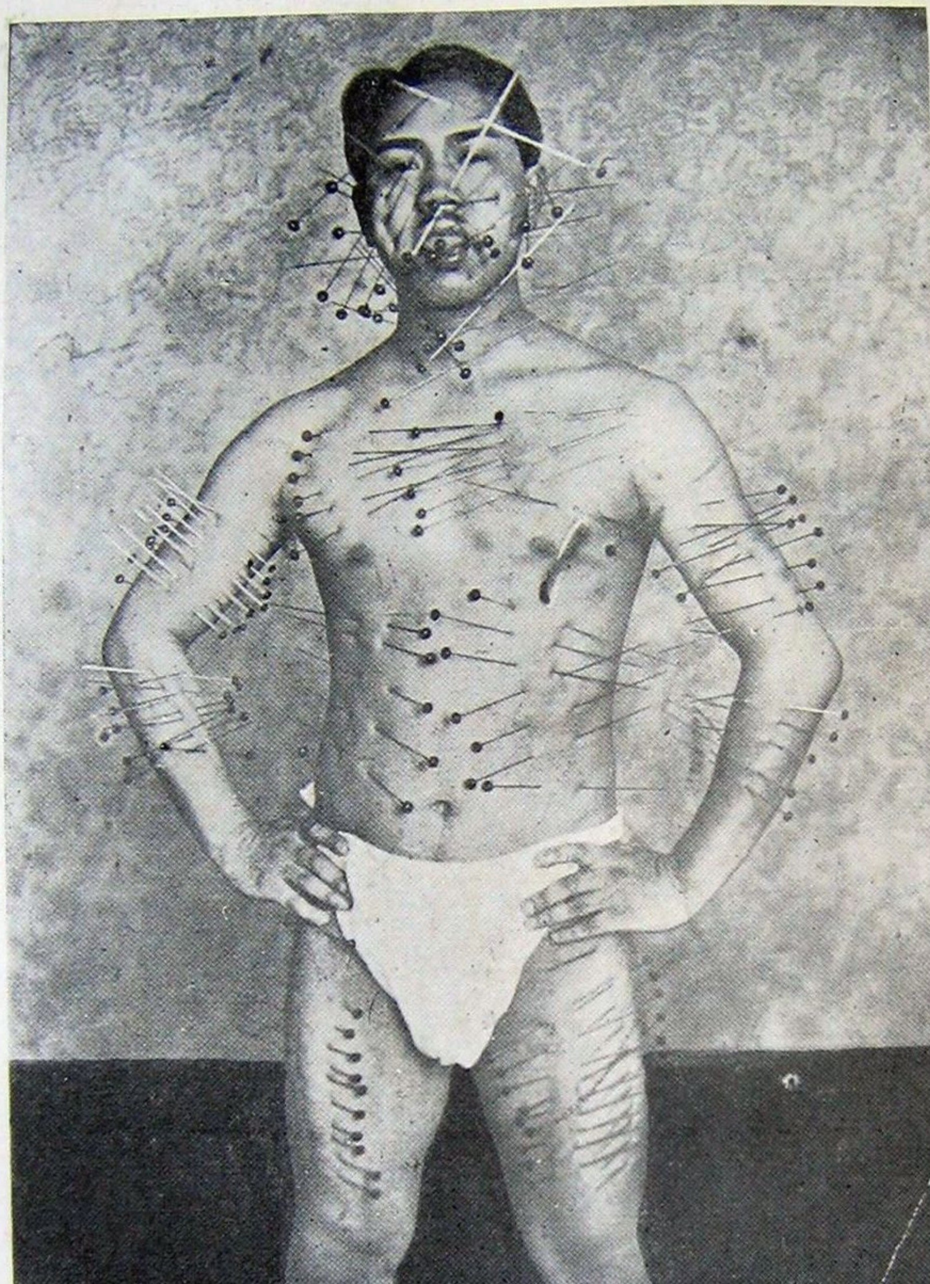
錦繪に現はれたる忍術——天竺德兵衛　蟇の術



錦繪に現はれたる忍術——虎王丸　虎を使ふの術



錦繪に現はれたる忍術——藤波由縁之助　胡蝶の術



疊針を全身に二百五十本刺したる著者



目方八貫の鐵錘をもつて胸部を鍛練する著者

忍術祕錄

序

古來忍術は秘密の術と言はれ、其文獻も至つて少なく、多くは口傳を以て師から弟子へと傳へられたのである。それでも著者の手元に集められたものばかりでも三十種餘り五十册はある。

之を集大成したら相當浩瀚なものとなり、其の複雜と冗漫とは又相當多い事であらう。之を新代式に編み直して出版する事は私の一生の仕事であつて、前途稍や遠いのである。

本書は私の體驗から割り出して、最も簡にして要を得る方針の下に作成されたものである。私は忍術傳統者の唯一人として現代に存在するものである。是迄帝都をはじめ全國に亘つて、忍術の講演と實演を試みたる事數十回に及んで居る。短時間内に要領能く忍術の大要を說

いて、聴者の理解を得る爲に相當の苦心を積んだつもりである。其の要領で以て編み出されたのが本書である。紙數少なきも、之に依つて忍術の骨子たるべき點は略ぼ了解され得る事と思ふ。學者机上の編と異り、私のは實地の研究から生れたのであるから、前口上や勿體ぶつた挨拶は全然拔きにして、端的に忍術の堂奥を示したものである。

昔は北條早雲、「凡そ將たるの要は英雄の心を收攬するにあり」といふ一句を聞いて、モウ兵法は解つた、澤山だと言つたそうだが、能く眼光紙背に徹するの賢明なる讀者は、本書に依つて「忍術はモウ解つた」と破顏一笑せらるゝ事と信ずる。

昭和十一年七月

著者　藤田西湖　記す

目次

忍術祕錄

目次

目次

忍術餘瀝

忍術の本領と目的

雲に駕し、霞に隱れ、雷霆を驅り、蛟龍を役し、爬蟲を使ひ、禽獸を御し、忽ちにして丈餘の怪物と變じ、忽ちにして尺寸の鼠と化し、自在に活躍して、陰顯出沒、端倪すべからざるもの、之れ古來忍術の妙と賞へられ、神變不可思議の顯象として、今も兒童走卒は口を開いて、兒來也、大蛇丸、仁木彈正、若菜姫、瀧夜叉姫、鼠小僧、石川五右衛門等の、グロテスクな裝束を着けた、芝居の繪姿に恍惚と見入る。誠に以て忍術の世界は心胸を躍動せしむべき空想の別天地である。之が、本當であると言へば皆な本當であり、嘘であると言へば、皆嘘。結局はその解釋の如何にあると思ふ。疑心暗鬼を生ずるは人間の弱點で、この弱點に乘じて人の目をくらまし、人の心を迷はす處に、忍術の極意が存するとも言へるだらう。

然らば忍術の本領は何かと言ふと、それは日本男子の尙武精神の極致が、遂に忍術といふ精

妙なる武術に迄達したともいふべきもので、何れの國の武術も遠く之に及ばないのである。即ち普通の武術以上に、森羅萬象を役して、最も巧妙な用意周到な闘爭術を考へ出したのが此の忍術である。

而してその目的は何かといふと、端的に言へば、軍事探偵を目的として工夫され發達し來つたものである。軍事探偵程難かしい、危險なものはないので、敵の城廓陣營を探り、其の作戰計畫を知らうといふのには、どうしても單身、敵地に乘込んで、實地に之を見屆けなくてはならない。この目的を達する爲めには、普通の戰士以外、特殊な用意と修練を要すること論を俟たない。

飛んで火に入る蟲と同じ運命であるから、忍者は、第一に死を恐れざる膽勇を要し、死以上に冒險を樂みとすると言つた心持でなければならない。つまり萬死に一生を得て還るといふ快味を無上の樂とする氣魄が無くてはならない。人間死を賭してこそ面白い事が澤山に有るので、忍者は、死を恐れざる沈勇者でなければならず、又誰人にも負けぬといふ武術上の自信がなくてはならず、對人關係に於て最も機敏でなくてはならぬ。之が爲には、極端に烈しい心身の練

磨をして、人間業と思はれぬ精妙な境地迄達しなくてはならないのである。

第一、死を恐れざるが爲には、先づ心を正しくして君國の爲に一命を捧ぐるといふ大覺悟を定めなくてはならない。一たび任務に付く以上は、水火をも辭せず死を以て之をやり遂げるといふ決心を要するのである。そして、其の武術や、忍術の方法は之を善からぬ事に濫用しないといふ事を天地神明に誓ふ。之が自信の根元となるのである。

忍術の由來

「忍術は何れの時代から始まつたか」とは、誰しも質問したい事であるが、扨て適確に之を立證する事は難かしい。記錄に殘るものを調べると、支那では、上古伏羲神農より始まり、其後黃帝に至つて盛んに行はれたと言はるゝが、其書は今日に殘つてゐない。稍や後代になつて孫子兵法中には、第十三篇に「用間の篇」といふのがある。

之は確かに忍術の事で、兵法に內を治め外を知るといふのは、敵の內計密事等を委曲知る事である。卽ち、敵方の樣體を能く知るには、何の術を以てするかとなれば、其地形の模樣、敵の進退、人數の多少、敵合の遠近などを速かに察して、我が主將に報告するのが、物見武者の役目である。又敵の塀端、柵端迄近々と忍び行き、其の樣體を見聞し、或は城中、陣中に忍び入つて萬般の模樣、陰謀、密計など迄審かに聞き、審かに見て、主將に報告し、方圓曲直の備

を定め、能く奇正に應じて敵を伐つ事、之れ忍術の司る所である。若し忍術なきに於ては、敵の計略を知つて勝利を天下に全ふする事が出來ない。故に忍の術は軍に取つて要用なものである。

然らば、支那でも古來、忍術といふ名稱があつたかといふに、それは異る。忍術と名づけたのは我邦の語で、支那では最初、吳の國で之を間と言ひ、春秋の時分には更に諜と言ひ、戰國時代後には、細作、遊偵、姦細など呼んだ。六韜には、遊士と言ひ、李全の陰經といふ書には行人と呼んで居る。かく、時代により、又主將の意に依つて其名稱異り、我國では、草、かまり、忍、水破、亂破、突破、簷猿、三ツ者、饗談、出拔など言つた。

支那の間諜、遊偵などいふ語原は何かと見るに、孫子の用間篇に

「間とは罅隙なり、人をして敵の罅隙に乘じて入り、以て其情を探知するなり」

とあり、間はすきま、ひまといふ意味である。即ち、人を以て敵のひま、すきまを窺ひ乘ぜしめて、敵城陣へ入り、敵の陰謀密計萬端の事を探り知らせて味方へ報告させ、或は便隙を窺つて敵の城陣へ入らしめて其の城營を燒き、夜討などを謀る職である。又間の字には、へだつるといふ讀みがあり、之は忍術は隔るの術で、敵の君臣の中を讒言を以て隔て、又は其の隣國

の君と和合の間を隔て遮ぎり、援兵などのない樣に取計ひ、或は敵の大將と其の士卒との中を隔てゝ、相害する樣の術を成すに依つて、へだつるといふ訓みをするのである。和漢ともに、古から敵方の內亂を謀り勝利を得た例は甚だ多い。尚ほ間の字義に就ては一說に、門の中に日を入れるので、此術の實理には、敵の城陣へ間斷なく突入る事、譬へば、日光の門戶に差し映じ、少くとも虛隙あれば、直ちに差し入るが如く、速かに入るの義であるとしてある。此の理は甚だ微妙で、凡庸者の難ずる所である。

又諜の字、偵の字は二ツながらうかがうと讀む。凡て忍の術は、遊びを體として其間に敵の便隙を窺ひ入り、其の模樣を見聞する職なる故、之を遊偵などゝ呼んだのである。楠正成の忍術には、四十八人の忍者を三番に分ち、十六人宛、何時も京都に入れて置いたといふ。此の者共が、種々の密計を用ゐて京中の樣體を窺ひ知り、楠に報告したといふは、之こそ遊偵の意であらう。

又細作といふのは、忍者が敵方へ行つて樣體を能く見聞し、大將に報告する故、大將の謀略の術を細かに作るといふ程の意である。姦細とは、姦は姦曲の姦、又は佞姦などの意味である。

凡そ忍術は表面には尋常の體にして、裏面に必ず姦曲甚しく深き企みが有るからである。元より忠義の道とは言ひながら、其の仕事は、曲細にして姦なる故に姦細と名づけたのである。又遊士(ゆうし)といふは、遊ぶ姿にして心に慮り深き故に、しか名けたものか。次に行人(こうじん)といふは、敵と味方との間を往來する意であらう。

支那でかく幾度も忍者の名稱を變更したのは何故かと考ふるに、一體忍者は「誰某は忍者である」といふ事を一般に知られたくない。人の知らざるを以て大功を成す事が出來る。故に深く秘して世上に知れざる樣にと、代々其名稱を改めたものであらう。

但し我國で、之を忍者と言つたには、相當理由がある。元來忍(しのぶ)は、刄(やいば)の心(こころ)と書いたもので、忍者が敵の便隙を窺ひ、危險なる計を用ゐて忍び入るに當つては、一心堅貞にして喩(たと)へば刄の堅く鋭さが如くなくてはならぬ。若し、心が鈍く軟かなるに於ては、たとひ如何なる謀計を巧みに行ふとも敵に近づく時、氣臆して事を行へず、心已に平靜を失ひ、言葉が煩躁にして其謀略外面に顯はれ、遂に敵の爲に捕はれ其身死するのみならず、味方の大事を誤るに至る。されば、一心堅貞なる事刄の如くなるを要するといふ意味からして、吾が邦(くに)に於ては異邦よりの名

を改めて、刄の心と書ける字を此術の名となしたのである。伊勢三郎義盛百首の忍歌にも、

「忍びには習ひの道は多けれど、先づ第一は敵に近づけ」

と詠んである。

然るに、忍者の事を別名俗稱として便宜上種々に呼んだもので、スッパ、簷猿、三者、饗談など言つた。スッパは伊賀、甲賀邊で古くから言ひ習はしたのである。簷猿とは敵の內證を見る役であるといふ處から、しか呼んだものであらう。次に三者、饗談の起りは甲斐國の武田信玄晴信は古今の名將として、忠勇謀計に達したる者を三十人召抱へ、祿を重くし賞を厚くして間見、見分、目付と三ツに分ちたのが三者の由來である。

我邦に於ける忍術の發達

我邦に於て、忍術らしいものゝ一番古く實行された記録は、日本武尊が、熊襲征伐の時に、女装して川上梟(たける)に近づき短劍を以て之を刺殺した事で、此の女装して敵營に忍び込んだのは、即ち忍術の一ッであると言へる。其後人皇三十八代、天智天皇の御弟の天武天皇の時に、淸光親王といふ方が逆心を企てられ、山城國の愛宕郡といふ所に城廓を築いて居つた。天武天皇は、多胡彌(たこや)といふ忍者を遣はして、内から放火させ外から之を攻めて、遂に討平した。之が、歴史上に現はれた忍術の最初のものらしい。

其後、源の義經は古今の武將として戰術には、用意周到であつたから、忍道にも巧みであつた。楠正成の事は前に述べたが、家康に至つては、忍者を重用して、我國の忍術を大成せしめた恩人である。家康は、本能寺の變――信長が光秀に殺された時、丁度入洛して京都智恩院に

滯在中であつた。そこで直ぐ光秀を討たんと軍評定を開いたが、酒井忠勝の建言を容れて、一且亂を避け、居城濱松に引上げる事にした。處が、沿道に野武士が蜂起して、家康の僅かばかりの手勢では、道中がとても危險である。其時、伊賀の忍者、服部半藏、穴山梅雪、柘植三之丞以下、伊賀甲賀二百人の忍者の護衞に依り、やつと歸城する事が出來た。爾來、家康は、天下を平定して德川幕府を開く迄、常に此の忍者を重用して戰陣の間に奇功を奏し、自らは江戸に覇府を定むるに及んで、此の兩忍者に厚く酬ゐる處あり、今の半藏門の外に屋敷を與へ、服部半藏に此の二百人の忍者を指揮させた。半藏門の名稱はそれから起つたのである。

此の伊賀、甲賀の忍者が尤も世に聞えたのはどういふ譯かと言ふに、當時戰國の代に於て、忍術が全國に發達した中にも、近江の甲賀郡、伊賀の伊賀郡あたりは、地形險しく、山岳多く谷又深く、都に近い土地で、古來幾多の豪族が割據して常に相爭ふて居た。互に五百坪、千坪の小さい城廓を築いて斥候を出し合つて軍狀を探るので、自然に間諜細作の必要は特に感じられ、其地方を涉り歩く忍者に取つて、變化の妙を盡くし十分に手腕を發揮すべき環境と機會とが多かつた。かくして其地方に忍道は大いに發達し、一層の鍛錬が積まれた。其爲に彼等忍者

を伊賀衆、甲賀衆と名づけ、是が流派となつて、甲賀流、伊賀流を產み出したのである。

遂に德川の末期迄も、此の兩派の忍者は、江戶城のお庭番となり、又は、隱密の役を命ぜられ、之を忍目附と言つて目附の輩下に屬せしめ、常に諸國の間諜の役を勤めた。其役人の居つたのが、神田の甲賀町に甲賀流の忍者が住み、四谷の伊賀町には伊賀衆が住み、其又配下の者を一まとめに住はせたのが、麻布の笄町であつた。最初、甲賀組と伊賀組とを橋を隔てゝ住はせ、橋の名を甲賀伊賀橋、町名も甲賀伊賀町であつたのが、二ツ一所にして笄町と略されたのである。

然るに、是程に、德川氏から重寶せられ、事實、重大な役目を勤めた忍者も、家康歿後年を經て、幕府の待遇が惡くなり、彼等は不平を起して四谷大木戶の笹寺に集合し、待遇改善の叫びを揚げた。それと同時に、江戶市內では、每夜辻斬其他、不思議な犯罪が頻出して、幕府要路の人を驚かした。幕府では、服部半藏に命じて之が鎭撫に努力させたが、却々解決しない。半藏は其責を負ひ、髮を剪り墨染めの衣を着て僧となり、名を西念と改めて俗界と緣を絕つた。之が四谷の寺町に現存する西念寺の起原である。

尙ほ私は甲賀派に屬するもので、甲賀五十三家の一、南山六家の和田伊賀守の流れを汲む者である。甲賀流の祖は戸澤白雲齋、伊賀は百地三太夫といふが、之は何れいゝかげんのもので、例の猿飛佐助なども實在の人物ではあるにしても、講談本の猿飛は、霧隱才藏などと同じく架空の想像が大部分であらう。

元來甲賀は五十三流と言ひ、伊賀は四十九流に分れて居たが、後次第に減じて、殘つた大流派は、伊賀、甲賀、芥川、根來、扶桑、忍甲、甲陽、紀州等二十四五流になつた。今日では、是等の忍術も、殆んど衰微して跡を留めず、恐らく、私が日本に於ける忍術傳習者の最後の一人であるだらうと思ふ。そんなら忍術は最早や此世に必要のないものかといふに、私の考では、却々然うではない。忍術の精神と、其の術の應用とは之を新時代に適合して、個人に護身法の必要あり、國家に防敵の必要ある限り、益々必要のものである事を痛切に感ずるのである。以下本書を一讀する人は、當然私の意の存する處を瞭とせらるゝ事と思ふ。

忍術の方法

今、忍者が敵地に入つて其内情を探り、目的を達するに付いては、多大の準備も練習も要（い）る。先づ變裝術を知らなくてはならぬ。即ち時と所とによりいろ〳〵に姿を變じ容髮を替へるのである。普通には、七方出と言つて七種の變裝を用ゐる、山伏、出家、猿樂師、商人、放下師、虛無僧と普通人の打扮と以上七種である。其他にも臨機應變、何んでも化けるのであるが、大體右の七種が出來ると、間に合ふ。其爲には立派に玄人（くろうと）藝人が勤まる位に修練を積まなければならない。即ち虛無僧としては、尺八を吹く、放下師としては手品や奇術をやる。猿樂師としては踊や唄を歌ふと言つたもので、一人で、寄席（よせ）を打てる腕前迄修練するのである。そしては敵地に入り、姓名を變じて其藩の御用商人の店に奉公人となり、又家中の仲間に住込みなどし又城中に入込み傳手（つて）を求むるなどいふ手もある。

但し、こんな事は單なる豫備行動であつて、誰れしもが氣が付き、眞似られるので敢て術といふに足りぬ事である。世間一般が期待する忍術といふのは、芝居繪にした忍術者の印を結んで、鼠に乘り、蛇に乘つたあの形である。

「あんな事は、實際出來るか?」といふ好奇心は誰しも持つてゐることであらう。だが、之に對する答は單純である。「あれは文學者藝術家の空想の所産で、實際、あの通りの事が出來るものでない。但し鼠や蛇を使つて人の目をくらまし、心を迷はす、其隙に乘じて忍術の目的を達するといふ事は出來る。」

仁木彈正は日頃鼠を飼ひ馴らして之を懷中し、之を殿中に放つて警衛者を駭かし、騷がせ、其間に自身は、同じ警衛者の服裝をして殿中に入り、所要の目的を達したとすれば、之は鼠の術と言つて差支へない。但し、彈正の鼠の術は失敗して、彈正は更に烟の術を起して遁れたと言はれてゐる。烟の術は火藥である、萬一の用意に火藥を懷中し、敵の包圍に遭つた際、之に點火して爆發せしめ、其物凄い光景に敵手を烟に卷いて身を脫したのである。

鼠小僧次郎吉も、能く鼠の術を使つたと言はれてゐるが、之は鼠の鳴き聲や、物を嚙む音を

利用して、人の家に忍び入り、財寶を奪つたといふのであるが、之を文學者をして「鼠と化した」と想像の筆を揮はしめたのである。つまり擬音に依つて人を鼠なりと思はしめたのである。之を芝居がかりに想像化すると、鼠小僧、鼠と化して舞臺を走り廻り、寶を咬え逃げ去るといふ場面を現出して、觀客の好奇心を滿足させることになる。

同じ事に、犬の術といふのもある。之は、忍者が危地を脱して逃ぐる際、巧みに犬の鳴き聲をして、附近の犬を呼び集め、其身は逸早く遁逃して姿を消す。被害者側の人達が騷いで出て見る頃には、犬が往來に鳴き吠えてゐる。扨ては、彼の賊、犬に化けたかと、其犬を取詰めるといふことになつて、眞物の犬こそ災難である。

次に大蛇丸などの蛇も、文學者の空想から描かれたもので、忍術者は能く蛇を馴らして懷に入れ、之を放つて燈火を消し、又は女中の溜りなどへ放つて仰天せしめ、大騷ぎをして居る際に、出入商人か仲間風に裝ふて難なく其家に入り込み、主人の首を搔くとか、物を取るとか自分の目的を達するのである。

其他、霧隱才藏は、蠣灰を撒いて敵の目を潰した。猿飛佐助は身體輕捷にして、木鼠小僧同

樣、塀でも屋根でも飛び渡つた。凡て、物を利用し、我が精神を統一して、或は忍び込みに、或は遁走に、神變不思議と見せかける業をしたのが忍術者の特色で、一寸人間離れのした妙術とも言へるであらう。

　されば忍術家は智惠を絞つて、いろ〳〵と物理化學上の發明をした。毒瓦斯、毒藥、火藥、點火器、探照燈、妖怪變化にばける爲めの道具。それから、忍び込みに要する道具には、繩梯子の類、簡單な竹梯子、鈎繩（之は高い處へ引ッかけて其繩に捉まつて攀上る）、水を渡る道具など、一として備はざるはない。

　由來、忍術は、隱身術、遁身術と見なされてゐる。それで、忍術者が兩手を胸の處へ握つて、何か呪文を唱へる、――卽ち印を結ぶと忽然として其處に妖術が現出し、各自の好みの禽獸が現はれて、忍者を乘せて天に昇り、地に潛り、朦朧と姿が消えて、後には腥風一陣、鬼氣人を襲ふといふ、物凄い場合が現はれると想像されたものである。そこで天地人の三遁とか、木火土金水の五遁とか、いろ〳〵の遁身術が傳へられて居る。

　併し、人間は、死なゝい限り土にはなれない。凹地や斷崖に身を付けて、暗夜追手の目をく

らますのが土遁、水中に潜つて首ばかり出し、頭に枯草でも被つて居るのが水遁、木の洞に隠れるのが木遁といふ風に考へると、此の如き遁身術は、日常誰れしもが行ふ事である。唯だ、忍術者は、そこに普通以上の工夫を凝らして常人の考へ及ばぬ處まで達したのである。前の天地人の三遁とても、天遁とは氣候、人遁は風俗人情、地遁は地理に通じてそれを利用する意味と解釋されて居るので、諸葛孔明が上は天文に通じ、下は地理に熟し、神機妙算、籌を帷幄の裏に運らし、勝を千里の外に決するなどは、矢張り天地人の三遁にも當るものである。

草木の利用

こんな風に考へると、三遁といふも五遁といふも畢竟同じ事で、假りに分類をして見た丈けの事である。人間の智惠を働かしたら、森羅萬象、取つて以て我が利器とすべきもの擧げて數へがたいのである。十遁、百遁、千遁、萬遁限りないのである。そんな手數な勿體らしい事をいふ要はない、忍術は萬物を巧みに利用せよと言へば足るのである。以下、此の利用法に就い

て理論と實際を相卽して少し述べて見やう。

人間に手近いものは草木である。到る處木や草のない處はないのである、忍術は之を利用する事をば忘れない。草を利用する事は澤山にある、先づ草の茂みへ隱れる、草を被る、枯草の中へ潛る。又木へ隱れる方法も澤山にある、立木の茂みに隱れたり、賴朝の樣に木の洞に隱れたり、ある場合には、祠や家に潛んで其身を全ふするのも一種の木の利用である。併し、之がずつと進んだものになると、上州館林の板女の樣に、一枚の板に身を隱したり、又は一本の丸太にぴたりと身を附けて巧に人の目を晤ますのもある。塚原卜傳が宮本武藏を相手に鍋蓋で身を隱したといふのも、詮ずる處之れ劔道から來た事であるが、一面からは木を利用したものである。

又玆に一人の忍者あり、不意に敵に出會つたとする。四邊を見ても隱れる場所はない、はたと當惑した。此時目に入つたものは、前面に二三本の杉の木立ちである。此の杉の木をどうしやうがないやうなものであるが、此際、彼に取つては、是が唯一の賴りである。彼は、韋太天走りに第一の杉の木に飛び付き、さながら木登りするやうに見せ掛けた。が、之は敵を誘ふ

計略であるから、如何にも手輕に殆んど敵の眼に留まらぬ位にして、其儘すつと木の後へ廻り、一氣に次の木の後側へ廻り込み、更に敵の見えない方向へと背進するのである。

處が之を敵の眼から見ると、大變複雜な場面になる、則ち相手は木へ登つたと思ひ、兎に角上の枝の方へ目を注ぐ。然るに其時には、忍者は已に第二の立木の後へ走つたのである。かくして敵が再び地上に眼を轉じない中に、自分はずん〳〵後退するのである。かく敵の目を避けて背進するといふは、忍術の上には最も大切な事で仲々六つかしい。然し氣を付け工夫すれば決して出來ない事ではない。

それから門とか塀の處で、他人の眼から脫けやうとするには、ぴつたりと背中を塀につけ、横流れの歩調で、靜かに反對の方向に外れて了ふのである。此の横流れとは、丁度蟹が這ふ樣に横に歩むのである。是は昔から忍びの歩調と言つて、忍術者は平常から此の歩み方を練習して居るのである。是に慣れさへすれば、速度も早く身體も疲勞が少ない。そして、此の横流れをやると、前面に敵の樣子を見て居て、後には、何か身楯となるべきものを備へた形になり、忍者の歩勢としては理想的である。

此の横流れの歩み方といふのは、先づ左の足をずつと右の方へ捻り出す。すると兩足はX形になるから、今度は右の足を思ひ切つて同じく右の方へはたける。其時足は全く八の字形になる。更に左の足を前回通り右の方へ大きく捻り出して、再びX形の足なみになる、之も慣れると、ずん〳〵跳ぶが如く歩む事は出來、普通の歩き方よりは餘程便利である。彼の源頼朝が、石橋山の合戰の際に、木の洞へ隱れた事や、大塔宮が經櫃の中へ隱れた事や、家康が茶臼山の戰に、辛くも草の中へ潛つて危險を免れたなど、何れも木の利用であつて、是等は誰人にも應用されるのでゐる。

火の利用

次は火の利用に就て考へて見やう。八犬傳に出る犬山道節といふのは、本來作者馬琴の想像の人物であるが、併しあれは、實際に行はれ得る處を馬琴が巧に取入れて生かしたものである。あれは何んでも火影さへあれば、容易に行はれるのである。

實際の例を一ツ示すなら、或時一人の警官が、夜中一人の怪しい男を捕へて之を村端れの駐在所へ引立てやうとした。途中迄來ると、暗い道端に佇んで居た若者が、不意にパッと燐寸を摺つたので、警官は思はずふり返る途端に件の怪しい男は、するりと手を拔けて何れへか消え失せた。警官は驚いて、「あッ失敗つた！」と叫びながら、無闇に駈け出した。其後から件の男は傍の樹の蔭からのそりと立ち出て、警官の後影を嘲笑しながら、跡白浪と消え失せた。

それから二三年經つて、此の男が警察の手に捕へられた時、白狀した處に依ると、彼は、習ふともなしに火光を利用したもので、前の警官をまいた時なども、不意に閃いた燐寸の光に警官が一瞬の氣を取られた隙に、逸早く其手を拔けて、彼は其儘、前のめりに足元の草の中へ轉げ込み、一二間を這つて樹木の根元に身を潛ませたのであつた。處が、一方警官の方では、火の光に驚いて、一寸精神が亂れた處へ、曲者が拔け出したので、愈々混亂し足元へは氣が付かず、譯もなく駈け出したのであつた。此の處が、犬山道節と犬川荘助の條下と同じ事になるのである。

烟の利用といふ事も、多くの場合、火の利用と一致したものであつたが、其の趣きに至つて

は餘程異る。卽ち火の場合は、いづれかと言へば動的であるのに、烟の方は靜的である。前者は積極的であり後者は消極的であり、其の氣分が大いに異るのである。烟の實例は、餘り澤山ないのであるが、其の實これは確實な成績を收め得らるゝので、十分興味ある硏究に屬する。其人に體術の心得が出來て居たら、此法を行ふに左まで困難を感じなからうと思ふ。若し烟が眞直に立ち騰つて居るとすると、敵を正面に取つて後へ退るし、又、烟が左右何れかへ靡(なび)く場合には、又夫に隨つて右なり左なりへ身を運んで、敵の視線を免れるのである。斯うして左右と後とに行動するから丁字形になるのである。

こんな事からして、忍術者は、常に二樣の準備を心の中に持つて居なくてはならぬ。一は他動的事物を利用すること、二は自動的事物を利用することである。他動的といふのは、自分では敢て求めもしなければ豫期もして居ないが、何んでも其處に現はれて居るもの、又は咄嗟(とつさ)に其處へ現はれて來たものを捉へて、それを原則通りに利用するのである。自動的とは、自分が豫め其處へ現はれて來る何物かを豫期してそれを利用するとか、又は自分で何か特別の準備をして置いて、いざといふ場合に、特定の事物を故意に出現せしめて夫を使用する事をいふ。

故に烟の利用の場合にも、其處に烟の無い場合には、自ら求めて其處へ烟を現じさせる。其方法としては、或は火藥を燃やすとか、或は灰へ石灰を交ぜたものを爆發させるとか、又は或る仕かけの中へ入れてある瓦斯を放散するとか、種々の方法で其目的を達するのである。此烟の利用は、忍術として極めて興味深い。

次は熱の利用であるが、之は火熱を要するものであるから、其應用範圍は極めて狹く、或る特殊の場合の外は、殆んど使用する事がないのである。併し變形的應用は却々廣いもので、一種の興味がある。一例としては、源義朝が最後を遂げた長田の風呂責め、楠正成が長柄柄杓(ひしやく)の熱湯攻め、などは最も名高いもので、此種の應用としては卓出したものである。市井の喧嘩沙汰に見ても、沸え立つた鐵瓶や藥罐を投げ付けたり、火鉢を投げ付けたりするのが能くある。之も熱の利用と言へる。

次に火の利用——之は忍術の方では能く用ゐるもので、熱の利用に比してはずつと價値ある。何でも少しの光があれば、直ぐそれを機會にしてパツと自身の姿を隱すのである。卽ち之を應用する場合には、刀で石をがッしと切り付けた刹那、發矢(はつし)と飛び散る火花を利用したり、又は

双方互ひに挑み合つて居る時、パッと一道の火光閃くのを利用したり、或は松明の光でも、提灯の光でも流星の光でも、凡て咄嗟に發した光を利用して、其の一瞬に、逸早く身を隠すといふのが此法の長所とする處である。

以上、烟、熱、光など何れも火の部に入るのであるが、扨て此の火の利用といふ事は、火といふ一つの現象が入用であつて、前の木の様に、何時でも何處でも自由自在に行へるとは限らない。少し用術上の不便はある。併し其の不便がある丈けに、いざ之を用ゐるとなると、却々目覺しい働きになるので、他の方法では迚も得られない妙處もある。

八犬傳の犬山道節の場合などがそれで、彼は鐵と石とか拍摩してカチリと一閃の火花を發した刹那、ふつと姿を掻き消したのである。其機敏な動作と手際の精細なのには、何人もあつと驚嘆せざるを得ない。前にも言つた通り、八犬傳中の豪傑は、馬琴の空想の人物であるが、併し、其の事の可能性丈けは十分認めて宜しい。此場合、道節は、敵と渡り合つて居るのであるから、双方の注意は極度に興奮されて居る。たとへ眞の闇夜とは言へ、敵の一進一退位は判る。故に若し敵が一歩でも身を退くと見れば、直ぐ電光の如く突込むので、とても退く事は出來な

い。其の危急の場合に、何かぱつと一閃の火影でも見えると、相手の眼底に突發的刺戟が入る。其一瞬視力がくらまされる。其の機を利用して咄嗟に他へ身を退いて了ふのである。實際此の瞬間は、相手の眼が盲にされて居るから、其時に正面を突破しても、決して自分の姿を認められるやうな事はないのである。

火の利用の實際上最も規模の大きいのは、日本武尊の東夷征伐の史實である。尊が枯野の草を燒かれた際、反對に此方からも火を放ちて燒き立て、遂に凶賊を燒滅したなどは、最も大きな方法に屬する。元來忍法には、陽忍と陰忍と二つがあつて、尊の採用したのは此の陽忍に相當する。陽忍は所謂表忍術と稱すべきもので、陰忍は裏忍術に相當する。言葉を換へていふならば、我身を現はして居ながら身を脱するのは防身術の骨子であり、且つ其の行ひ方が如何にも正々堂々として居るのであるから、之を稱して表の術といふ。又徹頭徹尾姿を現はす事をしないで、飽迄も相手の目を晦(くら)まして此方の身を全ふするのは、つまり裏の道を行くので之を裏と稱する。

だが、最も確實な火の利用法としては、どうしても基礎を科學の上に置かなくてはならぬ。

そこで忍術家の一秘法として、火藥なるものが應用されたのである。それは極めて技術的でもあり、同時に實際的功用は驚嘆に値するものがある。故に火を利用せんとする程の者は、何時何處にでも、火といふ事を忘れてはならぬ。雲光石火危機一髪といふ場合に、少しでも火氣があれば、忽ち之を利用するのである。

今火藥利用の一例を擧ぐると、玆に一忍者あり、人跡もない處で思ひがけない敵に出會つたとする。迚も尋常手段では敵を制する事が出來ないのであるから、豫て用意の火藥を此際に利用する。其利用法は、火藥を突然爆發させるのである。此の場合には、必ず轟然たる音響と、閃々たる火光と濛々たる烟氣とが現はれるが、此の三つの中で最も重要なのは烟氣である。之は忍術者が極秘する珍重の武器で、轟然たる音響と共に、ぱッと發する火光に乘じ、自分の持つて居る扇子なり手布なりを、反對の方面にぽんと投げ上げるが早いか、じーと身を沈めて地を這ふやうにして、反對の方向へすつと走り去るのである。が言ふ迄もなく此場合、出來る限りは烟の流れに隨つて走るのである。

土地の利用

之は土地の利に依つて身を遁れるのである。例へば、敵に追ひかけられて、免れる餘地がない場合、足元に溝でもあれば、其中へ逸早く潜り込んだり、又四辻でもあれば、一方へ足跡をはつきりと付けて置いて、却て反對の路へ走り去るとか、又、何か道に障碍物でも造つて置いて駈け出すとかいふのが、これである。即ち、草鞋(わらじ)を逆に穿いて逃げ出すとか、途中の小さな橋を破壞して立ち去るのも此の法に屬する。

次に同じ土地でも、山とか穴とかを利用する法がある。多くは山野の取り遣りに用ゐられ、戰爭の際などに多く應用される。個人の場合に時として應用される事があり、小さな丘や盛り土を小楯に取つたり、足元にある穴に身を隱したりするのである。

全體にいふと、土の利用といふ事は應用の區域は非常に廣く、其の利用法宜しきを得れば、最も安全で且つ確實な功果が收められる。土砂の應用といふ事は最も手近かな方法で、小さい

一塊の土も大きな働きをする。土は或る場合には最も適當な目潰しともなるのであつて、急な場合などは、適當な護身法である。今、敵に出會はした場合、直ぐと足下の土を取つてぱつと投げ付けるとする。敵に豫め其の用意あれば格別、さもないと十中の八九、屹度面上に土を受ける。土は脆いもの故、其儘パツと崩れて、多少とも敵の目に入るから、其瞬間に逸早く身を反對の方向へ飛ばして了ふのである。

土の應用は大したもので、世界大戰の如きは、土鼠戰と迄言はれた。廣大な塹壕を作つて兩軍對峙する處が、まさに土の利用法の競爭であつた。

金の利用

總じて此の金の利用には一つの機智が必要である。即ち當意即妙の頓智が必要で、之に依つて金屬性のものを忍術に應用するのである。刀をぴかりと光らせて敵の目をそれに奪ふ隙に、電光の如く身を遁れるなどは、光りの利用であると同時に又金の利用でもある。更に又相手の

心を亂す方法としては、其邊に鍋でも釜でも鐵瓶でもあつたなら、石なり木なりで力を極めてそれを叩くのである。此場合、相手は、はつとして一瞬其方へ目を轉ずるから、其虚に乘じてフイと傍の方へ身を反らせると、一時此方の姿は相手の眼から消えるのである。

更に金物の利用として傳へらるゝのは、左の一例である。之は、機智頓才に依つて危急を遁れたので、誰人にも行へる事である。或家へ一團の惡漢が不意に襲ふて來た。主人は此の形勢に當惑したのであるが、沈着な男であり多少忍術の心得もあつたので、氣を落着けて敵の裏を搔く用意をした。先づ手近の机の上にある文鎭、小刀、それから火鉢の中の火箸、床の間に在つた金屬性の置物、香爐など、大急ぎ取り集めて、それをがちや〳〵と鳴らしながら、自分一人であるのに、

「さア皆な一緒に出ろ、構はんから片端から遣つ付けて了へ!」

と叫んだ。惡漢共は是は意外と驚いた、

「不可々々、もう防ぎが付いて居て、大勢居るらしい。刀なども持つて居る、之は迂闊にはやれん」

と顔見合せて、やがて共儘退散して了つたといふのである。

も一つの金の利用は、之こそ本當の金で、お錢を共儘利用するのである。卽ち懷中して居る銅貨なり銀貨なりを密と握つて、それといふ時、敵の顔へ叩き付けるので、三ツ四ツ一緒に投げると一ツ位は命中する。目や鼻へ中つたら大した效果がある。正宗の寶刀よりも、紙のおさつが一層能く切れるといふのも當節の眞相であるが、武術忍術の一手として銅貨の礫を使用する事は、却々の思ひ付きであらう。

水の利用

之は水氣を利用するもので、應用範圍が廣い。河、海、池、井戸などある。共同の原則の下に場合々々に應用するのである。あなやといふ場合に、前面の河中へ飛び込んだり、又船から海中に投じて、波のまに〳〵姿を潜めて居るのも、日頃の水練に依つて出來る忍術の一手で、彼の鳥井又助が姫川で加州の大守を刺したなどは、此術の妙である。

井戸を應用する事に付いては面白い話が多い。曾て或る田舍で、一人の正直な若者が、數名の無頼漢に要せられて困つた。兎に角、逃げ出しては見たが、惡漢共は、隙間もなく追つかける、若者は絕對絕命、見ると路傍に井戸がある。彼は井戸框の下に在つた手頃の石を抱き上げて、どぶんと井戸の中へ投げ込み、穿いて居た草履を其處へ棄て、其身は逸早く地を這ふ樣にして茂みの中を走り拔けたのである。追ふて來た惡漢共は井戸の水音を聞き、

「やツ、野郎井戸へ飛込んだ！　あツ、草履が脫ぎ棄てゝある。」

と、罵りながら、寄つてたかつて井戸の中を覗き込んだが、中は暗いから直ぐには見當が付かない。それこれとしやべつて居る間に、若者は難なく逃げ終らせたのである。

元來此の水の利用といふのは他の方法に比して應用が比較的困難でもある。何故ならば、是はどうでも水練達者といふ事が條件とされるからである。水練達者でなければ、完全に水を應用する事が出來ない道理である。彼の兇徒などが、警官の手から脫するのは、能く此の遁法をやる。敵に追ひ詰められて前方に水漫々の川があるとなると、能くざんぶと飛込んで、姿は見えずなりにけりといふのがある。

だが、首尾能く水の中へ潜つたとした處で、其まゝ直ぐ何れかの地點へ泳ぎ附かうとするのは、寧ろ不得策として避けなければならぬ。相手が一人か二人位の少人數である場合は、寧ろ水へ飛び込んだなら、其邊に鼻と口丈け水面に出してしばしぢつとして居るのもよろしい。陸の方では、「ヤッ、飛び込んだぞ、下流の方へ直ぐ廻れ」とか「早く向岸へ廻れ！」とか言つて、下の方や向ふへ駈けて行くのが人情の常である。其間に此方は岸に付いて寧ろ少し上流の方から陸へ上つて、直ぐ草の中へでも隱れて居ると宜しい。

も一つ水を利用して敵の眼から脫ける方法がある。それは川でも池でも湖水でも何でも、身は已に敵の手中に陷らんとする際、何か手當り次第、傍にある物を水中に投じて、ぱッと水紋が立つた處を逸早く、自身は敵の手を免れて身を隱すのである。

尙一つの應用法としては、水を敵の面上に注ぎかけるのである。豫め用意した水があれば結構、無ければ手近にある水を利用して、不意にやるのであるから、相手は、はつとして後退ろぐ。其の一瞬間を利用して、更に第二の攻勢に出づるのである。是は、忍法の方では、最後の苦手と稱するもので、普通の場合には應用する事を禁じられてある。

天象の利用

我々が通常に知つて居る天象を、最も巧妙に且つ機會的に利用するのである。例へば日中の場合には、自分は太陽を背にして立つのである。此の樣な場合には、敵は太陽の後光に目を射られて、判然と相手の動靜を見る事が出來ないから、其弱點を利用して、自分は思ふ儘に働く事が出來るのである。

又、風とか雨とか、雷とかいふ天象も古くから多く用ゐられた。烈風の日に敵を風下へ取つて火を飛ばすとか、又今日の戰術の如く、毒瓦斯を浴せかけたりするので、斯くの如きは、一寸した思ひ付きの樣であるが、實戰の場合には意外の大功を收める事が出來る。雷鳴などは最も際どい應用であつて、雷雨の音などが劇しい時には、其聲に紛れて敵の手元へ附け入つたり、雪の日には白裝束で敵の眼を掠めたりするのは、數々用ゐられる處である。

所謂天象を應用することは、忍術の中でも極めて高尙なものと目されて居る。抑々も人間は

天を戴き、地を踏むやうに出來て居るので、此の天を利用するといふ事と、共の範圍は廣大無邊である。故に天象利用に通ずるといふは、やがて忍術の奥儀を會得したもので、忍術的技能の最高頂に達したものと言へる。今それ、天象利用の標本とも見るべきは、天候の變化を應用する事で、例せば、彼の露西亞といふ國は、昔から外國と戰爭するには、能く嚴冬風雪の氣候を利用する。之は、自國民は、寒氣に馴れて居るから、熱國の人間を困らせる一つの方法である。全く廣義に於ける天象利用であつて、實に大きな規模を立てゝ居るのである。

一方又、熱國では、夏季を利用して、寒國の兵を困らせるといふ手もある。昔からの兵書にも、上は天文に通じ、下は地理に熟すと書いてある。故に天象を利用する事は、大智者の能くする處で、晴れた夜に忽然驟雨の來る事を豫想して、一仕事をするといふのもある。「今迄晴れ渡つた空が忽ち黑雲に蔽はれ、天地忽く晦冥となると共に紫電一閃、さッと降り來る大雨に乘じて姿を消した」とか、又は「互ひに秘術を盡し、火花を散らして戰ふ折しも、月は一陣の雲に呑まれて四邊は再び闇黑となつたので、共のまゝ姿を隱して了つた」といふ樣なのは、何れも共の天象の變化を利用した忍術物語りの、華々しい場合を飾るのである。

石と土の利用

石は何れの處にも容易に得られるものであるから、此の應用範圍は甚だ廣い。例へば、咄嗟の場合、思ひがけぬ敵に出會つたとする。手早く二ツ三ツの小石を拾つて敵の面上を望んで投げ付け、敵があツとたじろぐ間に、逸早く身を隱して了ふのも忍術の一方法である。更に、石燈籠、石鳥居、石橋などを利用して巧に自分の姿を隱すこともある。

玆に人あり、不圖敵手に認められた場合、此方に何んの用意も覺悟もなかつたら、必然敗を取る事とならう。若し、不斷の用意あり、注意を怠らなかつたならば、如何なる場合にも、闇々と敵に討たれるものでない。彼の心は逸早く、地上の何物かを利用する方面に注がれるのである。土、石、橋、塚、丘、樹木、邸宅、祠堂、川流、穴、溝など、到る處に利用すべき材料は、有り餘る程多いのである。地の利を取るといふ事は、天の時を得ると同じく、兵法の極意であり、同時に廣義の忍術である。地の利を取る時、そこに、能く、驚天動地の華々しい活動

を現出する事も出來るのである。

且つ、地の利を應用する事の中で、大切なる一方法は、地に同化するといふ事である。之は忍術の一大寶典である。同化といふと難かしくなるが、昔から「紛れる」とか「似せる」とかいふ事がある。つまり是は、自分の身を地の模様とか、周圍の事物とかに同じ様にして了ふといふ事であつて、動物の保護色と同じ關係に立つものである。

此事は、忍者の小さい掛け引きの間に行はれるばかりでなく、隨分と多方面に應用されてある。軍隊のカーキー色服の如きがそれで、遠方から見ると、土の色と紛れるので、其の所在を隠すのである。又此頃では、飛行機から直下に見付けられるのを防ぐ爲に、兵士は、帽子の上に編み袋を被り、いざといふ時には、此の編み袋の中へ草を一杯に入れて被ると、空中の飛行機から見ると、草原と區別が付かないのである。背嚢へも此の草袋を被ぶせる様にしてある。

昔からの忍術者は、其時と場合に應じて、衣服や被物や、携帶の武器なども充分に注意を拂つたものである。手拭を蘇枋(すはう)染めにしたのも此意味である。

夜盗などの、好んで黑裝束であるのは、昔からの定りであるが、主として夜間に仕事をする

彼等には、是こそ全く忍術の法則にはまつたものである。眞の闇でなくとも、黒装束で靜かに地上にしやがんで居たら、容易に人の目に入らぬのである。

生きた人間の利用

人間を其儘忍術に利用する。其中の反間策といふのは、世間の馴合ひ喧嘩の如きもので、其のいどさくさに紛れて二人とも姿を隱す如きである。反間術の變形として苦肉策といふのである。是は自分の身を苦めて、身を脫するのである。例へば、今甲は乙の爲に捉へられんとする切迫詰つた場合、甲は一つの苦肉策を行ふのである。即ち、最早此上は仕方ないから、縲紲の辱めに會はんよりは、寧ろ潔く自決すると見せ、双肌脫いで短刀を我が腹に輕く突き立て、少しばかりの出血を見せる。乙も意外の感に打たれて躊躇する處を、却て其の短刀で乙を突き刺して免れるといふ樣な事をする。

も一つの人身利用は、他人の身を利用して我が安全を圖るのである。敵の家へ忍び込んで發

見され、一身危險に瀕した場合など、其家の妻女とか母とか子とかを逸早く奪つて、之を眼前の人質とするのである。之などは、十分に心身の鍛錬を積んだ者に行はれ得る。

元來人身利用の主眼とする處は、人といふ活物を利用して、夫に依つて第三者の眼を晦すのであるから、中々興味がある代りに、又一厩の背も折れるが、其成績も面白いのである。つまり第三者を得來つて敵の眼から脫れ去るので、機轉を要する人込みの中で、惡事を働く者共が能くやる手で、すりが、人の財布を奪つて、之を他の通行人なり仲間なりの袂へ忍ばせるなどもそれである。或は、第三者と敵手とを機會的に衝突させて、其隙に自分は脫出する事などである。此方法は一寸困難であるが、うまく行けば効果が大きい。併し第三者に對する手段が拙劣であつては、却て反對に利用される虞れがあるので大いに注意を要する。

又自分が或者の眞似をして危地を脫するのは面白い方法である。併し之も時と場合で應用に難易がある。世間一般に知られた實例は、例の安宅關の辨慶であるが、他にも忍術には之に類似のが多い。兒雷也が、北越寺泊の津で賣子といふ巫子に變裝して、强慾代官を誑かしたのもこの種の方法である。兒雷也は、忍術に於ける古今の達人で、特に其の蝦蟇の術の精妙は他の

追隨を許さぬ處であるが、其の忍術的應用は、時として蝦蟇の術以外にも種々の妙用を示した。無論昔から、誰々は何の術に長じて居ると言つた處で、其術以外を使へぬといふのではなく、唯だ其人の得意として蝦蟇なり、なめくじなりを使ふといふに過ぎず、時と場合では、變化極りなくあらゆる術を適時適度に發現したものである。

彼の惡七兵衞景清の如く、魚鱗を目の中へ嵌めて非人に見せかけたり、支那では豫讓が炭を呑んで啞となり以て人の目を晦ましたり、又赤穗義士の如きも、或は饂飩屋になつたり、酒屋になつたり、扇子屋になつたりして、敵の樣子を窺つたりしたのも皆な同じ應用である。八犬傳の中には、彼の全飩大助が、乞喰となつて身を潛めたといふのも同じ事である。今日でも、刑事巡査など犯人を追跡する場合には、能く其の容貌や姿を變へて、何人にも刑事と悟られぬやうにする。髯を生やしたり、蠟細工で鼻の形を變へたり、又は髷を被つて靑坊主を變じたりするのであるが、斯う巧妙に變化されては、如何なる惡漢も氣が付かずに居るのである。

坊主頭になるなどは隨分思ひ付きであるが、秀吉が四天王但馬に追はれて、辛くも寺へ逃げ込み、早速頭髪を剃り、知らぬ顏して臺所で味噌を摺つて居たなどは、大した忍術の妙諦であ

る。支那でも、此の姿を變じて人を誑かした話に、例の范睢傳と有名な面白い話がある事は、史記列傳の中に詳しいから此には略す。

鳥類の利用

鳥の利用といふ事は、單に鳥類其物を應用するばかりでなく、又鳥の仕方や様子をも眞似て巧に他を紛らす處に妙味を生ずる。之に就て一つの面白い實例がある。或者が、嘗て他家へ忍び込まうとすると、運惡く家人に發見されて、狹い庭の隅へ追ひ詰められて了つた。困つていろ〱工夫するが、咄嗟妙計も出ない。すると、其處へ一羽の鷄がチョコ〱走り出たので、彼は行きなり之を捉へポンと空へ投げ上げた。鷄は非常に驚いて、コケ〱とけたゝましく鳴いたので、追手の者の目が思はず其方へ轉じた瞬間に、其者はひらり身を飜へして、追手の足元からすつと駈け拔けて何れへか姿を隱した。はつと氣が付いた追手の者は「アッ曲者め、鷄の術を使つたか！」と言つて、呆然と四邊を見廻はしたといふのである。

但し、忍術である以上、單に機會的事實をのみ利用する事に安んぜずに、更に數步を進めて、如何なる場合にも自分に都合の好い機會を作る事を心がけなくてはならぬ。即ち豫め一羽なり二羽なりの小鳥か、或は之に類したものを用意して、いざといふ場合、不意にそれを飛び出させるといふのが寧ろ積極的工夫である。小鳥位の利用は大した事でもない様に思はれるが、事實は中々然うでない。普通、人間は、小鳥が飛び出しても、ふつと氣を轉じさせられるのが常態である。兎に角其の小鳥の行衞を一寸でも見定めるのであるから、其處に隙が生ずる。其間に此方は敏捷に身を隱して了ふのである。小鳥は形の小さいものであるから、少し其使用に慣れさへすれば、案外の好果を收める事が出來る。忍術者は、火藥の樣に物凄い物の應用法を考へると同時に、又此種小鳥の利用法等も習練したものである。

小鳥で引合ひに出される話は、例の石橋山の木の洞へ隱れた賴朝である。梶原景時が、此の洞の中へ弓を突込んだ時、二羽の鳩がばた〳〵と飛び出して、羽音高く空中へ舞ひ上つたといふので、景時は「やア、鳩めが飛ひ出した。鳥が居る位ぢや、人間は居まい」と高聲に笑ひ出したので、他の者も之に同じて其處を行き過ぎる。鳩は、賴朝主從の方で、豫め用意したもの

か、景時が計略を運らしてやつた事かは問ふ處にあらず、兎に角、巧みな鳥の利用の一手として、此の場合を見るのである。

又、支那では鶏鳴狗盗の輩といふ事があつて、鶏の鳴く聲を眞似て危難を免れた實例が史上に現はれて居る。即ち例の齊の孟嘗君が、强秦に使して、外交談判の失敗に終り、身は囚はれやうといふ切場詰つた事になる。そこで從者諸共、夜中に遁走したのであるが、函谷關迄落延びたが、夜が明けないから關門が閉まつて居る。開くのを待つて居ては、秦の追手に捕へられる、絶對絶命の場合、從者の一人に鶏鳴を眞似る事の名人が居て、コケコーと高らかに眞似た。すると、近所の鶏が皆な之に同じて鳴き出したから、門番は夜が明けて定刻になつたと思ひ、門を開いて通行人を通した。孟嘗君主從、龍のあぎとを免れて無事本國に歸る事が出來たといふのである。之などは、鳥の利用の最なるもので、手濡さずに敵を欺き終へたのである。

其他大鷲の術などいふのが、古から能く傳へられる。併し、之は、鷲の剝製を頭から被つて見せたり、首丈け鷲の剝製を使つて、餘の處は、布片で作り、雪拂ひや鳶形に作つたものを携帶して、夜中に人を欺いたといふ巧妙な智惠である。小鳥の輕妙な術に對して、之は鷲を靈鳥

と畏れた昔の心理作用を利用し、威力を示した積極的に敵を斬りまくるとか、又は、次第に後退りする時、敵の急追を阻む手段である。

獸類の利用

獸類利用は應用の廣いもので、忍術家には甚だ重要なものである。犬、猫、鼠、猿の様なものから、大は牛、馬、虎、鹿、猪、熊、何んでも利用される。そして、是等獸類に特異な靈能作用がある様な事を、忍術者の方では日頃世人に吹き込んで、そこに何か幻怪不思議な錯覺を誘導して置くのである。

之を應用方面から見ると、兩者相挑んで、今や危機一髮といふ場合に、思ひがけなくも一疋の鼠が忽然と現はれて、兩者の中間にあつて、手でも摺り合せる様な不思議な姿態をしたとしたら、そこに何となく一種の神祕的な疑惑心を起させる。そこが忍術者の附け目なのである。

世間一般に傳へられる處では、彼の仁木禪正は好んで鼠の術を使つたといふ。鼠は小動物で、

之を馴らすと殊に白鼠の如きは、主人の懐に安住して能く言ふ事を聽くものであるから、何時でも携帶するに好都合である。小鳥だと、窒息死を起させる心配もあるが、鼠は其點至つて無造作なものである。

仁木の鼠の術といふのは、一種の妖術であるかの如く信ぜられて居るが、決してそんなものでない。上手の人間の精神言動は、常に劣つた者に對して、幻妖的威力を示すといふ事に歸着するのである。鼠が偶然に現はれたか、又は豫て用意して持つて居た鼠を、仁木はそこへ放つたとする。すると、相手は緊張し切つた心に一點の波紋を生じて其處に隙が出る、そこが仁木の乘ずる處である。

古から人々の胸底には、動物それ〴〵に一つの神經不可思議な屬性が備はつてあると考へられて居るので、是が特に忍術家の精神靈動に大なる助けとなるのである。彼の賴豪阿闍利の話などを讀んで、鼠の妖氣といふ事を不思議に思ひ、あんな小さな動物でも、時としては不思議の精を現はすと考へて居るから、今突然鼠が飛び出すと、そこに何か怪しい術が行はれて居るではないかといふ疑念を生ずる。

一たび起つた疑惑心は抜棄を生じて、際限もなく幻覺錯覺へと導く。されば此の疑惑心といふのは、忍者の附け目で、其處に隙とか虚とかいふ忍術獨特の舞臺を開くのである。かくして一旦虚に乘ずれば、忍術者の方では思ふが儘に相手の心も目も晦ます事が出來る。されば、敵手の心の虚實を探る樣に、先づ此樣な小さい動物を放つて見るので、此點、忍術者の精神修養に屬する。

源頼光は一代の勇豪で鳴らしたもので、當時世間を騷がした稀代の怪賊、茨木の鬼童丸といふのを捕へ來つて、之を我が邸内に縛めて置いた。流石は鬼童丸、何時の間にか黑鐵の鎖を捻ち切つて逃亡して了つた。家臣等驚き、あの曲者を逃がしては、虎を野に放つた如き禍であるといふので、八方探索したが見付ける事が出來ない。其中、頼光は一日例の四天王の勇者を隨へて野に出た。すると、路傍に一疋の死んだ牛が横はつて居る。屹とそれへ目を付けた頼光は

「うむ、者共、彼の死牛は怪しい姿體ぞ、疾く吟味せい！」

といふ。流石は古今の武將丈けあつて、目が高い、少しも油斷なく心を配るのである。そこで四天王の面々、それとばかり駈け付けて死牛に近づくと、牛はむく〳〵と動いて忽ち猛然と

身を起した。之を見た四天王の面々、
「扨てこそ奇怪なれ、それ取り挫けい！」
とばかり之れに立向ふと、其の腹から鬼童丸がぱつと飛び出した。
「やア鬼童丸なるぞ、それ逃がすな！」
とこちらは前後左右から取卷いたので、流石の鬼童丸も再び縛められて了つた。一時たりとも牛の腹中に潛み、賴光の外出を狙つて居た鬼童丸の所業は、獸類利用の忍術である。之に對して、一方賴光としては、素より勇名を後世に殘した武將丈けあつて、一個の死牛を見るが早いか、之を怪しと睨んだ眼力は驚嘆すべきもので、名將又忍術を心得て居たのである。若し、之が武勇一方の人間であつたら、油斷して死牛に近づき、鬼童丸の拔き討ちに會つて一命を落した事であらう。

更に獸類利用の興味あるやり方は、火牛の謀といふので、之は支那では、齊の田單が、夜戰の際牛の尾に松明を結び付け、之に火をつけた。牛は熱くて堪らないから、牛狂亂になつて、敵陣へ突進した、田單の軍は其後から進んで、狼狽して居る敵を破つたといふのである。其他

にも此の火牛を利用して敵を欺いた計略は幾つも語られて居る。卽ち、夜中、山麓に兵を伏せ、火牛を山上に追ひ上げる。敵は之を見て、相手方の兵は山を越へて退くのであると考へ、之を追擊すると、豈に圖らん、伏兵の爲めに退路を取切られて大敗するといふのである。

更に又、死馬を利用して大難を免れた事は、『椿說弓張月』の源爲朝である。又は戰破れて戰場に燒き殺されたと思はれたが、豈に圖らん斃馬の腹を割き、其馬に身を投じて火氣を避け辛く生き延びたといふのである。事の實否は兎に角として、被服廠に縋つた人達の中にも凹地に這つて土氣を吸ひ、上の方は、他の人々の集團で火氣を防いだ者は一命を助かつたといふ、濡れた蓆(むしろ)を被つて居たら、火氣も毒瓦斯も防げる事であらう。爲朝が馬腹に潜んで難を免れた話は、馬琴の傑作であるにしても、例の犬山道節の場合と同じく、實際に行はれ得べき事で、獸類利用の一方法として面白い研究であらう。

秀吉が、山崎で明智方の勇將、四天王但馬に追ひ掛けられた時、逃げ場を失つて絕對絕命となつた。力と賴む加藤清正も我に續かず、但馬は鬼神の如く猛つて追つて來る。道は田甫中の一本畷手、今はどうする事も出來ない。普通の人間ならば膽氣沮喪して、阿兎(やめ)々と敵に首を

投くる場合であるが、そこは流石に一百姓の小忰より、遂に天下を取るといふ器用人、古今獨歩の英雄丈けに、最後の一瞬迄決して落膽もせず、自暴自棄もしない。自分は駿馬に跨つて必死に鞭を加へて逃げ走つて居るのだが、忽ち思ひ付いて此愛馬に身代りさせる術を考へた。

ひらりと馬より飛び下り、馬の頭を追ふて來る但馬の方へ向けて置いて、後から刀を持つていゝいしたたか馬の尻を斬り付けた。馬は驚いて一聲高く嘶くや、一本路を但馬の方へ向つて疾走した。はたと出會した但馬は、身を避ける餘地もない、手負ひ猪にも似た馬の突撃に流石の但馬も一寸後退せずに居られない。前足を上げて蹴ひかゝつて來る馬の死物狂ひの勢には手も出なかつた。やツと此方も踏みはだかつた出會頭に、强力無双の但馬は、大手を擴げて馬の前足を取つて、うんと金剛力を出し、之を引擔いで巖石落しに「えーツ」とばかりに泥田の中へ投げ込んだものである。馬はそれきり起き上らない。一息吐いて手の塵を打拂ひ、扨て向ふを見ると、猿面冠者は何處行きけん影もなし、もう逃げて了つた。

「猿にても早い奴ぢや」と、四天王も呆然と立ち盡したのである。斯うして、馬を放つて但馬を苦しめ、共隙に身を脫した秀吉の計略は、眞に當意卽妙で、忍術の極意應用の妙を發揮した

ものである。元來、秀吉は、古今の名將でありながら、他の信玄、信長、家康、眞田父子などの如く、忍術者を多く召抱へる事をしなかつたと言はるゝも、其實自分自身が草履取り奉公から立身して、多年の辛苦艱難の間に、忍術の事は能く／＼考へたものと見え、忍術者に頼らずとも、自分の才覺で何んでも出來ると信じて居た事であらう。今の隘路の難と言ひ、味噌摺り坊主の計略と言ひ、忍術者としても古今獨歩なのである。

獸類の利用は多方面に亘り、却々興味あるもので、且つ其の効果も確實である。早く言へば生き物を我が身代りにするやうなものであるから、生命が二つある形で、眞に重寶な忍術である。能く行はれるのは犬の利用である。犬は、元來、非常に敏捷であり、且つ怜悧な性質を有して居るものであつて、獸類中、最も能く人間の心意に通じて居るのであるから、之を利用するに當つては、往々に驚くべき成績を擧げる事が出來る。故に犬の利用といふ事は、一方、忍術者にも重要であると同時に、他方忍び込まれる方の側にも重要な用心棒である。犬を利用する事に就ては、後段別に詳しく述べるつもりである。私の甲賀流派では、犬の術といふ事を特に實用するので、之は最も理詰めな行き方で確實性が多いのである。從つて私の方では犬の研

究が一番重ぜられた。番犬、警察犬、軍用犬などゝ、當節、無電時代と言はるゝ開明の世にも犬丈けは益々重用されるのも、つまりは其の意味から來るのである。但し、其の詳細は後廻しとして、茲には犬を利用する方ではなく、敵としての犬から遁れる方面を考へて見やう。

勿論之は犬を利用するといふ積極的忍術に對應した逆手で、謂はゞ消極的なものであるから、忍術の性質からは一種の防ぎ手と見るべきものである。今考へて見ると、夜陰に人家を襲ふやうな曲者は、何よりも先きに此の犬といふものを恐れる。第一に之を處理しなくてはならぬ。處が犬は本能として其の嗅覺、聽覺、視覺など優れて居る。之を脱しやうといふは容易でない然し、萬物の靈長と言はるゝ人間は、又も一つ上は手であるから、いろ／＼と犬を避ける工夫をする。

つまる處それには二つの法がある。卽ち其一は犬を誘惑する事、其二は犬を亡きものにする事此の二つしかない。先づ犬を誘惑する方面を考へると、最初に、犬の鳴聲をして一旦犬を手元へ引寄せる。口笛や舌鼓ちで犬を呼ぶと、人間である事が判るから、犬の鳴聲を眞似て、他の犬が誘ひに來たやうに思はせるのである。飼主の方では別に怪しまない、夜の事故、此方の

姿は認められない。そして一旦犬を手元へ引寄せて何か餌を與へ、其犬を味方にして了ふ。之は懐けの術で、普通の場合には多く之が應用されるのである。

次に犬を亡きものにするといふのは、仕事の上では積極的な遣方である。即ち、前の如く、犬を誘ふて一旦手元へ呼び寄せ、之に毒物を與へて斃すか、さもなければ他へ引いて行つて、安全な處に繋ぎ留めて了ふのである。但しこんな仕事は、誰にも出來るのではない。迚も難事である。鳴聲を練習して犬を手元へ引寄せるといふは、忍術者の大仕事なのである。日頃の練習が必要である。

も一つ猫の鳴き聲を應用する事も妙である。猫八式に巧妙になつたら、忍び込みには持つて來いで、支那の鶏鳴狗盗に加へて、猫忍とでも言ひたいのである。嘗て一刑事が犯罪検擧のために、兇賊と目ざした者の家に忍び込み幾晩も張込んだのである。處が、陋るしい椽の下へ入つて、塵埃つぽい。長時間潜んで居たので、つい堪らなくなつて、ふつと一つ咳が出たのである。「さア大變！」、大罪を犯そうといふ惡漢の事とて、日頃用心はしてゐる、忽ち之を聞き咎めて、「何か椽の下に居る！」と、彼は耳を澄して疊の下へ氣を配ばつたらしい。

刑事は、失敗つたと思つたが、もう後の祭でどうにもならない。咄嗟に考へ付いたのは、猫の眞似である。早速手を輕く口に當てながら、小さな聲でニヤー〳〵とやつたのである。猫八如き巧妙なものではないが、大事の場合、一生懸命でやつた假聲が、どうにか成功したもので、兇漢は「あゝ、猫だつたか、もうあの捨猫が仔を産む頃だが、ハ、、、、、」と笑ひ聲。下に居る刑事はほつとして胸を撫で下した。

虫類の利用

虫といふと何となく人に一種の凄味を覺えさせる。虫類、長虫と來ると、見ただけでも不氣味だと顏を背けるのが常であるから、之を忍術に利用すると、妖氣が伴ふて人の心を惑亂するに足るのである。

兒雷也の蝦蟇の術、大蛇丸の蛇、白縫姫が蜘蛛を使ふなど、いろ〳〵の虫使ひが居る。皆是れ虫の利用として見るべきものである。或る意味からして古來忍術と虫類とは相伴ふものと考

へられて居る。之といふも、虫類は概して陰性なもので妖氣が勝つて居るから、神秘的な方面に利用されるにはお誂へなのである。虫が陰性なのは、大抵陰氣な、濕氣のある處に育ち、其形性や行動がはつきりしない。何となく陰險なものに見え、人の心を惑はすのである。

加之、世間一般に、虫類を異様なものに考へる習慣が存して居る。何んと言つても虫類程に氣持の悪い動物は他にないのである。そして蜘蛛の化け物が顔光を悩ましたの、蝦蟇の油は異狀な作用をするの、蛾の毒が恐ろしいのと言はれ、何れも夜陰に出沒するのが多い處から、人心に怪異な印象を與へるも當然である。

故に、思ひがけない場合に、一疋の毛虫が突然現はれたとしても、何んだか神變不可思議な幻想を誘はれる爲めに竦つと身の毛のよ立つことさへあるのである。そこで、忍術者は此の機會を利用する。忽ち相手の心中に虚が生ずる。其處へ一寸變つた行動をして見せると、一種の暗示がかゝる。幻覺錯覺が手傳つて精神が混亂する。もう腰が浮いて居るから、此方の思ふ坪へはまるといふ順序である。

虫の利用として最も能く知られたのは、大蛇とか蝦蟇、蜈蚣、なめくじなどであるが、最近

耳にした面白い一例は蝶を應用した話である。或田舍に一人の青年があつた。村内に二三の敵があつた。一日ゆくりなく彼は、此の敵とぱつたり出會つた。凶暴な敵故日頃から避けて居たのであるが、咄嗟の場合、避けも逃げも出來ない。殆んど當惑して了つたのである。仕方なく、いきなり、路傍の草原へ飛び込んで隱れやうとしたが、其の草の葉には、疲れ切つたらしい二羽の蝶々が留まつて居た。青年は捉へると、今しも惡鬼の樣になつて自分の後を追ふて來た敵の面へと投げ付けた。二羽の蝶々はびつくりしてひら〳〵と舞ひ飛んで、敵の面を蔽ふた。敵は異樣の感に打たれ、一瞬之に氣を取られて目を轉じた隙に、青年は草原の中を這つて逃げ、何れへか姿を隱して了つたといふのである。當意卽妙の忍術の意を體したものである。

尙ほ忍術の方では、常に虫類の特性を硏究し、其の行動を學んで巧みに敵手の眼を晦ます事を心がけなくてはならぬ。例へば吾人が滑り込みといふ運動を取らうといふ場合には、蛇の動作を用ゐる。又靜つと相手方や周圍の樣子を窺ふやうな場合には、蝦蟇の不動姿勢を用ゐる。又何か四邊に注意でもする場合には、蜘蛛の體勢を學ぶのであるが、是等の事柄は、忍術上に於ける體勢上の重要な心得となるのである。殊に初心者には大いに注意すべき點である。

魚屬の利用

魚を應用しての忍術は實際としては、其實物を應用するといふ事は殆んど無く、單に其の形體動作といふ點が取入れられたのである。今、魚の形狀などを考へて見ると、其處に却々面白い現象が發見されるのである。卽ち其體の前方と後方とが尖つて居るのは、進んだり退いたりする動作を敏捷ならしめんが爲で、其の左と右とに扁平(へんぺい)ではあるのは、水中で平靜を保つて居るのに便利ならしむる爲である。

吾々忍術者として學ぶべきは、此の特性を備へた形態動作である。則ち左の如き魚類の形態に見て、進むこと、退くこと、浮かむこと、沈むこと、右すること、左すること、動くこと靜まることを學んで、所謂忍術家としての應變體勢を會得すべきものである。そこで、魚の形態を應用したもので面白いのは、今日盛んに使用される空中飛行船の如きものである。又海中の惡魔として大いに恐れられて居る潛水艇や、或は魚形水雷の如きも、みな魚の形態に學んだ構

造である點から見ても、魚屬の利用といふ事は、決して無意味なものでないことが解る。
だが、魚屬利用としての實際的効用は、水中に於ける自在なる働きといふ事であつて、此一事こそは、古來魚屬利用の精髓として重んじられたのである。即ち水中の自在なる働きといふ意味は、敵の目を避けて水中に潜んで居る事、一歩進んでは、水中から躍り出てゝ敵を撃つことなどであるが、此の樣な動作は忍術者として必要で、是なくしては眞に完備した忍術者と稱する事が出來ないのである。

家康が、干鰯船に潜んで危急を遁れた話は、爲朝が馬の腹へ隠れて燒死を免れた話にも似て居る。更に後醍醐天皇、隱岐の島からお遁れ遊ばされた時に、舟人等は敵の追手を欺く手段として、帝を漁舟の舟底に隠し參らせ、其上に多くの干魚を積んだと傳へられるのであるが、是なども全く魚屬利用である。

心を以て心を制す

最後には我が心の作用である。即ち自分の心神と氣力とを以て相手方を制するのである。忍術には、是が根本を爲して居る。一部の人は忍術を一種の催眠術である如く考へるのも、全く此の精神作用である。臨機應變の智惠の働きに依つて身を隱すのもある、又度胸一つで相手方を取挫くのもある。かの武藏坊辨慶が、安宅關で富樫左衛門を瞞着し、無事に通り抜けたといふのは智術の一つで、矢矧の橋上で日吉丸が盜賊の張本蜂須賀小六を愕かしたのは度胸の一例であらう。次に大聲に叱咤して相手の度膽を抜くのがある。彼の高山彦九郎が五條の橋で强盜を一喝退治したなどはそれである。此の大喝叱咤といふのは人間の氣力の表象である。相手の氣を呑んでかゝるので、禪宗の一喝など其妙諦をつかんだ遣り方である。

要するに心を以て心を制するには、主として敵の心理を應用するのである。何れの忍法とても、素より相手の心理作用を對象として行はれるに定まつて居るが、併し此の心理作用は、全く相手の心を逆用するものであるから、中々に困難であるが、其代り能く之を應用する時は、是程確實な術はないのである。何よりも先きに相手方の氣合といふものを知らなければならぬ。咄嗟の間に、此の相手はどんな心術を有つて居るかといふ事を洞察しなければならぬ。此の洞

察さへ正しく確實に行はれたならば、此方の心術を以て相手の心を自由に引き廻すなどは、素より易々たるものである。

兵術家などの言葉に、敵の機先を制するといふのがあるが、若し能く敵の機先を制することが出來たとすると、最早や八分の勝利は此方に收め得たものであるが、之と反對に敵の爲めに機先を制せられることがあつては、迚も勝利は覺束ないのである。

忍術を學ぶ者が、容易に上達しないといふは、此の心的方面を疎かにするからである。大抵は先づ身體を隱す事を主として考へるからである。心から先きに隱すといふ事には少しも氣が附かないのが原因である。心を隱すといふのは何んだか非常に難かしいやうに聞えるが、要するに之は敵の心の中に、全く我が心を取り込めて了ふといふことで、つまり敵の或る弱い心の中に、自分の强い心を乘じさせて了ふのである。

勿論人間の知覺の活きなどは、心といふものがあつての事であるから、其の本元の心さへ取り收めることが出來さへすれば、形のあるものなどは容易く敵の眼から消滅させる事位は、さして難しい事ではないのである。それには先づ此方の丹田に存する氣を鎭めて、相手の氣を頭

から呑み込んで了ふといふのであるが、そう口でいふ樣に易々と他人の氣が呑まれるものではないとは、誰しものいふ事である。

併し實際に於ては誰人も、日常こんな風に隨分と他人を呑んで掛り、叉は反對に意氣地なく呑まれたりして居るので、人間が二人出會はして何方かゞ呑まれる、所謂、食ふか食はれるか二つ一つなのである。一寸した談判事の場合に見てもさうである。何となく、妙に自分の方が下目になつて了ふ事がある。是などは全く相手に氣を呑まれて了つたもので、其結果としては、何事にも始終下手に廻らされて頭が上らなくなるのである。叉路を行くにしても、ぐつと丹田に氣を入れて步いて居ると、先方から來る者が、妙に自分を避けて通るのである。處が是と反對に、若し自分の氣に輕い處があると、今度は先方が避ける處か、却つて此方が避けて步かなければならぬ結果となる。是即ち、呑むと呑まれるとの區別の存する處で、篤と思考しなければならぬ點である。

彼の印を結ぶといふ忍術の最頂點は、此の心作用の極致である、此事は後段に詳述する。

更に我が心を以て我が形を隱すといふ工夫がある。是は我が精神作用に依つて、自己の形態

を隱匿するといふのである。之は全く自身以外に何物をも應用しない場合の事である。例へば、今、廣々とした冬の枯野の中で大勢の敵に出會つたとすれば、此際賴むべきは全く自身より外にはないのであるから、此時に自分の形態を隱して一身を全ふするには、どうしても我が心一つに賴らなくてはならぬ。是が大變難かしい問題で、之を解決するといふことは、やがて忍術の堂に入る事である。

方法としては積極的のもので最も大膽なものでなくてはならぬ。それから此術を行ふ上には、常に其場合に相應した一つの機智を要するのである。必ず紛れの術が伴ふのである。卽ち今茲に多數の敵手が現はれて、迚も無事に遁れる事が出來ないと見た場合には、直ぐ速成假裝法を行つて我身を安全にするのである。例へば、自分は恰も其敵の人數の中の一人である如くもてなし、巧みに敵の目を晦ますが如き方法である。こんな事は出來そうもないと思はるゝが、是は昔から往々用ゐられて、大なる成功を收めたものである。殊に戰爭などの際に斥候などが、往々此の紛れ込み術を應用したもので、其の應用如何によつては至大な影響を與へ、時としては敵の前線に對して、重大な混亂をさへ惹起させる事が出來たのである。

要するに死地に入つて活路を見出すといふので、忍術の最後の極意とされてゐる。身を捨ててこそ浮む瀬もあれといふのがそれである。故に死の覺悟といふ事は忍術を通じて必要なもので、如何なる場合にも、如何なる手段を用ゐるにしても、心の底には常に死の覺悟を要する。さもないと、いざといふ時の放れ業は出來ず、空しく犬死する事とならう。

次に我が心の作用に依り、無形物を利用する忍術もいろ〳〵ある。其の一つは音響の利用の如きものである。之は、禪家の一喝とも多少異り、銃聲一發にて敵の心を愕かして其隙に付け入る如き、又雨や風の音に紛れて敵地を自由に出入したりするのが之れで、忍術者には絶好の機會である。

古來忍術には種々の方法があり、却々複雜なもので、忍術が一種の魔法であるとか、不思議の神通力であるとか言はれた。昔は今日の樣に、理化學といふものが普及して居なかつた。それでも其道々では夫れ〳〵特別な研究があつて、それが相當な理化學智識を開發した。修驗者や忍術兵法者などは、隨分熱心に之を研究した。彼の眞言秘密の法と言つた樣なものや、所謂武藝者などが使つたと言はれる幻術とかいふものなどは、皆な此の理化學的研究に依つて得

たものである。

佛者が或法で身から光りを發したり、又武藝者が忽ちにして雲を起し雨を降らしたりするのは、全く理化學的設備に依つて一つの奇蹟を示したのである。則ち我が忍術者なども此種の事を十分研究して、忽ちにして風を起し雲を呼び、或は萬丈の猛火を迸しらせ、凡眼では解釋の出來ぬ現象を見せた。是等は幻術と言はれたもので、而も其根基を學術の上に存立せしめて居るから、之は忍術としては最も面白い現象である。

古來忍術を目して一種不可思議のものと思つたのは、主として幻術と言つた様な觀念を有つたからである。卽ち此幻術に依つて何か呪文を唱へると、忽ち不思議な事が現はれる様に考へたのである。併し此の幻術も別段神通力でも魔術でもない。今日の科學から見ると何人にも出來る業で、巧妙な手段に過ぎない。昔の學者も「幻術といふは、まぼろしといふ事にて、之を一種の妖術の如く心得るは間違ひなり。まぼろしは、目亡ぼしにて、他人の目をほろぼすといふ義なり」と說いて居るのが至當である。昔から傳へられる忍術者の不思議な術は、今日では理化學の應用と催眠術の應用とも見るべきもので、決して神通力ではない。

それで、此の幻術が如何なる工合に忍術に應用されて居るかといふに、先づ主として敵手の氣を亂さしめるに用ゐられたのである。つまり敵を面喰はして其虚に乘じて自分の身體を隱すのであつて、其人の思ひ付かぬ事をするから、一寸考へた處では幻術とも魔術とも思はれるのである。古來の魔法などいふ事も、多くは此の類であつて、冷靜に觀察すると素より怪しむべきものではないのである。

陽忍の術——遠入りの事

凡そ忍術には陽術あり陰術あり、陽術といふのは、謀計の智惠を以て、己れの姿を現はしながら敵中へ入るをいふのである。陰術とは人の目を忍び、姿を隱して忍び入るをいふのである。此處には先づ千變萬化の計略を以て敵の隙を計り、忍び入るの術を示す。故に之を陽忍と號する。其の秘術は、臨機應變である。古への名將も、

「忍を本として時宜を以て變に應じ、用を新たにすべし。愚なる忍者は此理を辨へず、直ちに古法に拘泥して、更に圓玉の低きに轉ずるの意に通ぜざる故、敵城の堀が深く廣く、石垣の高く聳へたるを見ては、早や呆れて忍び入る事も叶はぬなどいふは、實にや、舟に刻して劍を求め、柱に膠して瑟を封するの類、嗤ふべし」。

と說いてある。溫故知新といふ事もあり、忍術の將來も爰にある。以下先づ陽忍遠入の方法

を說述する。

始計六箇條

（一）「四方髮」

といふのは、逢ふ處に隨つて髮を變ずるの計略である。即ち、時と所とに依り、出家、山伏、根來（ねごろ）もの、又は女の姿、其他國々に依り異る處の月額（さかやき）の剃り樣種々樣々に變ずるもので、これぞ四方髮を基として變に應じ改むる妙計である。

赤坂の城に立籠つた湯淺孫八入道を、楠正成が攻め亡ぼした時、恩地左近正俊が此の計略を用ゐた事は、史實に細かに記してある。又、高倉の宮が御謀反の時、長谷部信連が計略で宮を女姿に作り、鶴丸といふ童子に袋に物入れて擔はせ、六條助太輔宗信が傘を持つてお供をして、道で怪む者もなく三井寺に落着かせられたのも、此の四方髮の應用である。つまりは種々と容髮を變へて他人の目を欺く事をいふのである。

（二）「諸々の生業の藝或は物眞似等に至る迄、手練を積む事は、變言化姿の計略である」

是は敵地に忍び入る時、其姿や言葉ばかりを似せても、其の生業の藝を知らざれば、忽ち此方の計略は露現する。故に其の似せんとする者の姿や言葉は言ふに及はず、其生業の藝術を平生習學しなくてはならぬ。喩へば出家に似せんと思はゞ、其の宗旨の學を習ひ其寺へ往來し、近習して後、時到つて謀略の事を起す時、僧と密談し、若し敵方に於て、此計略に因つて我身の眞僞を知らんため探り來て穿鑿する事あらば、

「紛れなき僧籍の者である。」

と、堅く答へて呉れと約束を定め置くのである。斯うして始終の計略全く備り、而して後實行に取りかゝるのである。又虚無僧ならば尺八を能く習ひ、禪話も學ばなくてはならぬ。

秦の始皇崩じて、二世皇帝天下を治め、其威未だ盛なりし時、陳勝といふ者、魚の腹中に陳勝王と書いた札を入れて海へ放ち、又、呉廣といふ者は、狐の鳴く眞似を巧にしたので、彼は、夜に高い處へ登つて狐の眞似をし、「大楚起つて秦亡び、陳勝王たらん」と啼き號んだ。人々奇異の思を爲し、秦の世が傾いた兆であると思ふた。此勢に乘じて起つたのは、楚の項羽と漢の

高祖で、遂に秦を亡ぼしたのである。

（三）「常に諸國の風俗地形の模樣を知るべき事」

是は日頃心がけて、國々の風俗、方言、地理など、何處には山林川澤あり、何處は險阻又は平易なりなど、又は里程の長短、路の廣狹など、鹿路、細路、徑路迄も能く知り覺えて置く事が必要である。是等の事を兼て知り置く時は、譬へば周章の場合にも、人に後れても必ず其處に到り易い。又他國人の風を似せて敵方へ入る時、敵が其國の地理風俗を問はんに、之に對して審かに答を爲さん爲である。

（四）「兼て諸方の城主の印書を寫し置くべき事」

是は常に諸方の城主、大將方の印を求め置く事で、それに依つて計略を行ふ事が出來る。即ち其人の印書を僞作して謀に用ゐるのである。印の相違有つては計敗る。又能書の凝筆を能くする者を抱へ置くと、敵大將以下の筆を凝するに自由である。

（五）「兼々諸大將の旗、纒、指物、立物、常紋等を能く覺ゆべき事」

右の事を能く覺えへて計異を以て忍び入りたる時、敵が色々の事を尋ね問ふ時、能く之に答

へる事が出來る。又は隱忍紛忍等を用ゐて忍び入り、此處彼處に潜行する折柄、敵に見怪まれる時、當分の抜け言の用を爲すのである。

（六）「兼て名と藝とを深く隱くすべき事」

凡そ忍者たらん者は兼て大將へ訴へ、治世の時にも常に忍者の號を深く隱さなくてはならぬ。親しき輩と雖も、假初にも此術の勝劣を言ふ事勿れ。亂世になれば、敵が味方にもあり、味方忍が敵でも在り、又計略をもつて忍び入りたる時、常に我を見知りたる者敵方にありて、彼こそ誰某の忍び者よなどゝ言はるゝ時は、折角の謀も詮無きのみならず、果ては我身を亡ぼし、主將の害となる事がある。故に常に名と藝とを深く隱して、隱遁者や平士の如く裝はなくてはならぬ。かくして亂世に及んで、忍術を用ゐる事が出來る。六韜曰く、

「鷙鳥將さに擊たんとする時、早く飛んで翼を歛め、猛獸將さに搏たんとする時、耳を弭めて俯伏す。聖人將さに動かんとする時、必ず愚色有り」

と、老子曰く、

「大將は智なく、大謀は謀なし」

孫子曰く、
「善く戰ふ者は智名なく勇名なし」
と、忍者たらん者は、此語の意味を專ら心としなくてはならぬ。

桂男の術三箇條

(一)「桂男の術といふは、月中に桂男のある意たるべき事」
言は、叛逆すべき者、敵となるべき者を常により能く見付け置きて、其城中陣中家中などへ、譬へば桂男が月中に在るが如くに、常に忍者を入れ置くべし。其忍者たらん人には、兼々親しみのなき者、智の深からざる者、信少なき者などには、中々其任を授くべからず。親兄弟又は甚だ親しみ厚き者中にて、智信勇の備りたる者を撰し、其上、其人の人質を取り、且つ誓紙を書かせ、重々約束を定め遣はすべきものなり。
(二)「少女生れていそ穴丑を入れ置くべき事」

是は親しき者の中に容顏美しき兒童あらば、深き計略を以て手を廻し時節到來の時を窺ひ、大功を奏すべきものである。但し此術は蟄虫又は遁士となつて居なくては、いざといふ時、人に面體を見知られて露現する虞れがある。蟄虫とは君に祿を受けながら、君臣相約して其身が、君に仕ふる事を深く隱し、たとへば都の邊とか大阪などの様なる處に、何となく初めから住居し、時に至つて窃かに君臣評定の上にて、敵の中へ入れ置くをいふのである。

此計略の人は片田舍の人口の少ない處に住居しては、却つて人に怪まれるから、成るべく多くの人が集まる處が宜しい。次に遁士といふは、片田舍の草深い處に引籠り居りたる者の、才智有つて信厚く、僞らざる者を聞き合せて、高祿を與ふる約束を以て潛かに召出し、末頼もしく言ひ聞かせて、其時に至つて俄に敵內へ入れ置く者をいふのである。或は穴丑となつて敵城近邊に町家在家等に住し、常に敵の家中供に親しみ、味方寄來る折柄は、當地に居合はしたるこそ幸なれなど言ひて、敵に奉公の身とならん事を望む時、敵方にては鴆毒とはゆめ〳〵知らず喜び合ふ事疑ひなきものなり。信長公の家臣に十五六兒童の勝れて手跡の器用なるを、今川新介方へ奉公に出し給ひ、新介が手跡に少しも違はず能く似せて後に謀書を認め、主君義元と

不和になし、今川家を亂して終に義元を滅ぼせる事是れ確證あり。

(三)「相談人、通路へ置くべき事」

右の如くして味方の者を敵の中へ入れ置きても、扨て味方の大將へ通路なくては相圖が出來ない。故に商人出家等に姿を變じて、一人は敵城の近邊に居て諸事談合し、敵中に入つて仕へる兒童の言葉に樣體を見聞し、委曲に事を内通する手順にしなくてはならぬ。又一人は、味方へ往來して其樣體を主將に通告するのである。殊に兒童を奉公させて置くのでは、其の親とか兄とか稱して敵城の近邊に住まはせ置くのである。

如影術三箇條

(一)「如影の術とは、形あれば影の應ずる如き事」

今、敵が叛逆を起するの兆仄(ほの)かに聞えると等しく、影の形に應ずるが如く、速かに敵の城下へ行つて奉公を望むのである。之は、敵の叛逆謀計が、未だ起らぬ中に出かけるのである。若

し行く事遲ければ、敵の心に不審を起させて、奉公を許さぬ事ともならう。故に初めから人々に見知られ居る者ではいかぬ。鍪虫や遁士を差向けるのである。

（二）「通路へ置くべき事」

組の中の誰かを、道心者又は商賣人に姿を變へて城の近邊に置き、味方主將への注進の爲め、又は時の宜しきを見計らひ引入れる爲めである。

（三）「若し敵方から不審を起し、怪む事ある時は、假女假子の術を行ふ事」

假女假子の術といふのは、計略を爲して假りに妻子を拵へて一緒に連れ行き、敵中に入つて人質とするのである。人質が無くては入る事を許さない様な敵に對しては、此の假の妻子といふのを作るのである。

くノ一の術

（一）くノ一の術といふは、三字を一字とした者を忍びに入れる事をいふ。

男では入りがたいと見る時、くノ一即ち女を忍びに入れるのである。凡て女は其心姦拙にして智も口も淺き者故、人選に十分注意を要する。そして誓紙を堅く改めさせ、能く合圖、約束を言ひ聞かせ、其後よき方便を以て敵の奧方へ遣はし、或は其從者の從者になりとも仕へを望む時は、事成らむといふことなし。

（二）「隱簑術を以て入るべき事」

之は前のくノ一と合圖をなした上でやる術である。女が已に敵將の奧方へ奉公が叶つて後、折りを見て奧方へ申入れるには、

「手前、宿に預け置きましたる木櫃を取寄せたいので御ざいます」

と、何氣ないさまに言ふと、大抵の人は欺かれるので、況んや奧方に於ては猶ほ疑心など起さず、容易に之を許すものである。扨て許しを得たとなると、前以て其時刻を門々の番人へも斷り置き、愈々其木櫃を入れる時、忍者は其中へ入つて行くのである。但し木櫃は二重底にして、上には衣裳を入れ下を重くするのが宜しい。孫子に、

「始は處女の如く終りは脫兎の如し、敵拒ぐる及ばず」

といふは此意である。

尙ほ、此の隱簑(かくしみの)の術は、敵方に我を見知つたる者が多くて、別して方便を行ひがたい時の謀計である。至極の秘計である。右の術を能く用ひて忍び入る時は、守り嚴しき名城とても、必ず望みを達するのである。

里人の術二箇條

(一)「敵國の里人を入るゝ事」

是は敵の城へ忍び入らんと思ふ時、味方の勢未だ寄せぬ前に先づ敵國へ行き、其地の日頃不平で居る者の中、氣がさ有りて武勇の名を得んと兼々思ふ者、又は其國の大將、頭人、奉行等を曾て恨み憤る者あつて、時節到來を待つて居る者、或は味方に親族緣者などのある人を聞き調べ、當ほ其時、宜き方便を運らして、此の如き人を味方に召寄るか、又は彼が宿所へ行つてなりとも、先づ金帛を厚く賄(まひな)ひ、若し軍功あるに於ては、知行何程宛て行はるべしと約して我

が主將の朱印を之に與ふる。其上にて人質を取り、誓紙を固くし、いかにも深計を以て彼を敵城へ入れるのである。敵將の方では、素より自分の國の者であるから之を疑はない。故に其の入り易き事我家に入るが如きものである。

（二）「里人の從者と成つて忍び入る事」

是は里人不成功か、又は若輩者かの場合に、我は其里人の從者と成つて敵城へ入り、諸事談合して味方の大將と合圖を定め、能き時分に放火するのである。楠正成が、相模入道の下知に隨て紀州安田の庄司を退治の時、勝尾山に陣を取つて敵の位を見る事三日、其後、野伏共を召して、

「此邊に知りたる野伏や有る」

と問ふた。或野伏答へて、

「手前の知り居る者候」

とて八人連れて來た。正成は金銀を多く與へ、

「是等の野伏を連れて敵陣の中を見て參れ」

といふ。

「易き事に候」

とて、其中六人を連れて敵陣へ忍び入り、一日中紛れ居て次の夜歸り來り、敵の様體を物語る。正成は彼等を一人宛別に問ふて居た處、何れも同じ答である。扨ては疑ふべからずとて夜討をして勝利を得た、是等も里人の術である。

身虫の術二箇條

（一）「身虫と成るべき者を見定むる事」

身虫とは、敵に事へ居る者を味方の忍者となす故に、敵の腹中の虫の其身を喰ふに似たといふ意味である。先づ此者を目利きし、選定する事が至つて大事である。若し目利き違ふ時は、却つて災起る事明かである。其見定めやう如何にといふに、一つには、其人の前代が罪無くして刑罰を受けたとか、又は小さい科なのに、大きな刑を受けて死んだといふ其の子孫に當る者

なれば、心底に主を恨むる事深い譯である。
次には、高位に昇進すべき筋目の者で、且つ才智ある人なるも、傍輩の妨げに依つて位ひくく、口惜しく残念に思ひ居るらしい者。
第三には、大なる忠義功名有りながら知行薄く、あはれ他の主君にも事へて立身をもすべき者を「何んの忠功もなく唯だ阿諛の讒臣を厚く幸し、去りとは暗主かな」と常に思ふ者。
四には、智恵賢く才ある者なれど、大將と和合せず、やゝもすれば忿りを蒙り、且つ賤しき官に仕はる者。
五には藝能世に勝れたるも、賤官に役せらるゝに因て、仕を致さんと願へども許されず、若し他の君に仕へるならば之を妨ぐべき樣態故、是非なく默止し居る者。
六には、父子敵味方に分れ、戰に及ばじ、親子兄弟共に對敵とならん事を悲むもの。
七には、慾心甚だ深く金銀高知行を望み、又は反覆變詐にして兼々二心ある者。
八には、父の名跡悪しく立つて、外聞宜しからず、口惜く思ふ處ある者。
右八ヶ條の見定めは、大體の事をいふのである。是を基として能く工夫を重ぬるに於ては、

其人の心底を考へ、謹んで之を定め、其上にて時宜の方便を行ふべきものである。

（二）「身虫となすべき術の事」

上に所謂、身虫となすべき者を見定めたるも、扨て此方の計略を知らすべき術は、一層難かしい。若し妄りに其密事を通ずる時は、大なる災害となる。故に其の身虫と成るべき者を見定めて後、身虫とならでは叶はぬ様に計る事が肝要である。其方便は區々なれど、心得の爲に一二を記す。

先づ我が主將と相議して金銀多く給はり、富める浪人と姿を變へ、其見定めたる者の近邑五六里の間に居宅を定め、其上にて彼と緣を結んで、此方の世帶が、彼富むならば、緣を結ぶ事も速かに行はれる。扨て交りを厚くし、彼が好事を察して其好む道を以て便とし、金帛を厚く賄ひ、いかにも交りを深くし、其中何か物語りの序に戲言などに托して、以て漸々に彼が心底を誘ひ見て密談に及び、高知行の朱印など取與へ、父母妻子などを人質に取り、誓紙を堅め、約束合圖を態く定めて用ゐると萬事叶ふものである。凡そ人は老少に限らず、色と慾とを離れて忠義を思ふ者は世に稀れである。酒色を以て交を求むるに實を現はさゞる者はないのである。

螢火術三箇條

（一）「敵方に猛威を振ふ謀臣ある時、僞つて其人の謀叛の廻文の隱書の反翰を持ち行き、或は其謀臣の方へ味方の大將よりの相圖の書札、又は味方に背きて敵方に成りたる者あれば幸として此者隱謀を以に入者に作りて相圖の書札を調へ持ち行くべき事」。

之を喩ふれば、漢の韓信、唐の玄宗の安祿山、我邦にては源義經などの如く、謀計智略の人、敵將の中に在つて、若し此人など謀叛せば天下危かるべしなど、敵方の諸人危ぶみ思ふ折から、能く時節を窺ひ考へて、僞つて其人の謀叛の廻文の隱書を調製し、又味方の中に其人の一族か若くは朋友か、兼ね〴〵親みたる人か、さも徒黨もすべき程の人と、諸人も思ふべき人の方へ內通の隱書を調製して、一人の男を忍者に仕立て、彼の隱書の返翰を衣の襟などに封じ入れ、敵城の近邊に怪しげなる體にて行く時、敵是を見咎め、忍者なりとして訴へ出づるに、直ちに捕はれて是を責め問へども一應二應にては答へず、强ひて是を責め問ふ時、是非なく白狀して

彼の隱書、返翰など取出し、其上にて此人謀叛の企を現はす。此術に付きて隱書の書き方、又敵に見咎められたる時の模樣、白狀する時の模樣は書面に現はしがたき重々口傳あり。

或は次に述ぶる袋飜の術を用ゐて、敵將と其謀臣と兩家へ二人別々に仕へさせる。そして謀臣の家に仕ふる者に、謀臣の隱書を懷中させて味方の將へ持ち來らしめ、わざと途中で捕はれ、敵將へしかぐゝと其旨白狀する。一方には、味方の將より右の謀臣方へ書狀として、裏切り合圖の事を丁寧に書きつくし、衣の襟の中などに入れて敵城の近邊をのたれ歩く中態ざと捕はれ、敵が責め問ふ時、前と同じ樣に白狀する。或は味方を背いて敵の旗下に成つた者がある時には、其者の方への隱書を作成して裏切りの相圖の書を持たせ遣はし、怪しき風體を見せてわざと敵に捕へられ、敵責め問ふとも、一應にては答へず、責が度重つて後、彼の隱書を取出し、其上にて此人降參の事は實の降參に非ず、後に裏切を爲し又火を放たん爲である、と斯う答へるのである。

大體、此螢火の術は敵方の樣體心腹迄を能く知つて後、いかにも人の心に應じて此術を現はすのである。

（二）「紛忍隱忍等にて窃盗に入る時は、何時も敵の謀臣の方への名宛にて裏切相圖の隱書を調製し、衣の襟の中に入れ行くべき事」

其意は、螢火術の心なくして紛忍隱忍等にて敵城へ忍び入る時は、早晩敵の謀臣へ名宛てにして、裏切り相圖の隱書を調製し、衣の襟の中などへ縫込み行くのである。其故は、隨分密計を廻すとも、若し露現し捕はるゝ時、敵は必ず窃盗に來た理由を問ふ。いかに責め問ふも白狀してはならぬ。責め問ふ事頻りなるに及んで、始めて口を開き、我が一命を宥し給はじ御方の一大事を申上げん。此事、我身若し白狀せざるに於ては、御方の危難は墻壁の中から起る事となるであらう。只今起らんも計られず、故に我が一命さへお赦しにてば、只今白狀すべし。唯だ死刑に行はるゝ上は、いかに責めらるゝとも白狀仕らずと言つて止むのである。此に於て敵必ず言はん、汝が一命を宥さん程に一大事を有の儘に白狀せよと。此者又答へて、

「一命御赦免の事、御誓紙を以て虛言なき旨を確めたい」

といふ、敵も一大事の由なれば我が申す處に隨ふであらう。其時、彼を人無き處に伴れ行き、彼の封じ込みたる襟の隱書を取出し、

「御方の誰々反り忠致すべきの約束にて、何月何日攻め入るべき爲め、其時節相構へて裏切せられずとの意を傳へる爲めの使者として、拙者忍び入つた次第に御ざる」

と、前後の辻褄を合はして告ぐるのである。

但し此の術は、能く敵方の戒容を內々聞き屆け、いかにも似た事を隱書にも載せ言葉にも述べなくてはならぬ。萬一、敵が承知せず、何んで然樣の事あらん、中々僞なるべしと言ふ樣な場合には、之に答へて、

「然らば、我等の使として人を差遣はされよ。其、誰々方より內々に遣はしたる密書は誰某の手に有り、取寄せて御覽に入れませう」

とて、愈々使者を差立てる事となる。兼て敵方の印書少しも違はぬ樣に似せて反り忠の書を認め置き、若し要用の節は人を使として取らしむる事を前以て約束してある事故、此時に當つて共計がぴつたりと合ふ。斯うなると大抵は死を免れ、又敵の內亂を起す事もあらう。若し、此謀は成就せずとも、敵軍互に疑ひ合つて敗軍の前表ともなる。

（三）「大將の恩賞薄き者を螢火の術を以て忍ばすする時は、表裏を以て忍を使ふべき事」

凡そ螢火術を使はする者は、大將の恩賞厚く蒙り殉死をも爲すべき程の者か、或は子を多く育んで貧なる者かを使はすが宜しい。若し恩の薄き者又は義命を知らぬ者を使はす時には、必ず心變りして却つて味方を亡ぼすべき計略を爲すものである。此事極めて大事である。孫子曰く、

「聖智に非ざれば間を用ゐる能はず、仁義に非ざれば間を使ふ事能はず、微妙に非ざれば、門之實を得る事能はず。三軍の事、間より親しきはなく、事は間より密なるはなし」

と。故に恩賞薄き者を忍者として用ゐるのは大いに宜しからず、併しながら、事情止むなくして之を用ゐる時には、又別に慮りを要する。

元來、其れには性躁剛にして饒舌多辯、多く事に堪へず、移り易き者を撰んで使はすのである。其時、其者に計略を授くるには、萬端、計略の裏を言ひ聞かするのである。例へば西に向つて攻めやうといふのを東に向うと言ひ、北は南といふ如く、諸事裏を示して、告ぐる事誠しやかにするのである。

すると、右の忍者は、元より性躁急なる者故、必ず敵中に入つて捕はれ、萬事白狀する時は

一命を宥し高祿を與へるが、若し白狀せざるに於ては、其身死刑に行はると責められる。こんな場合には主の恩惠厚き者ですら、義の足らぬ輩は、大抵反間と成るが常である。況んや恩薄く事に堪へず、意淺く多言なる者は、味方の豫備其地何事も敎はつた儘に白狀する。敵又之を信實とするから、敵方の計略は皆反間の反間となる、從つてそれは合せて味方の勝利となる事明かである。

袋飜術二箇條

（一）「袋飜といふは、心を反覆する事袋を裏表に覆すが如くなる事。」

其意は、忍者敵方へ往きて因緣を求め城中に入り、

「某は伊賀國の者で、幼少の時より多年忍術を手練仕り、如何なる城陣へも忍び入る事、鵜の水に入るよりも容易く覺ゆる故、若し召使はれ候はゞ如何樣の城陣へも忍び入り申すべし」

とて何か特別の業を現はして見せ、

「一層奥深き事は秘密故御覧に入れがたし」

と説く。然る時は、亂世ならば必ず望み叶ひ、其の家臣に取立てらるゝ必定である。扨て、程經て味方が此城へ押寄せ來る時、又最初、味方の將と豫て約束の上の事故、味方の陣屋などに無用の小屋などを掛けさせ置いて、其に放火などして手柄を立て愈々敵に心を許させ、同時に、味方へ往來の度ごとに敵方の事思ふ儘に主將に告げ知らせ、宜しき時節に臨みて敵城に放火し、又方便を以て夜討などし、或は待伏せの反り討などし、或は付入りに敵城に入つて卽時に攻め落すのである。此術は、袋を裏へ反して又表に反すに似て居る處から、袋飜の術と號す。是等の方便を行はんとせば、兎角忍者は常に人に見知られぬやうにするが肝要である。つまり遁士として世間から隱れた生活をして居なくてはならぬ。

(二)「右に述べた術が行ひがたい場合には、兼て敵の城陣へ出入りする者の從者と成つて出入すべき事」

凡そ敵の城陣へ出入りする者は、出家、醫者、座頭、猿廻しなど、職人商人の類である。其外、敵城へ出入する者を聞き定め、其者の從者となつて打連れ、敵中に入りて後、色々の計略

を運らし、或は讒言等を以て敵の家中の內亂を起し、互に疑の生ずるやうにし、時至つて後、兼て主將と契約の如く放火するのである。

康安元年に筑紫の博多にて、菊池肥後守の家子、城越前守が、方便を以て松浦黨を夜討にし大勝を博した事、委曲史實に殘つて居る。是等の術すら、昔は讒口を構へて行つたのであるから、況んや平生敵の城陣へ出入りする者の從者と成つて入いる時は、入られぬといふ事はない筈である。

天唾術二箇條

（一）天唾術といふは、天に向て唾する時は反て我身に降る如く、敵より味方へ入りたる忍者却つて敵の害となる事をいふのである。若し敵方より忍者入り來て味方之を捕ふるに於ては、則ち忍者に向つて、

「汝若し反り忠などの志あらば、汝が一命を宥すべし、其上高知行を與ふべし」

など色々言を盡して問ふに、かの忍者之を承知するに於ては、即ち大將の知行朱印等を與へ、彼が妻子等を窃かに呼取り、誓紙を書かせ、彼が心中全く疑ひなきに至つて敵方の様體審かに問ひ知り、之に依つて萬事の計略を案出するのである。且つ彼を以て敵へ忍びにやる時は、敵は自分方の忍者として油斷する故、萬事の計略思ふ儘に能く中り、敵を滅ぼす事容易である。此術を孫子は反間と名付け、反間ほど能き術はなしと言つた。

(二)「敵の忍者が味方の城陣屋の中へ參り、或は塀下、石垣の邊へ來る時は、其れを知らざる體にて、却て我が城中の計略等を僞り聞かせて、反つて味方の忍者となすべき術」

今、敵の忍者が味方の城陣へ忍び入りたるを見付けた場合には、態ざと僞り、之を知らざる風に裝ひ、我が軍中の事共諸事見聞する様に計るのである。彼其事を眞と心得て歸り、敵中へ其儘告知する時、敵將是を誠と思ひ、其言に相應する軍の用意計略を立てるのである。

然るに此事たるや、元來味方の方で敵の忍者と知つてわざと軍中の事を、裏は表に表は裏に僞り、間違ひを以て計つた事故、敵の目算は外れて敗軍するのである。此術は敵の忍者が、味方の石垣邊迄來ても之を捕へる事の出來ない場合か、又は我が城陣の中へ忍び入いつた事は知

れども、其忍者が何れの者かしかと知りがたい時、右の謀計を高聲に語り、或は其形容を見するのである。此術と事とは別にして心は同じきものである。

弛弓の術二箇條

(一)「弛弓の術とは、弓を張る時は三日月形になると雖ども、弛むる時は本の如く反へる意也」

凡そ忍者敵に捕はれたる時は、表面はいかにも敵に身を委ね順ふとも、裏面は心底堅く義を守り、反間を爲さゞる事、弛みたる弓の如くなるに依つて此術の名とするのである。初忍者が敵の虜となつた時、敵方から反間になる樣勸められたなら幸ひ、若し勸められなかつたら、此方から進んで反間になる事を願ひ出づるのである。

「某は忍者渡世上止むなく一旦は彼方へ奉公の身となつたやうなもの〻、彼方の所行は天理に背き、其上士たる者の主人と仰ぐべきの人にもあらず、行末賴もしからず、且つ我々への命令

盡く表裏のみにて信實に非ず、某不肖なりと雖ども、向後御爲に忠節を致さん。一命を宥助し給はらば、幸に御ざる」、

と言葉巧みに申述べると、敵は喜んで、

「然らば一命を宥助しやうが、但し汝逆心なき誓文を書き、人質を窃かに召し越せよ」

と言はん、其時申すべきは、

「人質の事は味方の大將に取られ候上は、早速には召取る事困難ならんも、行末計らつて召取り御渡し致しませう。然るに、某此度、二心の事少しにても味方へ風聞あらば、向後此方の計略の妨げとなるべし、誓文の事は、某固より所望の處に御ざいます」

と答へる。尙ほ、

「某二心なき證據をお所望とあらば、兼ねて敵陣の樣子は知つたる事故、今夜にも參つて放火して御覽に入れませう」

と。そこで兼て計り置き、萬一虜(とらわ)れとなつた時の計略として、諜し合せてある味方の小屋などへ放火し、又は新入り罪人の首などを取つて歸るのである。かくする時は敵も遂に心を緩め

る。其の潮合を見て味方へ往來し、其毎に主將と合圖を定め、敵城に放火し、敵の大將を討取る事も有らう。

(二)「味方の忍者を敵方にて搦め捕つて、味方の城の近邊迄連れ來り、謀を言はしむる事あり、其時の心得の事」

敵が我方の忍者を搦め捕り、味方の城陣の塀際柵際などへ引來つて計略を白狀さする事がある、其時は敵の命令通りに逐一言ふが宜しい。何故ならば最初敵陣へ忍び行く時、主將と約束して、萬一捕へられた時の事迄打合せて置くもの故、其際は敵の命に從ふとも、兼て合圖の事故、此時に當つて味方更に動轉すべき理由もないのである。此の如くして敵に心を緩めさせ、時節到來せば敵の城陣へ放火し、又は讒口などを構へ、或は敵の首など取り退き去るのである。

山彥(やまびこ)の術

やまびこの術は、實は手を拍つ處から起るのであるが、響の音は此と彼とにあり、君臣の間

此の如くにして忍びに出かける事をいふのである。今、忍者が、初めより此君に事ふる事を世人みな知るから、敵方へ行つて出仕の望をなす事も成しがたい。又一亘の計略を以て敵方へ出仕するとも、終には隱謀露現して身死するのみならず、却て味方の害となる事是より大なるはなし。

故に此君に事ふる事世人能く知る故に、君臣密談の上にて、併せて臣大なる咎をなし、君之を聞いて大に嚴責し、牢獄に下し、或は家宅を沒收し、追放などして君臣相爭ひ、一合戰して五人七人と雜兵を打殺し退きなどして、其上にて敵方へ行き、右の詭計を巧みに利用し、如何にも眞實の情を見せ、疑の無きやうにして敵の方へ出仕を望む時は、敵も事ふる事を許さずといふ事はないであらう。

かくして敵の臣となり、後色々の忠節ぶりを盡し、老中出頭人等を種々財寶をもて賄ひ、其人々の好む道を以て敵の腹心に取入り、或は敵將と密談し、味方へ忍び入り放火などをし、其往來の度びに味方の大將へ敵方の樣體萬事通知し、時到らば、敵將を討つて退くか、或は味方に外より攻めさせて、城陣の内より放火するか、兎角其の時の宜に從つて事を爲すのである。

新田義興を竹澤右京亮が謀つて討つた事、又は赤壁の戰に、呉の孫權の臣、黄蓋が苦肉の謀を用ゐて、遂に曹操の大軍を鏖殺した事など之に類したものである。

陽忍の術——近入りの事

近入りとは、敵と對陣して戰爭狀態の時、陽術を以て忍び入る作法を記したものである。固より能く謀る者は、未だ兆はれざるに謀るともいふ通り、戰爭狀態にならぬ以前に於て、前に述べた遠入りの術を行ふに如くはないのであるが、すでに近々と對陣の時は、用心嚴しきに因つて危き事ではあるが、止むを得ず此術を用ゐるのである。

略本術七箇條

（一）敵の城陣の樣體は言ふに及ばず、敵方の老中、物頭、奉行、近習、又は出頭人、或は軍奏者、使番、門番等の姓名又は居宅の在所迄能々尋ね問ひ置く事が肝要である。其外右の衆

の一族因緣の人の筋目、何れの國里の者で、如何樣なる家業であるかなどに至る迄、兪々能く知つて置く事。孫子曰く、

「凡そ軍の擊たんと欲する所、城の攻めんと欲する處、人の殺さんと欲する處、必ず先づ其守將の左右謁者門者舍人の姓名を知るべく、吾が間をして必ず之れを索め知らしむ」

と。此の如き事を知る時は、一つには時の智略の用ともなり、二つには其親類方よりの使などに變じて忍び入る時の用ともなり、三つには、讒奸を構へ、敵方を離間するにも用ゐられる。若し之を知らざる時は、計策を立つる基本もない事となる。

(二)「右の樣體を問ひ知る術の事」

前條に述べた樣な事を知る爲には、どんな方法を取るべきか。夫には、敵方を背いて浪人となつて居る者か、又は敵方へ出入りする出家、商人、座頭、猿樂の輩に兪々近づき問ひ、逐一書き記し置くのである。若し知らざる時は、敵城近邊の市人、百姓などに能く問ふべく、又味方籠城して敵攻むる時か、或は互に他國にて對陣の時は、敵の城陣に近い山村へ行き、敵方の芻苅りの者、樵夫等に便り、宜き計略を以て問ひ定むるが宜しい。故に矢立を懷中して聞くに

従つて書き留めなくてはならぬ。

(三)「我が在所を僞る爲に他國の風俗方言迄を能く識るべき事」

今若し自分は伊賀甲賀の者であるといふならば、敵は用心する事となるから、能く知つて居る所の他國の邑里(むらさと)を、自分の在所であると僞るがよい。併し其風俗や言葉が合はぬ時は、敵愈々怪み不審を爲すものである故に、其國風や方言を能く〳〵知つて置かなくてはならぬ。

(四)「諸國の城主領主等の印形を持ち行くべき事」

此事は上段に已に述べたのであるが、近入りの術に專ら用ゐる事があるから、爰に再説する。

(五)「假の妻女を連れ行く事」

若し連れ行かざる時は、旅中に之を求める事。

(六)　凡そ忍術は、何れも同じ意味ではあるが、別して、陽忍の近入りの場合には、敵の動作や言語など、初めから能く〳〵考へて行はなくてはならぬ。

(七)「近入りの時は猶更に相圖、約束を能く定むべき事」

凡そ相圖といふは、夜は飛脚火、入子火、一町火等の類、又晝は、狼煙(のろし)、旗、貝などである。

約束といふは、相圖を見する時、大將、鼓を打ち、凱聲、鐵砲の聲を夥しくして攻むる事の契約である。已に敵の城内に忍び入つて放火しやうとても、右の如き相圖なくしては成功しないのである。

敵陣屋へ忍び入る時の用意

(一) 敵が陣屋に居る時、忍び入らんと思はゞ、前夜潜かに行きて敵の提灯の紋を能く見屆けて歸り、同び形の提灯を作り、翌日の夜、之を懷ろにして敵の陣屋近くへ行き、手早く其れに火を入れ、張番、夜廻り、或は篝火番等の姿に變じ、機を見て忍び入る事。

(二)「物見の術を用ゐて、敵が夜討に出る事を知つたならば、一人は其旨を味方の大將に告げ、其餘の者は敵の出づると片互ひに敵陣に忍び入る術」

凡そ敵が夜討をしやうと思ふ時は、城内が平日と違ひ、火の光りが多くなるとか、又は犬や馬の嘶き吠ゆる聲又は例になく柏子木の音もなく、夜番夜廻りの戒めの聲も聞えず、凡てが靜

かであるので察せられる。又は小物見や、旗差物の動亂の體などで察せらるゝものである。其時忍者は敵將に近き茂林、深草の中に潜んで敵の出づるを待ち、敵が出たら、片互ひに城内へ入るのである。此時には忍び入るに三つの利がある。

一には、凡そ夜討は敵の不意を計る事故、潜かに城を出づる事とて、兎角は敵を謀るのみ考へて、却て敵に謀らるゝ事を考へない、故に此時忍者の來るべしとは夢更ら知らずに居る。

二つには、夜討出陣の時故、事繁多にして遽(あは)たゞしい爲に、心取紛れて微細の穿鑿迄は屆かないのである。

三には、城門を出入する者が多いから、どのやうにもして忍び入るに便である。

以上三つの利有る故、敵の合詞(あひことば)を知らなくとも、勞せずして思ふまゝに忍び入る事が出來る、且つ城中の敵が少ないから、第一放火し易い。其虚に乘じて却て味方より攻むる時は、敵方拒く者少くして敗るゝ道理。故に此の參差(かたたがひ)の術は近入りの最上極秘と言はるゝ。

(三)「姿を變じて賤卒となり、或は離れ行く術の有利な事」

凡そ姿を變じて賤卒となる術が、何故に有利なるかといふに、甲冑を着た立派な士は人目に

立つもの故、必ず敵方に見咎められる。故に紛れ忍には、賤卒と姿を變へるがよろしい。賤卒雜兵は、人の目に立たず、心を惹かぬものである。故に忍び入る事も容易である。但し敵の陣中城中無事で、靜謐な時には、却つて賤卒が怪まれる。兎角時宜を察して機に臨んで行はなくてはならぬ。

昔、近江國姉川の合戰に、朝倉義景の臣、遠藤善右衞門といふ者、目に立つたる甲冑を着し首を提げて、敵將織田信長の勢に紛れ入り、信長と差違へて死せんものと志し、陣中を駈け廻つた。それを竹中久作といふ信長の家來に見附けられ、組伏せられて首を取られたとある。是などは、遠藤が、賤卒と姿を變ずる術を知らぬ不覺の結果である。

尙ほ、こんな事の爲に、敵將の馬印を常から能く見識り置き、又人數の圓く集つた處へと志すと、其處には大將が居るのである。又離行の術の利といふは、一連になつて行く時は、見咎められ易い。一人々々離れて行く時は、見咎めらるゝ者があつても、仲間の中幾人かは妨げなく忍び入る事が出來るのである。

水月の術

（一）「敵城から、夜討か晝合戰を仕かけて引退く際、之に附入る事」

晝夜を限らず敵が軍を出し味方と入亂れ戰つて、其後で敵が引退く時に當つては、忍者は、太刀合や槍合など自ら刀槍を揮つて鬪ふ事よりは、寧ろ方々に走り廻り、敵の合詞（あひことは）、合印（あひじるし）などを聞き付け、又は見付ける樣に心がけなくてはならぬ。

（二）「主將と契約の上、餌を以て敵を誘ひ出し、參差（かたゝがひ）術、水月術等を以て忍び入る事」

凡そ餌とは、香や餌を付けて海川の魚を釣る如く、出でぬ敵を誘ひ出す術である。

一には城を攻むる時、之を三方から攻めて、一方は空けて置く。すると、そこから虚に乘じて敵の後詰めの兵が入るべき筈である。斯うして置いてから、右後詰の大將の使者であると詐り、所謂擬印を使用した謀書を作製し、潜かに行きて後詰めすべき由、又は兵粮等を遣すべき旨を申込み、日限なども定めて歸り、當日の夜に入つて牛馬に似せ荷を着けやり、自らは馬子

となり、大勢を引入れ、主將が其後から入つて一擧に敵を攻むるといふ計略である。正成が赤坂の城で湯淺を降參させたのも此の術であつた。

二には、味方が最初に攻寄するには、日暮時を選んで進み、敵城に近々と陣を取る事。

三には、味方小勢出張の時は夜軍の事。四には、味方小勢出張して平坦な地に陣する事。五には、似せ旗似せ幕似せ兵粮等の事。右の如き術を時と所の宜しきにしたがひ、敵の意の應じたる樣にし、敵を城中より誘ひ出し、或は參差、水月の術を用ゐるのである。

倘ほ右の如くして參差、水月の術を以て忍び入る時、專一に用心すべき事四ヶ條ある。

一は、敵の城陣の中、東西南北にて迷ふ時の爲に、心あての人をしかと識り置き、若し敵方より尋ね問ふとき、心轉倒して間違つた事を口走らぬ樣にする事。

二には、敵の合詞を忘れず、合印を失はずして敵の作法に隨ひ、敵の詞に隨ひ行ふ事肝要である。

三には、人の少き地で合圖の煙を早く揚げて、忍び入つたるしるしを味方へ告ぐる事が肝要である。合圖を揚げる事が手遲れになると、災禍が出來るもの故、早い程宜しい。

以上の他にも、いろ〳〵の忍び入り術が工夫されてある。何れも人心の機微を穿(うが)つたもので、忍術の要諦を説いたものである。つまりは、間諜術の本體であつて、當節の軍隊に在つても此の種の用意は、當然必要なものと思はれる。能くいふスパイ戰術、軍事探偵術も、形こそ異れ共の心理的方面は、永劫に異る事がないのである。温古知新の要を能く考へなくてはならぬ。指を一本差出せば、自分の姿は消えて大蛇や大鷲に變ずるなどいふ、よまいごとを忍術の本體であるやうに思ふのは途方もない誤りである。今日新聞紙上にさへ、外國のスパイが邦人の婦女子を手に入れて、軍の機密を盜まうとする記事が現はれる位であるから、況んや未だ暴露されざるスパイが、何れだけ多人數入つて居るか知れない。スパイ術卽ち忍術であるから、古人が心血をからして工夫した忍術の心理的分子は、今後益々之を研究しなくてはならぬ。

右の他、近入りの術が澤山に有るが大體に止め置き、次に陰忍の法として、家忍の術の實例を少し述べて見やう。前述したのは敵の城中や陣中へ忍び入る場合であるが、之からは陰忍を以て他人の家に入る方面である。當節竊盜、强盜禍頻々たる場合、十分に參考となるべき用心である。

陰忍の術――家忍の事

他人の家へ忍び入る事は容易である。城中、陣中と異り、戰爭狀態でもないのであるから、行きなり刀槍で咎められる樣な事はないのである。併しながら彼を知り己を知り百戰殆からずといふ位で、先づ其家の案內が解らなくては、仕損ずる事が多い。且又、忍び入つても、目差す敵人の寢所を容易に知りがたいのである。その爲に彼是と疑ふ中に時刻移り、反つて敵に悟られて、一旦忍び入つても益なきに終るものである。

故に忍び入らんと思はゞ先づ敵の屋敷門口の樣子、或は道路の廣狹、曲直、家作り住居の樣子、或は寢殿或は門戶の開閉の難易、錠や掛け金、樞、尻差などの品、又床鳴りなど仔細に知らなくてはならぬ。更に又敵の智惠の深淺、平生の心がけ、嗜好趣味、家內の男女の名迄委しく知つて置かなくてはならぬ。其上、其家の近所へ行き、餘所ながら見計ひ、亦姿を變へ假裝

して其家へ行つて見て考へ、歸りて後我が組中の者と談合して謀略を定め、合詞、合印を究め、若し仲間が分散した時には、落合ふべき場所迄定め、萬遺漏なきを期して後忍び入る事である。
扨て、次は家人の熟睡を計る事。

四季辨眠大要

(一)「春の事」
春は天氣暖かに長閑なれば、人の心もとけて長閑に悠々として身體だるく草臥(くたび)れるものである、殊に中春から末は愈々暖かになるから萬民眠る。
(二)「夏の事」
夏は晝至つて長く、夜至つて短かく、中にも五月後から六月中は、晝の炎熱甚しい。故に人は疲勞を催す事が多い。且つ夏の末は夜に至つても蒸し暑き故、宵より早く眠る事も出來ず、短夜尙以て短く、其上夏の末は土用となる。土用は土の司である溫濕の氣が行はれる、凡そ人

の身體が燥く時は眠り少なく、濕る時は眠が多い。大體老人は眠少く、若者は眠りが多いのも此の道理である。故に夏の末は人が熟眠する時節であり、殊に夜の亥の時刻（今の十時から十一時）から涼しくなるもの故、人の身體も安樂となり能く眠る。右の心得故、雨などしよぼしよぼと降る夜は、濕りも増し涼しくもなり、依て人の眠りも深いのである。

（三）「秋の事」

秋は金の氣で、燥氣が行はれる。故に草木の葉凋落する。前にも述べた如く、人が燥く時は眠りが少ない。時季冷かなれば、人の身體筋肉迄堅くなつて草臥（くたびれ）が少い。隨つて精神も慥（たし）かになり、加へて晝短く夜が長いから、旁々眠りが少ない。されど七月は殘暑とあつて、大略夏の末の意味となる。

（四）「冬の事」

冬は水の氣故、至つて寒い。身心共に堅固で草臥れ撓むといふ事がない。故に眠つても覺むる事が早い。右春夏秋冬の定法である。されど睡眠の厚薄は人にも依り、時にも依るものである。

年齢と心行とにより眠覺を察すべき三箇條

（一）「老若肥瘦に依り眠覺を察すべし」

凡そ老人は身體に、濕ひと暖氣とが少くして燥き冷がある故、睡眠が少ない。人にも依るが、大體老人は夜半迄眠り、夜半過ぎ八ツ七ツ（二時から四時迄）から醒める事が多い。年の工合でいふと、四十歳以上の人は右に當る。若い人は氣盛なる故、夜更けて朝に至つて能く眠る。是れ老若の異る處である。此の老若の心持を以て論ずる時は、大體瘦せた人は眠り少く、肥えた人は眠りが多い道理である。瘦者は濕り少なく、肥者は濕りが多い。

（二）「心行に依て眠覺を察する事」

大體心敏く急はしき人は睡眠が少ない。又心暗々として悠長な人は眠りが多い。行儀固く少しも自志を亂さぬ者は眠り少ない。又行儀不正にして假初めにも平臥を好み、自惰落な者は眠る事深い。平生嗜み強く、臥するにも帶を解かず、衣類を薄く着て寒さを厭はず、大酒大食を

せず、婬亂を愼み、萬事覺悟ある者は睡眠少ない。眠りても覺むる事が早い。平生嗜みなく、夜更しを好み、大酒食、夜食を好み、淫慾深く、遊興を好み、每事隨意に任ずる人は能く眠るものである。

(三)「心安樂なると苦患なるとに依り眠りに淺深あり」

凡そ、心に物思ふ事もなく、安樂なる人は能く眠り、又何事にても物を苦にする事多く、或は最愛の子女を亡ひ、又親兄弟を失ひ、患多き人は眠が淺い。又學問でも藝事でも、眞に之を好む者は夜を眠る事少なく、諸事藝能の心掛けのない者は、夜を能く寢るのである。右は人に因り眠りの淺深を知るの大要であつて、人の寢込みに乘じて忍び入る者に取つては、能く研究しなくてはならぬ。

逢犬術

「犬有る家に忍ぶ術の事」

凡そ忍び入らんと思ふ家に、犬ある時は、吠ゆるにより入り難い。之に入らんとすれば、先づ二三日前夜、焼飯一つに馬餞一匁をまぜたのを犬に與へて、之を取除く工夫を要する。この馬餞を加へた焼飯を食ふと、犬は死ぬといふ秘藥である。

歩法の中座さがし

「座さがしの事」

今敵の家内へ忍び入り、敵人が我を知つて闇中に身構へ居るかも知れぬ時、此の座さがしを行ふのである。其法は座の左右の端を伺れなりとも、時宜に應じて歩き、太刀を抜きかけ、鞘を一二寸程かけ、其鞘にて探り、人の當るを試み、當る時は、直ぐ鞘を突き外づして切り付くるのである。此術は、下緒の七術の内の術であるが、敵の家を歩む時には是非用ゐるのである。

除影術五箇條

（一）「日光の光面を避くる事」

月の光は外から內へ差込み、火の光りは內から外へ差出る。故に月夜に忍び入る時は、必ず月の方を歩行してはいかぬ。例へば、月が東天にあれば、東方を除いて他方を歩行する。又家內から屋外の物を狙ふ時は、火の光の外へ差し出てある所からせまつてはいけない。月光と反對になる樣にすべきである。

（二）「風上を除いて風下を步行すべき事」

敵の風上を通り、又は風上に居る時は、此方の物音を敵が逸早く聞き付け、又火繩の匂ひなどを敵が嗅ぎ付ける事がある。又敵方の物音を聞き、敵が眠つて居るか否かを知らうとしても、自分が風上に居つては叶はぬ事である。故に止むなくして風上を步行する場合には音せぬ樣に戒めなくてはならぬ。風下を步行する時は、敵方の事は能く聞え、我方の事は敵へ聞へず、大

利がある。

(三)「風なき時の軒の竹藪を避くべき事」

但し風吹いて騒がしい時は、竹藪を歩行しても苦しからず。

(四)「日焼けした藁、草の中、等を避けよ」。

但し、雨の夜、或は夜更けて露の浮ぶ時は、草も藁も鳴り音がしないものである。

(五)「水の動きを厭ふべき事」

凡そ溜り水を渡る時は、渡る處が敵から見えないとしても、浪が立つ故、敵は其の立つ浪を見て、其れと氣が付くのである。右五ケ條は忍者注意すべき事である。

忍び入るべき夜の事八箇條

(一)「祝言の明の夜」

祝言の夜は酒宴亂舞などで夜更かしをするから、八ツ(今の午前二時頃)の時分に埓明き寢

たらば、其夜猶ほ以て忍び入るに宜しい。此の夜は悦びの心計りで、戒めの心が少ないものである。

（二）「病後の夜」

其家の主人、妻女、子供など患ふて久しく夜詰をし、一旦快氣有つて家內の人氣を寛げた夜、或は大事の急病を患ひ、其病が癒つた夜、又は瘧（おこり）の間日などの夜は、敵家の者能く眠つて居るのである、其の虛に乘ずるが宜しい。

（三）「遊興の夜」

凡そ敵家に亂舞、月待など何事にても遊興ありて、子丑寅迄（今の午前一時頃から明方迄）起き居て、後寢たる夜は能く眠る道理故、其の虛に乘じて忍び入るが宜しい。但し、新茶の時は一考を要する。茶は人の眠を妨げる。

（四）「隣家に火事又は珍事有つた明の夜」

前の夜に隣家に火事喧嘩其他何か大事の有つた時は、其近邊迄眠る事のなく、其上草臥れるもの故、明の夜は能く眠るものである、其時能く虛實を見計つて忍び入るがよい。

（五）「普請勞役の夜」

普請を爲して終日肝を煎り、或は何事にても心勞し、又は遠路へ行き歸つて、草臥れ寢たる夜は其家へ忍び入るに好都合である。旅などは、能く草臥れ能く眠る道理である。殊に春夏の長閑炎熱なる時は、彌々草臥れて方角もなきもの故、是等の時には必ず忍び入る事を得る。

（六）「愁嘆事の有つて後の二三夜」

若き親妻子を死なし、愁嘆して其砌りは歎き明かすと雖ども、看病の爲に草臥れ、心體疲勞するから、其二三日の夜は大體能く眠る。殊に愁嘆の事あつた家では、一七日の間は、一族の男女さし集ひ、繰言を言ひ、宵は久しく起きて居るものである。さりとて其身金石に非されば、夜半八ツ頃よりは熟眠するが常である。況んや其家來の者又は寄り合つた者共は、根本から心に愁があるともないから、尙ほ以て能く眠る道理である。又愁事の有つた其日の黃昏の時は、人々ざはつき諸事吟味が薄いものである。紛れ忍びには好都合である。但し其間の虛實の見樣は逐一書き現はせるものでない、各自能く考へる事。

（七）「風雨の夜」

風雨の夜は物音聞えない。故に古から風雨の夜を忍びに用ゐた。且つ雨の夜は夏は涼しく冬は暖か故、人身安樂にして眠りが深いものである。此時忍び入りの好機である。是を雨鳥の術といふ。雨鳥は風雨の時に出づるものである。雨の夜に忍ぶとも笠など被る事は無用。

（八）「騷動の夜」

凡そ敵家の近傍何事か騷動ある時は紛れ入るに宜しい。昔、湯船の里に、久保右衞門といふ忍者があり、或家へ忍び入らんとして日の暮方に其屋敷へ行つて見た處、大庭に薪を澤山積んであつた。彼れは先づ此の薪の間に隱れて內の樣子を窺つて居ると、折柄急雨しきりに降出したれば、家中の男女此の薪を手々に取入れ、天井へ梯子をかけて上げた。久保右衞門はこれ幸ひとばかり、部下共の少し後から薪を擔ぎ、打紛れて內へ入り直ちに天井へ上り、持つた薪を引擔いで伏して居た。夜更け人靜まつた時、時分はよしと起き出てんとしたので、薪が鳴り竹も鳴つた。此時、家人一人眠らずに居たのか此物音を聞付けて怪しみ、主人を起して右の由を告げる。主人は槍を持出して下から天井を突き廻つた爲め、久保右衞門の額の眞中に刺さつた。久保右衞門少しも騷がず、それを其まゝ衣の袖で槍のしほくいいいびを握つた。

家主は槍を引取つて言ふには、

「何か手答へがあつた。併し人間ならば槍に血が付くべきぞと、火を點じて槍を見たけれども、已に袖で拭ひ取つたから血が少しも付いて居ない、扨ては人間では無かりし」

とて家主も下人も安心して寢て了ふ。久保右衞門はやがて天井から下りて來て、家主親子、主從四五人を刺し殺して立退いた。其の傷が癒えて後、額に穴が殘つた爲に、諸人は彼を穴久保右衞門と呼んだ。總じて最初から思ひがけない事でも、時の宜しきに從ひ、氣轉を出すが忍者の肝要とする所である。

又雨夜の事に付いて一場の談柄がある。昔、一人の忍者が、仲間と二人で、用心嚴しい家へ雨夜に傘を差して忍び行き、仲間に傘を差させて雨滴れの落ちる所に置いて、自分は裏口に忍んで居た。然るに雨傘に雨の當る音を其家の番人が聞き付けて、壁を揚げて追ひ出した。其騒ぎに彼れは易々と入り込み家主を刺して本望を遂げたといふ。總じて忍術は變を用ゐる事を第一とする。風雨、闇夜に限らず、其變術數の趣に依つて用ゆるが忍びの妙意である。

必ず入るべき四箇條

（一）「裏口より入るべき事」

凡そ裏口より忍び入るに、共得が六ツある。

一には、凡て人の家屋敷共に、表には要害を能くすれど、裏手の要害は表口程丈夫にして居ない。

二には、裏口は人の出入りも寡きもの故隠れ易い。

三には、表口には番を置くも、裏は心易く思ふて悉く油斷する事がある。

四には、裏口には一旦身を隠す處もあるものである。

五には、裏口の戸は表口より弱く、掛け鐵も粗末なものが多い。且つ家人も裏口は心安く思うて油斷して居るが常である、随つて垣や掛鐵も締りを忘れて寢る事が多いからである。

六には、表口より奥へ入るには、遠くして且つ幾つも戸を開けて入らねばならず、見付けら

る丶筈である。裏よりは奥へ近いから、戸を開ける事も少なく、旁々以て見咎めらる丶事少き道理である。且敵の臥所へも近い。故に裏手から忍び入るを隱忍の常法とする。

（二）「奥より口へ入る事」

右の如くして裏手から屋敷中へ入り、敵家の奥の寢所へ其儘入るに、其得三つある。

一には、上の條に記せる如く、裏口からは戸を幾重も開けずして、直ちに敵の寢間近く入る事が出來る。

二には、敵若し思ひの外なる處に臥して居る事ありて、其場所を尋ね探す時、奥口から入る時は、鍵、掛金をば外して入るだらうとは、敵思ひ付かぬ事である。

三には、奥口から行けば、若し敵が眠らずに居ても、怪まる丶事なく咎めざる道理である。

（三）「表よりは座敷よりの事」

凡そ表口から忍ぶ事は悪いに定まつて居るが、併し、裏手から入るべき便りなき時は、座敷から入るがよろしい。何故ならば、座敷の戸は一重で、其内は大抵襖か障子になつて居るから、たとへ掛金や尻差の用心がしてあるにしても、何れかと言へば開けよいものである。つまり座

敷から忍び入る事は易い。座敷は已に家の內故、奥へ入る口々の締りも少ない。又座敷には家人が寢る事が滅多にないから、其處から奥へ通ずる戶のしまりが强くて入りがたい時には、一旦退き出て外から入るにも自由である。故に裏口から忍び入る便りのない時は、座敷から入るべき事、古からの言ひ傳へである。但し之も場所にも因る事故、一概には言へぬ。

（四）「窓、椽の下、走りの下」

凡そ家內へ入るに是等の處は適當な場所である。第一下地窓、連子窓は或は切り入り、或は離して入るに易い。又椽の下の犬防けの處は大抵手輕に出來て居るもの故、放して入る事が容易である。又水流（はしり）柵の下などは入りよく出來て居るから、戶を開けて入るよりは右の箇所から忍び入る事、之れ隱忍の常法である。

陰形術五箇條

（一）「初めて屋敷と家內とへ入りたる隱家の事」

初めて屋敷の中へ入りたる時は、言ふに及ばざる事なれど、雪隱、椽の下、竹木の茂りたる所、植ゑ込みの中、材木、薪などの有る何かの物蔭に一先づ隱れて、よき時分を窺ひ、家内へ忍び入らなくてはならぬ。又家内へ入りたる時は厩、天井、大釜の下、中床の下、或は諸道具の間に一先づ隱れて家内の隙を窺ひ、人の眠りを待たなくはならぬ。屋敷へも家内へも、忍び入るには、黄昏時の人面も聢と知れず、諸人のざわつく時、紛れ入つて右の隱れ所に一先づ匿るゝ事もあるべし。

（二）「觀音隱の事」

觀音隱れといふは、敵の番人が廻る時少しも騷がず、壁、垣等、又は植木、材木、薪木など、總じて何れの近邊へなりとも立寄り、袖にて顏を隱し、目ばかり少し出し鼻息をもせず、息の敵へ掛からぬ樣にして少しも動かず、隱形の呪を唱へて立ちて居るを觀音隱れといふ。又、背を敵方へ向けて立つて居るのも宜しい。此の如くする時は敵は見付ける事がないのである。古から此の隱れ方にて利を得た例が多い。此理を知らざるものは、敵の來ると見て直ぐに逃げんとして動くにより、却つて足の音や息ざしの音、或は物に行き當り、或は塵芥などを踏み、彼

是れと身を動かして見付けらるゝ事がある。

（三）「鶉隠れの事」

鶉隠れといふは、手足を屈し首を引き込め、物の近所へ寄り、寒夜に霜を聽くが如く俯伏し、隠形の呪を口内に唱へ居るをいふのである。此際決して敵の方へ前を向けて仰向に伏す事勿れ。踞み伏すに五徳あり、仰向に伏すに五損あり。

一には、敵の方へ顔を見せ仰向に伏す時は、面が白々と見ゆるものである。踞になりて顔を隠し伏す時は、顔の色が見えない。故に敵が見付ける事がない、是れ一徳である。

二には、男は陽なる故、踞するは順なり、仰は逆である。仰はいきれ出て、息ざし荒くなり、敵に聞かるゝ道理である。是れ損である。又踞になる時は息ざし弱く、息の音も低いから、聞ゆる事がない。是れ徳である。

三には、人の息を我が息と通ずる時は、必ず人に知らるゝものである。故に仰は損、踞は徳なり。

四には、仰向に伏す時は、身體約やかならずして廣がる。之に反して、踞は身體約やかにな

るもの故、見付られざる相がある。故に損德の差がある。
五には、踞向きに顏を隱し伏す時は、敵見えざる故に精一の氣、鐵石の心あり、仰向に伏す時は敵見ゆる。然れば必ず臆病の氣出て、敵の見付けざるに早く逃げんと思ふ心の驚き動く故に、體も動き忽ち見付けらるゝ理りである。若しどうでも仰向に伏さなくてはならぬ場合には、袖で顏頭を隱して伏するがよい。若し敵が怪み火を以て見るならば直ちに逃ぐるべし。それとも、能き隱場所ならば、度胸を据ゑて忍んで居るも宜しい。況んや敵が火をも持たずに夜廻りばかりするならば、此術を爲して拗强く隱るゝがよい。
昔から、此術を以て隱れすました事が少くないのである。伊賀の忍者は、石になるとの評あるは此の事をいふのである。右の如くなれば、身心石の如くなり、敵も之を石かと思ふ道理である。昔、忍者が或る城へ忍び入り、一息入れて居る處へ夜廻りが來たから、やがて空堀の中へかけ入り、鶉隱れの術で伏して居た。夜廻りが、堀底の忍者を朧ろに見付けて槍で突いた。腹を突き抜いたけれども、忍者は少しも動かずに居たから、夜廻りの者、「扨ては人間ではなかつたそうな、動きもしない」

と言つて其儘立ち去つた。後で忍者はそろ〳〵身を起し、其城に火を放つて燒き立てた。

（四）「敵に氣付かれたる時の方便三つあり」

一に物眞似の術、二に僞言を私語、三に逃走の術

物眞似の術といふのは、敵が物音を聞き、胡散なりと枕を上げて聞く體ならば、犬猫のいがむ聲など眞似て、犬猫なりと思はす事。

次に僞言を私語するといふのは、家內に居ても、塀の外に居ると思はする僞言、或は壁より外に居つても內なりと敵に思はする僞言、或は敵の後に味方の者が居る樣にする場合。總じて我がいふ事僞言なる故に、敵は其言を實と思ふ樣に工夫して私語するのである。是を陰中陽の術といふ。

昔、一人の忍者が或る家へ忍び入り、其家主を討たんと狙つたが、用心嚴しく不寢の番を置いて奧の寢間に寢て居るので、忍び入るべき隙もなく、久しく番人の眠るを待つて居た。丑の刻（今の二時より三時）に至り、草臥れて眠りたりと覺えて、しん〳〵と靜まり其上火も消えて見えない。忍者は時分はよしと思ひ、戸を開いて入らんしたが、差金固くして戸は容易に開

かない。依つて閾の下の土を鋤で堀り取り、穴をあけて、今や入らんとして頭を穴より差出し、家内の模様を窺ひ見る處に、彼の番の者目を醒したりと見え、窃かに息ざしの音、骨筋の鳴る音、床の鳴る音などした。いよ〳〵實否を聽かんものと、忍者は寒夜に霜を聞くが如く靜まり聞いて居ると、やがて此方へ近づく足音がする。忍者之を聞き其儘穴から出て居た、番の者穴の近く迄來て、忍者がモ一度穴から入る處を一突きと構へ居る體に覺えたから、忍者はそこで、僞言を構へて曰く、

「番の者が目を覺ましたらしい、此處からは入れない。いざ疾く爰をば立退き、奥の物置の方から入る事としやう」

といふ。そしては、仲間の物言ひらしく、

「いかにも尤もである、いざ參らう。其上で、一同は物置の戸を明けて入るがよからう」

と、仲間の假聲言ふ。番人之を聞いて僞言とも知らず、

「扨ては忍者大勢と見えたり、濫りに追ひ立てゝは叶ふまじ、然らば奥より大勢で入るつもりと見ゆる。夫を待受けて討取つてやらう」

と考へ、密かに行つて主人をも起して此旨を語り、奥の口で待つて居た。其の有様を忍者は早くも察して、先刻堀つた穴からする／＼と入り、家主の寢間を搜して行くと、折から、有明の燈火淋しげに點つてあり、家主は已に起き出て、身繕ひする處へ忍者する／＼と行き、

「急ぎお出あれ」

と私語(さゝや)いた。家主はそれを味方の番の者と心得、更に警戒もなかつた處を忍者は、其儘刺殺し燈火を消して逃げ出した。番の者が之を聞き、

「狼藉あり出て合せ！」

と聲を揚げる。家内の者はいふに及ばず、隣家の者迄走り出て來た。忍者は兼て企てたる事故、百雷銃を其家の近所の竹林の端に据ゑ、火を付けて退いた。追手の者は此の雷音を聞いて驚き、

「扨ては、敵が大勢此處に出て鐵砲を打つと覺えた。之はどうしたものか」

と、互に罵り騷いで居る間に時刻移り、其間に忍者は一里餘も逃げた。一方追手の者共は其夜は竹林を守つて夜を明かし、翌朝、敵籠り居るかと仔細に搜がしたけれども、百雷銃のみ殘

つて人影もない、

「扨ては愈々謀られたか、口惜しい」

とわめいて各々立退いたといふのである。

又、或る忍者が小身な者に遺恨が有つて之を討たんと決心し、或夜其家へ忍び行き、戸を明けたり締めたりした。家主之を聞き付け潜かに寢所から起き出て、戸の內側で身構へして待つて居た。忍者は外から此樣子を感付き、扨て私語するやう、

「亭主が起き出でたそうな、今夜は思ひを遂ぐる事も出來まい。こんな時は逸早く退くに如かない」。

と言へば、

「尤も〳〵！」

と、自問自答して、二人の忍者が居る樣に足音迄して、一町ばかり退く體に見せ、其儘徐々と立歸りて戸の側へ行き、壁に添ふて居た。家主は敵僞り退くとは知らず、其戸を閉け遁さじと追ひ出つる處を、戸の際で一刀に斬つて本望を遂げた。是は何れも敵を待ち居て不意に討た

んとする謀略の裏を掻き、却つて我が謀略とした術である。

三に逃走術といふは、已に其の家に忍び入り居る時、敵が見咎めて起き出でたらば、此方一人の時は其儘逃げて戸を出た鳴音をさせ、戸の外へ出た樣に見せかけて、其實は家内に止まり、敵が追ふて出た後、自分はいよ〳〵奥へ進み行き、狙ふ敵を討ち取るのである。又、二人入つた時は一人を逃げさせて敵に追はしめ、一人は奥へ入るのである。但し、是は敵の郎黨番人などの起き出でた時のやり方である。若し其の起き出た者が當の敵であるならば、戸の側に待居て直ちに刺殺すのである。

（五）「敵に追討されるか、又は對陣しても我れに利なしと見て退散する時の方法が八つある」

一は狸退き、二は百雷銃退き、三は蒺藜（ひし）蒔き退き、四は木石を畢（ひく）き水中へ抛つ術、五は追手に變ずる術、六は大音術、六は珍事出來と呼んで閉門する事、七は門有ㇾ閉塞ㇾ呼ㇾ君出御ㇾ之術、八は狸隱、狐隱の事。

扨て、一の狸退きといふは、敵が急に追ひ出て已に後を切らるゝと思ふ時は、跪き留まるのである。斯くすれば敵は我に突き當り、蹉（つまづ）き倒る事がある。其時此方より斬付ける。敵我が左

右の脇を追ふ時は、跪きて倒れぬ位にする。敵は競ひ我より先きに行くもの故、其時太刀にて敵の腰を毆ぐるのである　敵が我を越しざまに斬る時とても、我は跪いて居ると、太刀の當る事が少ない。又追ふて來る敵と四五間も距離ある時は、門戸の脇、又は道側の少しでも身を隠すべき處へ暫時立寄るのである。追ひかくる敵は、逃げる者が先きへ行つたとばかり心得、必ず先へ走るものである。敵我が前を過る事四五間ならば、やがて後へ引返して退くがよい。其時、後から來る敵に會ふならば、如何にも言葉を慥かにして、

「敵は彼所へ逃げて行つた、一二人追つかけて行つた。若し敵が返して鬪はゞ味方が難義するであらう、急ぎ給へ」。

と告げ、自分は横道へ退くがよい。古狸が犬に追はれた時、此の形を以て免るゝといふから、此の術を狸退きといふのである。

二に百雷銃退きといふは前に述べた如く、追ふ敵との間十四五間もあるか、又は夫よりも近づくとも、暫く鶉隠れをして居るに依つて敵に見付けられずに走り廻りなどする時は、軈て茂み藪などの端、或は人なき小屋長屋の近所へ行き、百雷銃を鳴らす時は、敵は其處に夜討の者

が居ると思ひ、そこへ寄り集ふから、其の間に脇へ外づして退くのである。

三に蒺藜蒔き退きといふは、竹で作つた蒺藜を持ち行きて、退かんと思ふ路或は戸口に、自分が入る前に之を蒔いて置くのである。いざ退散となつてからでは、氣忙はしくて蒔く事が出來ぬものである。但し止むなければ退散の時に蒔く事もある。昔は竹蒺藜を幾つも糸につなぎ、退く時、引き釣つて持つて歸つた事もあるといふ。自分では、其菱を踏まぬ樣に注意し、蒔いてある處には足を擧げずに、足の裏を土から離さずに滑り歩む事が肝要である。

四の木石を𢌞き水中に抛つ術といふのは、暗夜に敵が我を追ひかくる時、𢌞い水中へ木石を抛げ落し、其の落ちた音を敵に聞かせて我身落ちたりと思はせ、敵が其處へ行く間に我は逃げ退かん爲めの謀である。

昔、一人の忍者が、敵の家の家來に見咎められて追ひかけられた。忍者は逃げざまに茶釜程の大石の有つたのを引擔ぎ、塀端へ走り行き、かの石を抛げ、我は塀より此方に鶉隱れをして居た。追手の者此石を聞いて「敵は塀の外へ飛び出した」と感違ひをし、門を開いて追ふて出た。其間に忍者は後へ戻り、奧の室へ忍び入ると、其家の主人が今の騷ぎを聞いて出て來る處

を討ち果した。

又、或る忍者が或る家へ忍び入つたるに、家主起き出て追つかけ來る。忍者家の前なる藪の中へ走り込んだ。家主藪の中は追ひ詰め難く思つて、暫時、立ち留まつた。忍者は、藪中の土塊を取つて藪の外へ抛げる、家主は其物音を聞いて、「扨ては曲者藪の外へ忍び出てたり」と心得、脇道から追ふて行く。其間に忍者は藪から出て、其家へ忍び入つたといふ話である。

五に、討手に變じて大音を揚ぐる術といふのは、敵が我を見咎め、高聲に騷ぎ廻る時、物も言はずに潛かに逃げる時は却つて人に怪まれる。其際には少しも隱れんと思ふ心なく、陽に追手の風をして、我から大聲を揚げ「夜討入りたり出合へ！」と罵り走る時は、敵も怪む心を起さない。

尙ほ此時一つの方便がある。それといふのは、例へば我西に退きながら「盜人は東へ逃げたそうな、何れも東へ追つかけ給へ」と、人々に告ぐるのである。是を遠の術といふ。此の如き時の爲に、羽織の表は柿色に、裏は薄鼠色に染めたのを着て、忍び入る時は柿色を上にして行き、追手に紛れて逃ぐる時には鼠色を上にして着るのである。昔の忍者は斯樣の術を爲して利

を得たといふ。

六に、珍事出來、門を閉ぢよと呼ぶ方便とは、昔去る忍者が城內で竊かに狙つた敵を討取つた處、近間の者共がそれを聞き付けて出會つたから、忍者は急ぎ逃げ出した。未だ宵の事とて門は開いてあつた。忍者思ふ樣、「追手の者共を此の門の處で喰ひ留めさせて、心易く退くに如くはない」と。依つて門々で呼ぶには、

「只今城中に喧嘩が出來た、門を閉めて一人も城外へ出さぬ樣、殿樣より御觸れである。相構へて油斷めさるな」

と高聲に呼び走つた。番の者共は眞實と心得て急に門を閉ぢた。兎角する間に忍者は、心易く退き去つたといふのである。此方便は晝間か又は宵などの門の開きある時、敵が追つかけるのを妨ぐ術である。

七に、門が閉ぢてある時、君俄かに出御と呼ばる術といふのは、大身の屋敷又は城內などへ忍び行きて後、出る時門すでに閉ぢてあらば、門口で、

「君俄かに何地へ出御あり、急ぎ門を開けよ」

と、聲高に呼ぶのである。或は、「何地へ御使を承る」といふか、又は「大事出來、火元の檢分を仰付けらる」などゝ言ふて門を開けさするもよい。其他、臨機の方便もあらう。先づ出づる事を能く工夫して後、入るべし。人を撃つにも、先づ退く事を能く考へて後に行ふべきである。

八に、狸隱、狐隱れといふは、敵が大勢追ひ出てゝ、我身逃げ去りがたく思ふ時、木へ登つて隱るゝを狸隱れといふ。此の如くする時は、大抵見付けられずに濟む。殊に葉の茂つた大木は甚だ宜しい。又、敵が追ひ出で、方々より人起り逃げ走り難き時、水の中へ飛込み總身を水中に入れ、面ばかりを出し、頭に藻草、蓮葉、木葉などを被り隱るゝを狐隱れといふのである。狐は獵師が鐵砲で狐を射つた處、其玉確かに狐に中つたけれども、即死する程でもなかつた。狐は傷が痛みて逃げ去りがたく、獵師の見えぬ處に小川の淵が有つたから、狐はやがて其中に飛込み、淵の端なる洞へ寄りて身を水中へ入れ、鼻と口ばかりを水より上へ出して、藻草を被つて居た。是を狐隱れといふ。

昔、尾州の名古屋の者が、或る大身の人に遺恨あり、黄昏の時分その屋敷へ紛れ入つた。折

しも夏の事故、敵は定めて行水をしに出るか、又は小便などに出るであらう。其時飛び掛り討ち果さんと思ひ、湯殿の近邊に隱れて居つた。案の如く、敵が行水に出た處を難なく討つて、其屋敷を出た。夫れと知るや、其家の者はいふに及ばず、隣家隣町の人迄騷ぎ出して追つかけて來る。其者今は逭れ難く思ひ、傍の水堀の端に柳の茂りたるを見て其堀へ飛込み、柳の下へ頭ばかりを水から出し、柳の葉を頭に被り、身は水に沈ませて居つた。寄合ふた敵共は炬火を燃やし、堀端をよく〳〵見廻つたが遂に見出し得ずして退散した。彼者は曉方になり堀を出て難なく逃げ去つたといふ。昔から名將は堀の中の藻や蓮の葉などを取除かせ、柳を切つて少しも隱れ家のない樣にしたといふ。

又狸隱れの方便を說明せんに、昔、忍者二人連れにて某家へ忍び入つた處、敵家の者が之を聞き咎め、大勢方々から起き出でた。二人は危く逃げ出したが、一人は先きに塀の外へ出たのに、他の一人はどうしたのか逃げ出る事が出來ず、大なる柚の木へ登つて葉の中に隱れて居た。追手の者共は柚の木に人が居る事は知らず、屋敷の內外を探ねたけれども、曲者の影もない。皆々家內へ歸つて寢て了つた。然るに先きに外へ出た者は、仲間の出るのを待つても出て來な

いので、心元なく思ひ又立ち歸り、屋敷の外から内の樣子を聞いたけれども何の音もない。依て屋敷の中へ入りそろ〳〵探ねると、柚子の木の上に物音がする、扨ては此處に居ると氣付き、急ぎ降りよと低聲に促す。上なる者曰く、

「先刻より降りりんと思へど、柚子の針が身に立つて降りる事が出來ない」

下なる男曰く、

「沙汰の限り臆病なる事よ、急ぎ降りよ」

上なる男痛や〳〵と言つて降り得ない。その時、下なる男一つの思案を爲し、

「曲者は柚子の木に上つて居る、方々出合ひ玉へ」と高聲に呼んだ。柚子の木の男、刺の痛きも忘れて飛び下り、二人連れになつて逃げ去つたといふ、是も智謀の一つである。

家忍人配り三箇條

（一）「見張り」

今忍び入らんとする家に續ける長屋部屋、隣家など人の出會すべき道々毎に、見張り人を置くのである。此の見張り役は、十分の武功者でなくとも宜しいが、唯だ落付いた人間を要する。

總じて、何れの役も臆病で粗忽で同情のないものは惡いが、取分け見張りに、粗忽なる同情なき者を置く事、大いに惡いと古から忍者の間に言ひ傳へてある。粗忽にして同情なき者を見張りに置くと大損が三つある。

一に、同情のない者は、忍び入りたる者の出て來るを待ちかね、うざつき歩き、或は慌てゝ合圖を聞きも見もせずしてゐるに依つて、諸事の言ひ合せが無益となるものである。

二に、家內へ忍び入つた者が退散する時、合詞もかけず、敵かと思ひ過つて味方を打ち、或は敵かと思ひて合圖もなきに、逸早く逃げ去りなどするものである。

三に、外から來る敵方の者を味方と思ひ誤り、又外から來る味方を敵かと思ひなどして、諸事粗忽にして不定なものである。之が爲に味方一同も迷つて、折角言ひ合はした事皆違ひ亂れるのである。斯かる大損ある故、見張り役は何者にても苦しからずいふは味方大敗の基である。

故に其人を選み、人々の氣質に應じて諸役を定めなくてはならぬ。卽ち適材適所といふのが夫

れである。人間の生れつきに依ると雖も、大體若い者は血氣盛んにして强けれど、粗忽不巧者であり、老人は落ち着き功者であるけれども、動もすれば思案過ぎて機を失する事がある。唯だ生得の剛强才覺ある者の三十四五歳から五十歳迄の者が、實行にも見張りに宜し。

(二)「仕手の事」

仕手とは仲間の中で、實地の仕事を引受ける者をいふ。凡そ仕手の役は、一大事の役なれば、勇、謀、功の三つに達した者でなくては勤まらぬ。仕手二人共同が宜しく、一人は、家の戸を開き、忍び入るべき所作を爲す。一人は敵の鼻息其他隙を窺ひ聞いて、所作をなす者に告げ、又內の樣子を通路人に告げ、通路人の口を聞いて之を仲間の仕手に告ぐる役目である。通路人といふのは、見張りの內一人が其家の土間或は仕手の者の居る近所まで行き、仕手添ひの者の下知を外の合圖役へ通報し、同時に外の合圖役の言ふ所を仕手添ひに通報するのである。又此際、戸口每に人を置いて見張らなくてはならぬ。是は家內の者を一人も殘さず討ち取る爲である。そこで此の戸口に付き居るの謀略が三つある。

一は、地上八九寸の高さに、戸口に繩を橫に張り置き、敵飛び出さば其繩が足にかゝり倒る

ゝもの故、そこを討つ事。

二に、菱を戸口毎に蒔き、敵の足に踏み立たするのである。

三に、戸口近くに居つて、脇差で突くのである。總じて、家內椽側などでは突くが宜しい。

(三)「合圖持並に合圖の印、鈴火の事」

凡そ合圖持の役は、四方から見ゆる小高い所に居つて、鈴火を見て內の事を外へ通じ、又外の事を內へ通ずる役である。合圖の印とは、分散した時、敵と味方と紛るゝ者故、一同に向き手拭で鉢卷をする樣な事をいふのである。次に鈴火といふは、合圖役の携帶する器で、鈴は風鈴であり、火とは紙燭火である。之に火を付け長き竹の先きを一尺程割り置き、合圖幾つなりとも其竹に挿(はさ)み付け、諸々の張り同勢に見せて合圖約束違背なき樣にする約火である。總じて夜の合圖には鳴物か、火光でなくてはならぬものである。夜合戰などには、提燈、太鼓、貝などで合圖をするか、其器が大に過ぎる故、家忍びの場合には工合惡い。風鈴の音は、小さきもの故、敵に聞かるゝ事なく、又遠く聞ゆるもの故、家忍びの合圖に適する。又紙燭の火は稍や靑色を帶び、人が見ても氣が付かぬものである。故に家忍びの合圖に、風鈴、紙燭が宜しい。

用心二箇條

（一）「寢間に有明を點すべからず」

火を活け置き右に紙燭を備へ置くがよい。寢間に有明行燈など置く時は、敵に見すかさるゝに依つて注意を要する。火の外へ洩れぬ樣に工夫すべし。又寢姿を見せぬ樣にすべし。

（二）「睡氣を拂ふ工夫」

睡氣を拂ふには、冷水にて顏を冷し、又、身の勞苦を厭はず、寒くとも薄着をし、飽食せず、妄りに平臥せず、行儀堅くし、夏も蚊を厭はず、扇を使はず、諸事苦勞を厭はざる時は、眠る事も少ないものである。第一に房事を愼む事肝要である。此の愼みがないと、身體が疲勞し、何んとしても眠り深いものである。睡氣の兆す時は、冷水で顏を洗ひ、又水なくば唾で耳を濡すがよい。

下緒利用七術

（一）敵に帶を切られた時か、又は臥床中、急ぐ事有りて俄かに起きて帶の所在知れぬ時は、刀の下緒を帶にするのである。是が爲めに下緒は八尺に作る。

（二）旅枕と言つて、大小の下緒の末を結び合せ、平臥の身の下に敷いて寢る。若し刀脇差を盗人が取らんとすると直ぐ眼を覺す道理である。又、急なる時は、結びたる下緒を取り、首に掛け、帶を結びながら走る事も出來る。

（三）座探しの時にも利がある、座さがしの事は別項に述べてある。

（四）塀登りの時、下緒を塀に投げかけて自分は塀に上り、下緒を手繰つて刀を取り上げる便がある。

（五）野中の幕張りに利用する。

（六）人を縛る時に下緒を利用す。

（七）鐺停。之は下緒の先きに小刀を結び付け、刀を抜きて右に持ち、鞘を左に持つて、敵の鐺に下緒をからみ付けて鐺を取る術である。

通路仕掛け六箇條

（一）「臑拂ひ」

之は屋敷の内外とも、敵の忍者が來るべき通路に仕かける。杭を二本立て横木を結び、大竹の先きに細い竹を付け、横木が外れる樣に作り、敵來れば外れて臑を毆る。敵は暗夜の事とて、人が居て臑を拂つたと思ひ退散するのである。

（二）「釣押し」

是は、家の鴨居の上或は敵忍の來るべき通路に仕かけ、敵が戸を開くるや否や落下し來り、敵に負傷せしむるもので、仕かけが種々ある。

（三）「菱蒔き」

敵忍の來るべき屋敷の外に、菱を蒔いて置く。

(四)「敵驚、我醒の事」

門戸から細繩を我が寢間迄引き結び、敵忍入る時は、鳴き音を發せしめ、敵忍を驚かし、且つ我は目を覺ますのである。

(五)「大竹莚の事」

戸の入口に大竹を跳ね仕かけにして置き、敵忍の面を毆打するのである。

(六)「繩張り疊立ての事」

旅先きなどで戸締り不充分な時には、繩を張り、或は一方の疊を上げて戸障子を此方に凭せて置く、敵忍び來て其戸障子を開けるとも疊が重いから容易には開かぬ。

忍術の練習法

忍術の武道精神

扨て、忍び入りの方法がいかに研究された所で、忍者其者の心身の鍛練が出來て居なかつたら何んの役にも立たない。そこで、忍術者の心身鍛練といふ事が何よりも大切な事になる。鍛練法については後に詳しく述べるが、忍術の忍は忍耐の忍なりとさへ言はるゝ位で、忍術者は極端に忍耐強くなくてはならぬとしたものである。第一志操堅固で、心正しく、如何なる困難にも耐え忍ぶ氣魄を要する。

凡ての忍術傳書は、最初に先づ正心篇と言ふのを置いて、正しい武道精神の必要を說いて居る。即ち忍者と盜賊とは本質的に違ふもので、盜賊は私慾、忍者は大義のために術を行ふもの

である。だから君國のため、戰に必要なもの以外は盜まぬことになつてゐる。從つて忍者の子供でも、心が大義を行ふに適しないと親が認めれば、術を傳へないで傳書を火中することになつてをり、術を口傳する場合に他の人が盜聞した時は必ず暗殺することになつてゐる。

忍者は非常に祕密を重んじたもので、城中から忍びとして派遣されることは、殿様と忍術者二人の間の者しか知らない。家老でもこれを盜聞すれば暗殺するおきてである。お庭番といふのは紀州流の村松左太夫が最初であるが、忍者はかうした便法を講じて御目見得したものと思はれる。

それで、忍者は、結婚なども、忍術者同志以外の人とはさせぬといふ建て前であつた。そして伊賀、甲賀ともに後繼者のない時、又あつても適當でない時は、他流のものを連れて來て跡をつがせた。そこで、其の適當な資格といふはどんな條件かといふに、それは、正直、頭腦の鋭敏、身體の敏捷の三つを要素とする。正直は忍者の精神的な必須條件で、盜賊と異なるところである。頭腦の鋭敏は六感の働きが鋭く、記憶力のよいことを意味す。なぜかといふにたとへば城の見取圖の如きは、頭に記憶するだけでノートすることが出來ぬから、頭腦の鋭敏は忍

者として當然のことである。

整息法と歩行術

上は濡れ紙の上を渡り。下は水中に首を突き込んで呼吸をためす圖



忍術を學ぶには、どんな順序でやるかといふに、先づ適當な候補者を得て、之を試驗して見るのである。それには上圖の如く、四斗樽位の大きい桶に水を滿たした中へ、其者に首を突込ませて、十分餘りも我慢させる。之は余程心臓の強い者、殆んど兩棲動物の様な者でなければ出來ない藝である。此の第一の試驗を通過すると、次には、唐紙の上へ紙を張りそれに水を撒き、其上を渡らせる。之は紙を破らずに渡る丈けの、生れながらの敏捷

な者でなければ出來ない事で、木鼠小僧や、猿飛と言はれた佐助など、お誂への人間であつた事であらう。

右の試驗に及第した弟子に、愈々忍術の練習をさせるのであるが、其の方法としては、先づ整息術を練習させる。之は鼻の先きに輕い綿屑を付けて呼吸させて、それが少しも動かぬ位靜かに息をするのである、よく次の間へ入つて來た人が其の息使ひで察せられるといふ事があるので、整息は忍びの第一に必要なものである。

次ぎは步行術である。それには先づ爪先き步き、それから足の甲で步く、此の二つが步行術の基礎である。次に兩脚を一樣に開いて尻を地に付けるので、このかたちは西洋のダンスにもあるが、さうしても股が裂けないといふ練磨をする。以上三種の足の練習をして、それから步行術に移る。これには步き六方と言つて、前方、後方、横步き、斜步き、這行それから速步と六種ある。前方へ步くのは普通の步き方で、速足の步き方である。これには力紙と言つて、紙を八ツに折り奥齒に嚙み、自分の足元を見ながら小刻みに步く。顏を上に向けると、鼻腔へ風の抵抗が來て、それだけ疲勞するから、稍や俯向き加減が宜しい。之れで一時間に四里、一日

に四十里を歩くといふのが忍術の定法としてある。其の速力は、胸に菅笠を當てゝそれが滑り落ちない程度の速さでなくてはいけない。又は一反の布を襟につけて、その先が走つてゐる間、少しも地につかない練習をやるのである。

次に横に歩く方法は、脚をX形に組んで歩く。之は日に三十八里が定法としてある。此の歩き方は塀の側面を塀に添ふて歩く時には、人間の胸の厚さ丈けの間隔、つまり七八寸の狹い處でも歩けるのである。それから斜め歩きとか後歩きも、隨時必要があるもので、忍びの爲めには、何時どんな必要が生じないとも限らない。次ぎに這ひ歩きといふのは闇夜を歩く爲めの定法である。闇夜に危險區域を歩くには、這つて地上を透かしながら歩く。すると朧ろにも敵の影が見認められるので、此の歩き方は忍者には是非必要である。

それから不具者を裝ふ時の歩行術としては、三種の歩術を練習する。それは前にも一寸述べたのであるが、先づ最初はトウ・ダンスのように指先で立つて歩く稽古、次で足先を内側にまげて足の甲を下にして歩く稽古、次ではこの二つを交互にくり返して、平然たるように稽古する。これはどんなにしても足首が折れない練磨で、實際上の利用としては、跛足の眞似をして

一里も二里も行くことが出來る。非人姿で竹杖にすがり、片足を爪立てゝ片足を横にねぢ曲げて、足の甲で歩いて行けば片輪者と誰だつて見る。

跳躍・飛躍術

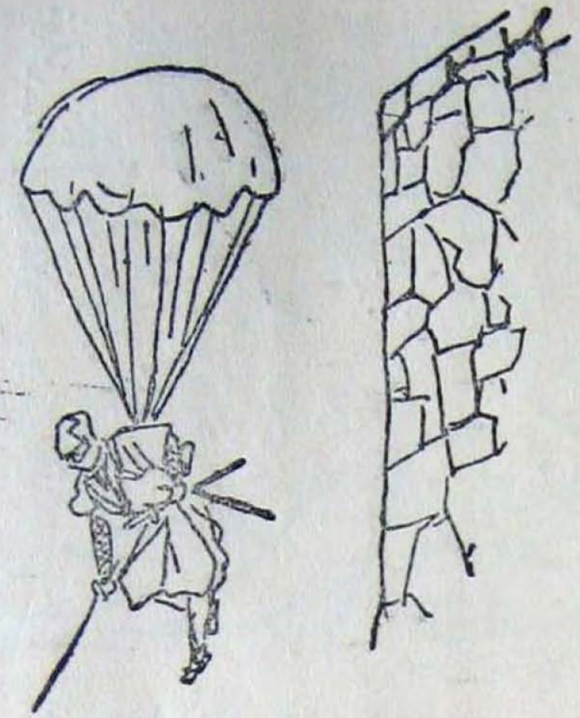
歩きの次は跳びである。羽翼のない人は素手で飛ぶ事は出來ないが、跳躍して溝を越へ、塀を乘り越す事は出來る。その練習をするのである。此の跳び方にも六法あり、前跳び、後跳び、高跳び、巾跳び、横跳び、斜跳び、など步行術と同じやうなものである。

普通の忍者は五十尺の高處から飛降りるを定法としてゐる。それ以上飛ぶには風呂敷なり何んなりを、口と兩手で三方にひろげて飛ぶ。いはゞパラシユートをつくるのである。羽織を着てゐる時は兩手を後へ廻して羽織の裾を廣げて飛ぶ。これも同じ理窟で、私はさうして四十五尺を跳んだことがある。又圖の如き一種のパラシユートが、七百年前に工夫されて居たと言はる。

それから幅跳びは三間、高跳びは九尺である。其の練習をするには、先づ一坪の地に麻の實

を蒔き、麻は眞直ぐに成長力の速いものであるから、其上を毎日跳び越へる練習をする。一日毎に高くなつて行く、之を三年位の間繰り返し練習し、彼方此方と跳ぶ稽古をするのである。夫れから山間を跳び廻る時には、革衣を身に着ける。全身汗まみれになると、革は段々縮んで、身體を〆め付けて窮屈になるのを我慢して、猶ほも跳び廻るのである。これで汗を搔かない練習にもなるのである。荷物を擔つて山を登るのは、山窩仲間では、七十貫擔ぐのが一人前

七百年前に工夫されたパラシユート



麻の上を跳ぶ稽古



道具を口にくわいて水中に長く忍んでゐる圖

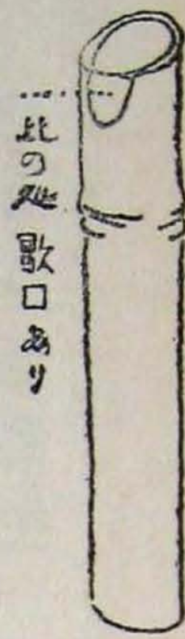


と言つて居るが、忍者も之と同じで七十貫位が一人前としてある。之は、甲賀の忍者の話であるが、家人が毎晩新しい草履や草鞋を枕元へ置くと、翌朝それが全部すり切れて居た。つまり夜中に起きて、夫れ丈け走り廻り荒い練習をした事になるのである。

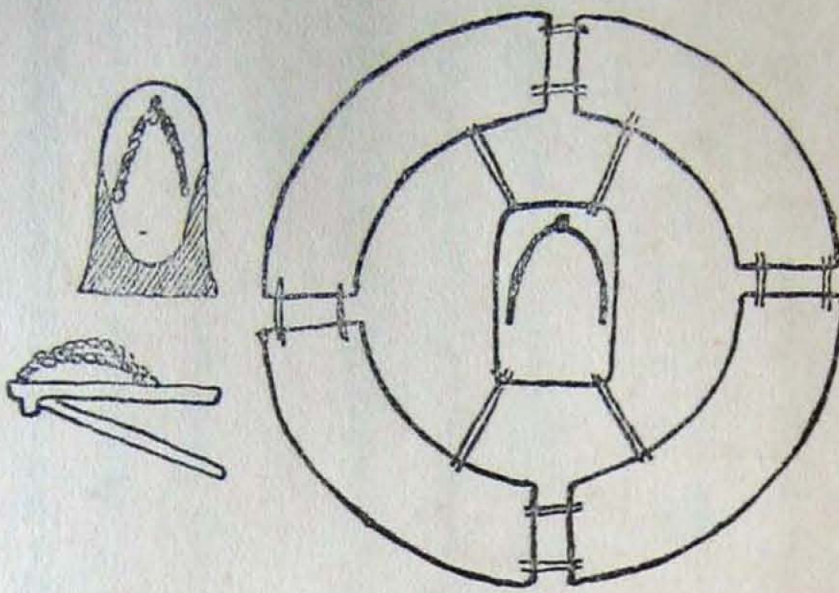
潜水術

以上地を走る術、空飛ぶ術が出來る樣になると、今度は水を潜る術だ。それには、忍び泳ぎといふて流れるやうに、手足を動かさず泳ぐ方法もある。一度水中に飛び込んだら二三時間位は、姿を見せ

水中に忍ぶとき
口にくわえる棒



水中を歩くに用ふる道具



ないといふ様に巧みに泳がなくてはならず、道具を持つて入る時は、五六時間位水に漬つて居る忍者もあつたと言はれてゐる。泳ぎ六法と言つて、水の底を歩く法、水中の中間を泳ぐ法、水上を行く法、音を立てずに泳ぐ法などある。徳川幕府に仕へてゐた伊賀流の忍者が、幕府瓦解で食ふに困つて、お濠へ入つて鯉をとつては賣り食ひをしてゐたことがある。一度お濠へ入ると六尾の鯉を持つてあがつて來るのである。兩手、兩脇、股、顎、などでたくみに鯉をはさむといふ達者である。

尙ほ長らく水中にゐるには道具がある。一種の潜水器で、四百年前に出來てゐて、水中術も大いに研究されたのである。上に掲げたものは水中に

使用した道具の圖解にして、今日の浮き袋と同じ工夫が、已にあつた事など參考に供したいと思ふ。

心身の鍛練法

五體の練磨

以上特殊の練習と同時に、忍者は五體の練磨をする。普通、指を逆に取られると痛くて堪らないものだが、それを平然として居る様に、我れと我が腕の關節、指の關節を外づして逆取りを無効に歸せしむるといふ練習をする。それと同時に又指一本位折られ挫かれても、平氣で居る様な強い意地を養ふ。

それから指力と手刀の力を養成する。之には一尺四方の箱の中へ砂を入れて、手を突込む練習をする。そしてそれが出來ると小砂利にする。次に固まつた粘土にする。そして、手首位迄ぐさりと入る様になると、今度は普通の地面へ突込む練習をする。かく練磨を積むと、敵の咽喉(のど)

筈へずぶりと手刀を突込む位は造作ないので、敵の肋骨を引拔くことも出來る樣になる。私等の先輩には生馬の尻肉を攫み取つたといふ例もある位だ。だから忍者の指はみな拳固のような堅さと強さがある。昔の齒醫者は板に釘を打つてこれを毎日拔く練習をしたものであるが、忍者もそれと同樣指先きをウンと強くする。この指の力で天井も匍へる、格天井の格子を指でシツカリつかんで渡る。八疊の居間なら二分か三分で渡ることが出來る。

又、忍者は頭の力も鍛へる。之は頭を柱へぶッ付けて稽古するので、私もビール壜四十本を續けざまに頭にぶつつけて破つたことがある。これは忍者ではないが、頭で四斗樽を四回で全部ぶつ壞してしまつたり、五寸釘を額で打ちつける男が千住にゐる。

これ丈けの練習が出來、同時に體術劍術が出來て來ると、全身不死身の如くなり、少し位叩かれ挫かれても平氣で居られる。腕や脚を斬られても、自分の仕務を果さない內は一步も退かない。指を斬られても片腕を斬られても、最後までやり通すといふ精神で行く。私は少年の頃竹を腹へ四、五寸位突刺されたことがあるが、藥もつけず三日間繃帶をしただけで癒つた。危惧心を持たないといふことが一番の要訣である。

內臟の練習

扨て五體の練磨、如何に強くとも、內臟の鍛練が疎かであつては何んにもならぬといふ處から、忍者は此方面にも、人間業と思はれぬ迄の荒行をやる。第一に無臭の術に入るので、これは體臭を避けるのである。それには、酒も煙草も用ゐず、又臭い物を食はない。韮、大蒜、玉葱など、特殊な臭を發する者は食はない。脂濃い物を食はない、發汗の多い物を飲まない。これは人の目を掠めて通るとか、一室に隱れ忍ぶ時、其體臭に依つて勘付かれる虞れがあるからである。

次には絶食に耐える練習、又不眠不休で通す練習、又反對に術策上の交際には、暴飲暴食をして平氣で居られる練習をする。私は平素酒も煙草も用ゐないが、いざ必要とあれば斗酒なほ辭さない。酒は人を醉はしむるといふが、醉うてならぬと覺悟して飮むと決して醉ふものでない。戰地で斥候に出る時、菰被りを一樽鏡を拔いて飮み放題飮んだが、誰も醉はなかつたとい

ふ話もある位で、忍者は斗酒を飲んでも醉はぬといふ建て前である。暴飲暴食した場合私は胃の伸縮運動に依つて、内容を腸に送ると飽滿の苦惱などいふ事はない。之も常に實演して居る。

これまでの忍者で大食のレコードは、「伊亂記」等に出てゐる一度に生米四貫目づゝ食つたといふのがある。忍者は酒を呑むのは五合から二升くらゐまでを酒をかぐといひ、三升から五升をなめるといひ、五升から一斗まで幾らかのむといひ、一斗五升以上を大酒といつてゐる。

私も大食では天どん八杯、かけ蕎麥二十五杯、酒八升五合、煙草十箱といふレコードを持つてゐる。しかし平素は酒をのまない、煙草をのむ際は鼻からのむ。かうやつて鼻から吸ふとニコチンが完全に胃や肺に吸收されて、口から吸ふよりはニコチンの毒が多いわけである。さうやつては平素ニコチンに對する抵抗力を養つて置く。いざといふ時いくら煙草を吸はされても、それで頭がグラ〳〵するようなことにならぬ。煙もはき出さない、胃のなかへ入れる。出さうと思へば出せる。腹を撫でると煙が口からムク〳〵出て來る。普通は煙草はのまないのであるが、必要の時は肺へでも胃へでも、どこへでも自由に煙を入れる。

次に精神を統一する事に依つて五官の感覺を鋭敏にする練習。之は人間の聽覺は、平時の十

四倍位迄鋭敏になるし、視覺は八倍、嗅覺味覺は三倍する。忍者が、或邸內に忍入るに際し、其家の壁に耳を立てて精神を凝らし、或は聽き筒を當てると、廣い家でも其內部の話聲が聞き取れる。線香の灰が落ちる音、雪のさゝと降る音、蝿の飛ぶ音、針の落ちる音も聞かれる。闇夜地に伏して耳を澄ませば、數丁先先きの物音も手に取る如く聞えるなどいふのも、此邊の消息で、之は誰しもの實驗する處である。況んや、それを專務とする忍術者の聽覺に於ておやだ。

毒物・いかもの喰ひ練習

それから忍術者には、毒殺といふ危險がつき伴ふ。之を脫がれる爲には內臟を强健にし、意志を勵まして、毒物にも打勝つといふ練習をし、又木石、土砂、悪蟲何んでも食つてやるといふ悪食的な練習もする。特に血判狀とか密書とかを敵に奪はれる虞れあり、之を安全に投棄又は燒棄する隙のない際には、之を腹中に燕下するといふ必要もあり、何んでも食ふといふのが忍者の建て前である。

私も此方面の練習を多少やつたもので、硫酸、硝酸、猫いらず、守宮、百足、蛇、芋蟲など食つて何んともない。其他硝子のコップ、煉瓦、屋根瓦の類も食ふことも出來る。富士登山の途中の岩を食つた話もあるが、別段美味いものでないにしても、食つて食へぬ事はない筈である。腺病質の兒が壁や爐の灰の塊り、木炭など好んで食ふ處を見ると木、石、土砂、何んでも必要に際して食へぬ事はない筈である。忍術者は常にそんな必要に迫られる。忍者は人の邸へ忍び込み、床下へ伏して居るとした場合、何日間も身動きの出來ない羽目になると、床下の土を嘗めてでも飢を凌ぐといふ事もあるので、此れ程の練習が必要なのである。

私の、硝子コップを食つた實例は已に八百七十九箇に及んで居り、又煉瓦は一箇を食ふに四十分かゝり、屋根瓦一枚食ふには二十五分から三十分間を要する。斯うしていざといふ時、證據烟滅の爲め、平生からこんな荒行をやつて不死身の體を作る。

元來忍者は病氣を最も輕蔑する。病氣とは讀んで字の如く氣を病むことで、氣なんか病まねばいゝんだ。持病は病を持つと書くがそんなものは持たないがいゝ。無理でもさう信じてゐる。胃が惡いのは胃がサボつてゐるのだから、こんな時に流動物なんぞを入れてやつて胃を甘やか

すと、却つて圖にのつてサボるから、堅い不消化の物を入れてこらしてやると癒るといつた風に・非常に積極主義なのである。

苦難に耐ゆるの練習

總じて忍者は、人間として耐へ得る限りの練磨を爲し、又智力の限り研究をし、物理化學を應用し、又心理作用を利用し、それでもつて斥候の役目、密偵の任務を勸め、時には敵陣に入つて火を放ち又敵將を暗殺し、敵の祕密書類を奪ふといふ、最も大切な仕事をしたのだ。

尙ほ忍術者は、敵に捕へられて拷問にかけられ、迫害を受る場合が多いのだから、平常、身體を苦しめる事に馴れて居なくてはならず、其爲には隨分と思ひ切つた練習もする。其練習として試みたのは針を差す事で、之は疊針大のものを、顏面から耳、舌、全身へ二百五十本も差したレコードがある。迚も痛くて苦しい事のやうだが、思ひ切つて了ふと何んでもなく平氣でやれる　舌へ針を差したまゝ、人と話をする位は造作ないことである。

又五體を强健にする特殊の練磨としては、八貫目から十五六貫目の鋼鐵の角分銅を以て胸部を打つ事もある。昔、回向院の角力取が、敵手の猛烈な頭突に耐える體力を養ふ爲めに、米一俵を天井から釣つて、それを弟子に撞木の如くして自身の胸を打たせたといふ話もあるが、こう云ふ事は、板の間の劍術や疊の上の柔術とは大分違ふ。兎に角こんな烈しい練習に依つて出來上つた忍術といふものは、世界に類のない武術であり、尙武の國、日本人の誇りとして、之を現在に適應せしむる必要が大いにある。

尙ほ茲で一つ人間の體力といふ事に就いて一言したいと思ふ。眞に健康體の人であるならば、何れ丈けの外壓に耐え得られるかといふ事を知つて置く事は、昨今の樣に神經衰弱とか、デカタンとかの流行時代には特に必要と思ふ。

先づ眼の力といふ事に就て考へて見ると、人間が目を瞑(つぶ)つた瞼(まぶた)の力は、自分の體重の約三分の一の重さを釣り上げる事が出來る。それから齒の力は、健全の齒であらば、婦人は乳呑兒を抱いて、天井の棧に喰ひ付いてぶら下る丈けの力を持つてゐる。

又横に引かれる時の支え力は、自分の體重の七倍には耐え得る。仰向きに臥た力は、十五貫

の體重者にあつては六百貫の重さに耐え、十八貫の人は八百貫の物に耐えるとしたものだ。外國人の見世物に、自動車を右に一臺、左に一臺付けて頑張つて見せるが、あれは大力のためでなく物理學上當然の事なのである。又仰向きに臥て、其上に六七人も乘つた自動車を載せて見せるなども不思議でもないことだ。だから、自動車に轢かれて死ぬるなどは、あれは精神の弱い爲めで、自ら氣死して居るのである。それから人間が立つて居る時、普通、三四千ポンドの物を腰に下げる丈けの力はあるのだ。其力を發揮し得ないのは、精神力が缺乏して居るからで、眞に精神を强くし、何事でも出來ぬ事はないといふ信念を持つてやれば、どんな事でも出來る。石にも矢が立つのである。

武藝、遊藝百般の練習

心身の鍛錬については劍術、體術などいふ普通の武術は當然之に屬するのであつて、所謂武藝十八番何んでもやらなくてはならぬ。私は其方面でも極力練習を積んであるので、それ以外

にも武道としては、武器の持合せがない時の用意として、南蠻殺倒流拳法、心月流手裏劍術、一傳流捕手術から大圓流棒術などもやつた。

其他、變裝術の六方出の事は前に述べたが、虛無僧、猿樂、手品、なんでもやる爲に萬藝に通じなくてはならず、踊りも稽古をして藤間流の名取りであるし、新聞紙一枚あれば尺八も吹けるし、口でヴアイオリン、マンドリンの眞似も出來る。唄は嘗て大阪で、明治以來の流行歌を放送した事もあつて、寄席藝人のやる位の事は何んでも出來る。

藝人の方では、動物の擬音を賣物にするのがあるが、多くは一寸した眞似であり、本當の鳴聲になつて居ない。猫や犬の鳴き聲を出すにしても、一通りの聲しか出してゐないが、本當の鳴聲はその動物の習性慣性をハツキリ出さねばならないのである。大體猫の鳴聲はたやすいもので、猫は鼻の音で、鼻をつまんで聲を出せば誰でも出來る。しかし犬はむつかしい。犬は三十五音といつて三十五通りあり、白、黑、ブチ、赤等によつてそのなき聲も違ふ。二匹の犬の喧嘩をやつて居る時の鳴き聲から、最後に一方が嚙まれてびつこを引きながら退散して行く時の鳴き聲、又、怪しい者を見つけた時のなき聲、老犬と子犬の聲をなき分けるなど、隨分澤山

ある。又、塀を越えた時は犬の胴ぶるひの擬音もある。

甲賀流では、動物を利用する術には、特に犬を利用する。是は、犬は人里に最も多く、何時、何處にでも居るし、又敵の番犬なども居るから、特に犬を研究して之を利用するのである。火急の場合、犬の鳴き聲を以て近所の犬を呼び集め、其の喧騒にまぎれて、逸早く身を脱れやうとする。追手は外へ出て見て、多くの犬に吠えられ「扨ては曲者が犬に化けて身を隱したか！」などゝ罵り合ふ中に、此方は易々と逃げ歸へるのである。犬の擬音は、私も相當練習を積んで、今では犬と話が出來る位の自信を有つてゐる。

兎に角、忍者は、人のやる事は何んでもやれないものはないといふ立場で、其の一つの藝としては猿景類似の事もやるのである。之は遊藝でなく眞劍な必要から起つた事である。それといふのは、家康が天正十一年に江戸城に移つた時には、甲賀、伊賀の忍びの者もともに率ゐて移住したが、諸國の大名達もおの〳〵かうした伊賀者、甲賀者を傭ひ入れたから、だんだん土着の忍術家は分散して全國に擴まつて行つた。當時は忍術家が一國一城を調査する報酬は百俵といはれ、各諸大名は盛んに彼等を驅使して敵城を調査させ、見取圖を作らせたものである。

私の所にもかうした見取圖は澤山集めてある。中には距離を歩數で調べてあるやうな驚くべき詳細なものもある。これを殿樣に報告する時は、土圖卽ち立體的模型を作つて献上したもので、盆景の心得も忍者には必要なものとされてゐた。またかうした見取圖製作には、目算が異常に巧みでないといけぬ。昔の城は決して直角には作つて居なかつたからである。

忍者の服裝と携帶武器及び道具類

最初に忍術者の裝束と携帶武器に就いて簡單に述べてみよう。

芝居の舞臺では、百日かつらに鎖かたびら黒裝束で迚も立派で、殿樣以上にえらい豪傑に見えるが、實際はそんな重苦しいものでなく、極めて輕捷なものである。其服裝も黒裝束でなく、表は澁染、裏は鼠染めだ。之は、表を晝間に濟、裏は夜間に着るのである。それから蘇枋（そほう）染めの手拭を常に携帶して居る。之は、澁染めと同じ色で、頬被りに適し、又此の手拭で濾過すると、汚水を飲んでも害を受けないといふ建て前である。

次に、懷中するものは、一種獨特の食糧で、極めて少量で而かも滋養豐富なもの。之を造るには、干鮑（ほしあわび）、大麥、干鯉、糯米、茯苓（ふくりやう）、寒晒、鰻の白干、梅肉、生松の甘はだ、氷砂糖、麥閤其他のものを交ぜ合せるとしてあり、今日の智識を以てしても、何れも選りによつた滋養物で

ある。

次に、忍術者の帶刀は、普通二尺三寸の刀の定法よりは大分短かいもので、之は狹い處を這つたり室內で闘つたりするから、出來るだけ短くし邪魔にならぬ樣に作る。鍔は、普通よりも大きくし、下げ緒はずつと長くし、鞘は鐵製の丈夫なものにする。之は塀を上る時など、刀を立てかけ、其鍔に足をかける爲めで、下げ緒を長くするのは、上から刀を引き上げる時の便宜である。萬事が斯ういふ風に用意周到な處は、普通戰場へ出る戰士と趣を異にする。

懷中には、眠り藥、爆彈、菱の實など常に用意して居る。此の眠り藥も古くからの忍術者間に傳はつた秘傳で、大した發見なのである。之に點火して其臭ひを嗅ぐと宿直の武士共耐え切れず眠くなるといふもので、忍びには無くてならぬ品である。爆彈も、竹筒の中に火藥を仕込んだもので、之に點火して敵へ投げ付ける。それから敵に追はれて遁げる時には、菱撒きをする。之は鐵製の菱の實形のもので、敵が此の菱で足を刺されてひるむ間に、逸早く危地を脫するので、例の石川五右衞門が、太閤の千鳥の香爐を盜んで逃げる際に、鶯張りの廊下を素足で渡つたから堪らない、千鳥の啼き音そつくりな音がして發覺したといふので、あんな場合には、

綿草履を穿くのが常法であるとして居る。先づ五右衛門は此の鶯張りの廊下を踏み損ねて失敗したのに、今度は逃げる際、菱撒きの用意も無かつたといふので、忍術者として大の手落であると非難されてゐる。此の菱撒きには、本物の菱の實でも宜しい。叉竹で作つて糸で繫いであり、使用後、そつくり糸を手繰つて持ち歸るなどいふのもある。

定法としては忍術者の六具と言はれ、忍び込みの時には、あみ笠、かぎ繩、石筆、薬、三尺手拭、打竹を用意する。他に懷ろ火やのぼり木、眠り薬なども持つてゐる。眠り薬は多く庭木でつくる。敵に眠り薬を酒にまぜてのませ、自分はソツと下毒劑をのむのである。今日の戰爭で使はれるイベリツト、シウカベンヂル、ボスゲンなどの様な毒ガスも皆植物でつくつたものである。逃げる時小さな火薬をなげると、それで五六人くらゐは倒ほせる。芝居でやる仁木彈正は巻物をくはへてゐるが、實はあゝした形のものに薬が仕込んである。

忍者は常にあゝいふものを持つてゐて、いざ敵に追かけられたとなると白い煙、黒い煙をあのなかから吹き出してにげる。あゝいふものをくはへて敵をにらみつけると、敵も何か異變がおこると見て寄りつけない。また大勢の敵にとりまかれた時、どの方向から見ても忍者が正面

向いてゐるように見せるために、顏の澤山ついた面をもつて行き、これをかぶつて、手にまた多くの刄を持つのである。千手觀音、十一面觀音のようなもので巧い趣向である。

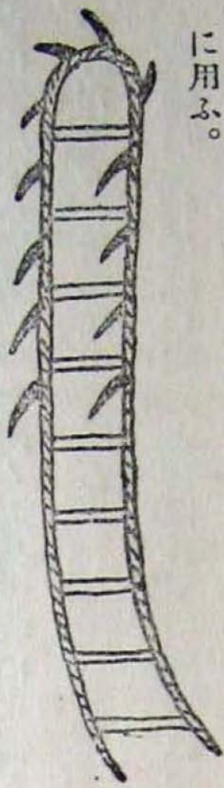
次ぎに忍術に使用する種々の道具類について述べて見よう。此の事は、已に隨所に記述した樣にも思ふが、前述の携帶用品と、道具とは、叉多少異る處もあるから、簡單に左に記してみやう。

今、高い塀を飛び越えたり、錠前をあけたり、小さい穴を潜つたりするにはどんな道具を用ゐるか。一體、穴をくゞるのは親指と人差指で圓を描いた位の大きさがあれば、人間の身體は穴へ入れることが出來るといはれてゐる。猫はあの口髭丈の擴がりの穴があれば、樂に脫けられるのである。

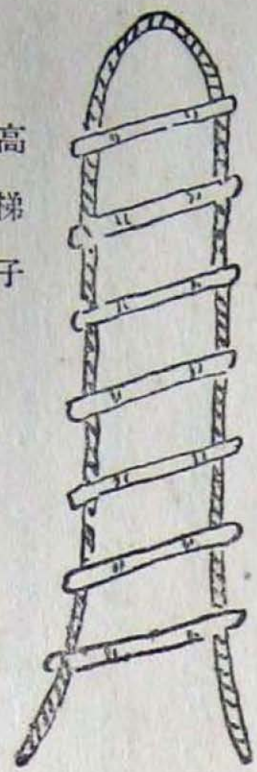
以下諸々の道具を說明すると、先づ、忍び熊手之は繩の先きに三叉の鐵の熊手がついてゐて、これを塀、屋根などへかけ、繩をよぢ登る。長さ五寸くらゐの小竹が十數本繩に通つてゐて、下からしごきあげると一本の竹のように眞直ぐになり、小竹に一つ一つ足をかけて登るのである。次は繩梯子、これは普通の繩梯子である。次は浮橋。繩梯子を橫にしてたもので、谷や川

釣梯子

長さ弐丈五尺、横六寸、麻縄又は蕨縄で作る。
鐵釣圖の如くで、巖石等嶮しき上に木立ある所に用ふ。

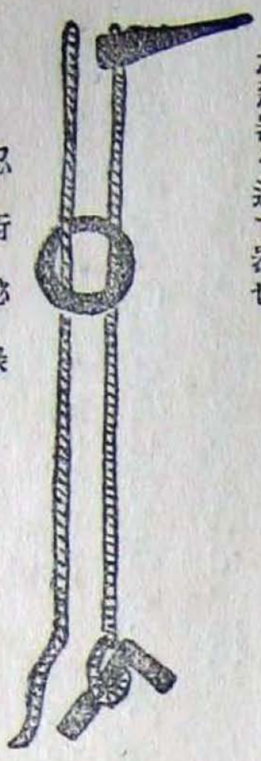


巻梯子　長さ七尺位。



高梯子

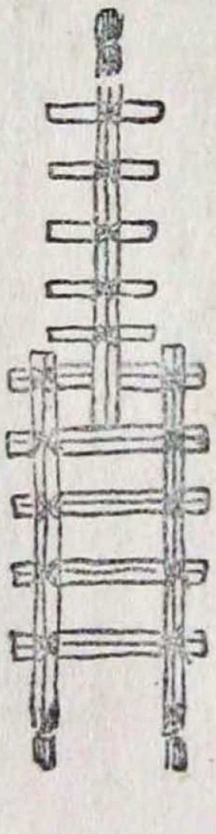
鐵輪圖の如く縄を付け一筋は輪の中に入る。
之忍器を通す器也。



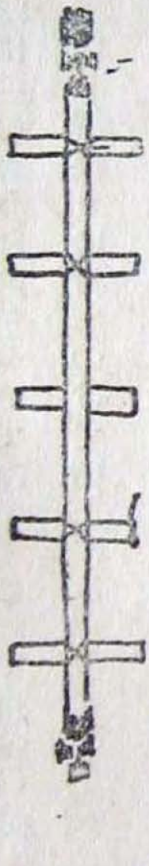
忍術祕錄

飛梯子

大竹を割合せて作る。上下を藁で包む。



雲梯子



を渡る道具である。先端に大きな釘が數本ついてゐて、これでさゝへるのである。次はクモ梯子、小さな滑車に繩を通したもので、繩の一端に綻のような鉤がついてゐて、これに自分の身體をつるしたり、荷物をつるして、滑車を屋根なり塀なりに打ちつけて引上げる。

戸締め器、之は卍形に凸つた小さな鐵の道具で、これを障子や戸の間へはさみ込むとどうしても開けることが出來ない。次は忍び頭巾、これは普通の忍び頭巾で、防禦用のもので、折疊式になつてゐるので携帶に便利である。次は長嚢、以上の道具を入れておく袋で、同時に現在火事の際用ひられる救命袋と同じ役もつとめるのである。

以上の外、忍術の器械道具といふのは無數である。大別すると、高い處へ登る爲の道具、水中に使用する道具、戸を開く道具、次に火器となる。火器は古來忍術で一番重く見たもので、あれだけで一冊になつて居る。

火器は忍術要道の根元と言はれて、其用は、

第一に、城郭陣營の堅固なるに對し、之に放火燒失する事が利あり。

第二には、晝夜共に味方と合圖を爲すには火光が一番有利である。

第三には、風雨にも消えざる炬火は以て味方の難を救ふの利がある。

そこで火器は百餘種工夫され、巧妙を極めたものである。但し今日の電燈、瓦斯、火藥などの發達の爲めに、是等の多くは不用に歸した形である。それでも其の時と場合に應ずる方面の工夫を熟讀翫味する時は、今日の火力を一層に進歩發達せしむる事が出來やう。兎に角、我等國民の祖先が、是れだけの工夫發明をしたといふ點だけでも敬服に値するのである。其名稱だけを並べて見ても、用意と工夫の程度が解る。

五里炬火方、雨炬火、風雨炬火、生滅火の法、水の明松、義經水炬火。上々水炬火極祕の方、打松明、振り松明、やばら松明（之れは、振れば消え、吹けば燃え、火先を小刀にて落せば又燃える）。袖火方、敵討藥、義經火。水篝方、水火繩、一寸火繩、濡火繩狼煙方、不滅松明、篩火炬、夢想火、猿火、懐中火、手火炬、手の内火、天狗火、水火、其他數ふるに暇がない。それが、何れも完全な製法を説明して居るので、試みに二三其の製作法を述べる。

水火繩——硝（七十匁）、水（天目に二盃）其中に火繩一曲入れ煎じ、樟七十匁、松脂五十匁、椿の實の油にてねばみに解き、火繩の上に引き、扨て蠟を鎔きて何遍も引きて用ゆ。

風雨炬火――苧屑百メ、硝五匁、艾百匁を白くなる程に揉み一夜水に浸す。黄十匁、樟五十匁、樒十五匁、胡麻八匁、松脂二十匁、イボタ五匁、龍三匁、松挽粉二十五匁、挽茶八匁。

右は、ほんの一例であるが、能く、鼠や牛の糞を交ぜる法が書いてあるなどは、多年の經驗から會得した祕術であらう。

又、戸を開ける器械などは、澤山に圖解が出て居る。錠といふのは、當節の金庫は特別丈夫で複雜な錠前であるが、其他は大抵よい加減なもので、現に税關の人達は、旅客のカバンなど、船中で造作なく開いて調べる位であるから、忍術の方の開器が、今後にも十分參考となるものが多からうと思ふ。日本の忍術者は世界一番の發明家で、何れの國よりも先きにいろ〳〵の新發明をして居たと言はれる。唯それが軍用機密に屬するので、公表しなかつたといふのも一理ある事であらう。

結印法

印を結ぶは精神の統一

尙ほ一つ印を結ぶといふ不思議の術は、之こそ忍術の玄妙奥諦と見られて居るのであるが當節、無線電信といふ大發明もある位で、人間も自分の一心凝つては精神の働き一つで、敵手を自在に操縱する事が出來るとも言へる。印を結ぶの術は、つまり自分の精神を統一し、我必ず勝ち得るといふ信念を作り上げるのである。萬事休すといふ切端詰つた際にも、神氣動亂せず劍光裏に萬人を安んずる氣魄を磨き、心眼を明かにし、何れか一方に血路を開くの工夫をする爲である。死を恐れざる者程强い者はないので、敵の包圍中に在つて冷眼以て隙を見出し、活路を開くといふ武道の奥義が茲に在るのである。昔は孔明、樽門に童子を曳いて琴を彈じ、以

て能く老猾なる仲達を斥けたといふのも此の妙諦で、印を結ぶは琴を彈ずると同じ心である。此の不動の一心成つて始めて、忍術の妙技も成功する。

そして精神統一の方法として、古來の傳書には、忍者が先づ呪文を唱へ、印を結ぶ事にしてある。かくして術者は心の安定を得、精神を信仰に結び付けて自信力を强めるのである。昔から眞言宗では、身、口、意の三密を具足する事を敎へた。眞言の方ではこの三つが完全に一致した時に、卽身成佛が出來るとされてゐる。忍道ではこの身を印、口を呪文、意を觀念と結びつけて、印と呪文と觀念が一致すればそこに法力が直に具顯されると言つた。かうしたところに科學的に構成されてゐる忍術も、あくまで神佛にたよつてゐるので、已れを正しくしてそこに神佛の加護を仰ぐといふのは、我れ乍ら進んで危地を冒かす忍術家に取つては、唯一の心頼みであつたに違ひないのである。

九字護身法

昔から九字護身法といふのがあつて、之を兵法九字の大事として居た。

「抑々九字の事は、心を護るの大秘法にして輕忽のことにあらず。其の法先づ毎朝手洗口嗽をし、北に向つて濁氣を吐き棄て、東方に向つて口を閉き、息を内に引き、生氣を吸ふ事三たび次に齒を叩く事三十六、下心を安靜して之を修す。或は旅にて又山中、曠野、或は夜行、又闇室、孤居にも是を修すれば、自身忽ち威力を增し、諸々の怨敵、惡魔、狐狸の屬迄、便を伺ひ障碍を爲す事能はず。神妙不測の大秘法と信じ、疑の心を生ずる事なく至信以て之を行ふべし。

但しかく尊き法なれば、其の人平常仁慈忠孝の志無くして、非法濫行の族は更に驗なく、却て冥罰を蒙る。心、正直潔白に、天道を畏れ、人道に背かず、己が家業を大切にし、正直に此法を修すれば、必ず利益著しく、劔賊水火難一切惡事災厄を免れ、安穩身護の秘法にして衆人の爲に廣く師傳の旨を傳ふるものなり。

大摩利支尊天秘授兵法九字の大事は、身心を堅固にし、運力を增し、怨敵を退け、惡魔を拂ひ、惡靈、邪鬼、妖怪を滅ぼし、惣じて一切の厄難を除き、諸々の願望を成就圓滿ならしむるの神術なり。至心に傳授して久しく修する人は靈驗實なり」

と記されてある。神佛は善人義人を助け護るので、心の正しからず私利私慾を専らとする者には、此の功德をも與へないとしてある處は、我が武士道精神の精髓である、

扨て此の印を結ぶに付いては、九字に應じて九種の方式がある。一獨鈷の印、二大金剛輪印、三外獅子印、四內獅子印、五外縛印、六內縛印、七智拳印、八日輪印、九隱形印、最後に此の九字印を切る爲めの刀印である。之は、例の「臨兵闘者皆陣列在前」の九字に當てるもので、之を圖解すると左の如くである。

臨

獨鈷の印



獨鈷印　左右の手をうちへくみて頭指をたてあはす

天照皇大神　毘沙門天

兵

大金剛輪印



大金剛輪印　二手うちにくみ頭指を下へ付中指にてからむ

正八幡大神　十一面觀世音

闘

外獅子印



外獅子印　左右互に中指にて頭指をからみ大指先名指小指を立て合す

春日大明神　如意輪觀世音

者

内獅子印



内獅子印　左右互に中指で先名指とからみ大指頭指小指を立て合す

加茂　明神　不動明王

皆

外縛印



外縛印　二手おの〱外へくみ合す

稲荷大明神　愛染明王

陣

内縛印



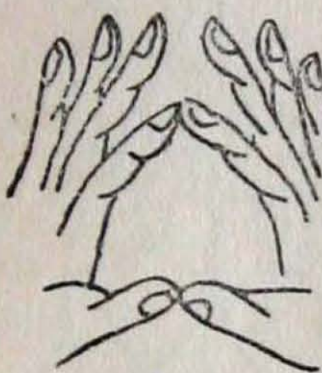
列

智拳印



在

日輪印



内縛印

十指互に内へくみ入るゝなり

住吉大明神　正觀世音

智拳印

左四指をにぎりて頭指をたて右にして圖の如く左の頭指をとる

丹生大明神　阿彌陀如來

日輪印

左右の大指頭指先きをつけ餘の四指は開き散ず

日天子　彌勒菩薩

前

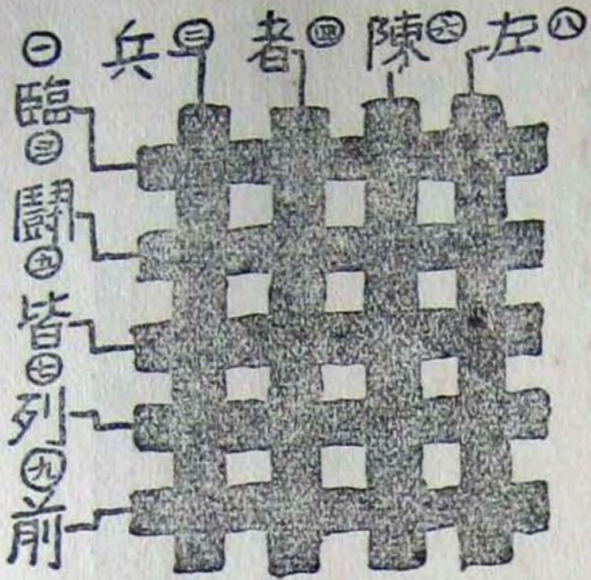
隠形印



隠形印　左の手をうつろにゝぎり右の手の上に置く

摩利支天　文殊菩薩

次に刀印を結び九字を唱へながら圖の如く書くのである。





印明護身法其他

右九字の印以外にも、結印の方式はまだ〳〵澤山にある。その一つに護身印明といふのがある。

「淨三業、三部被甲、是を護身法といふ、十八契印第一にして、秘密の印言なり。此法を修せんと欲せば、身器を淸淨にし、壇上を裝飾して供典を備へ、五體を地に抛ちて本尊を禮拜し奉り、誠心に修業すべく。

如法に行ずれば、身、口、意につくる處の罪障を消除し、三部諸尊の加護を蒙り、身を堅固ならしめ、諸々の魔性を降伏し、水、火、盜、病一切の厄難の恐れなからしむ。眞に之れ未曾有の密法なれば、謹んで行ひ奉るべし。此法は密家に秘する處なれども二三輩の信士の懇請するに任せて梓に壽するものなり」と。

以下右護身法印明の圖解を示す。

（一）　浄三業印明　是は、身、口、意に作る處の諸々罪業を滅して、清淨なる事を得せしむる印明である。



左右の手を打合せて業中を空虚にす、之を虚心合掌といふ。

呪文左の如し。

唵薩嚩婆嚩。輸駄薩嚩達磨。薩嚩婆嚩。輸度唅

（二）　佛部三昧耶印　是は、十方三世諸佛の護念を得て、其命を増し、福惠を長ず。



前の印にて掌を開き、風指の端を二中指の上節につけ、二大指を屈して頭指の下節に安んず。之にも呪文左の如し。

唵怛他蘖都納婆嚩也。娑嚩訶

（三）　蓮華部三昧耶印　是は觀世音菩薩等の諸々の菩薩の加持を得て一切の業障を消除するのである。



左右の五指を開き散らして大指小指を相つけて、八葉蓮華の形の如くする。呪文左の如し。

唵跛娜謨納婆嚩也。娑嚩訶

(四)　金剛部三昧耶印　是は金剛部の諸尊の加被を得て、一切の病難を除き、堅固の體となる。



左掌をかへしふせて外へ向け、右を仰ぎて手の背をつけ、大指小指互ひにはしを引きかけて、鉤の如くす。呪文左の如し。

唵嚩日盧。納婆嚩也。娑嚩訶

（五）護身三昧耶印　是は諸々の天魔の障碍を除き一切の厄難を除け、身をして堅固ならしむ。



二手内に交えて、二中指の端を合せ、二頭指を少し曲げて、二大指にて無名指のもとをおす。呪文左の如し。

唵嚩日羅銀儞。鉢羅捻跛跢也。娑嚩訶

（六）不動明王金縛法　次に世間で能く言ふ不動の金縛りといふのを圖解する。

此の法を行ふには、先づ九字護身法と不動經を讀誦する。次に又左の歌を唱へる。

「よるくともよもや許さず縛り繩不動の心あるに限らん」。

次に

轉法輪印



東方―降三世夜叉明王　南方―軍多利夜叉明王
西方―大威德夜叉明王　北方―金剛夜叉明王
中央―大日大聖不動明王
〇眞言―をんびんびしからからしばりそわか

以上、結印の大略である。錦繪の忍術の圖は何れも幻怪を極めたもので、百日鬘に金ピカの鎖かたびら裝束で、手は左右重ねて人差指を上に向けて居る所は、世界何れの魔法にも武術にも見られぬ形である。之は右の九字の印から轉化したものである。要するに忍術の結印は前にも説いた通り、生死岸頭に立つて、一身を神佛の加護に任せて疑はず、我が心を安定して死中の活を得るの心得である。神に賴る事はやがて我が力に賴る事である。我は宇宙の一分子である以上、亦神の一分子である。我は神―宇宙と合體して、そこに無限の大威力を得る工夫とも見られやう。人間は危急存亡の場合には、手足を張るとか手に汗握るとか、我れ知らず手を合

せるとか、手の作用は神變不可思議である。

兩手を合せて印を結ぶといふのは、此の自然の衝動から考へ出された事であつて、心と形と相卽した處に玄妙の機がある。「心だに誠の道に叶ひなば、祈らずとても神や守らん」といふも道理ながら、忍者又正しき心を以て神明加護を祈る心の表現が結印となつたものである。と言つた處で平生邪惡の心術では、いざといふ時、神佛を祈るとも威力は生じないのである、況んや敵を調伏する事をや。常に危地を踏む忍者は、常に正しき心を以て勇氣を養ふのである。

以上述べ來つた方法と、道具と、身體と三ツ揃ふたら鬼に金棒で、天下無敵である。かくして忍者は、鬼神を役するが如き妙術を行ひ得ると稱して差支えないのである。其實は理詰めに考案した、人力の限りを盡した仕事であつて、何んの不思議といふ點もないのであるが、之が實際に行はれた結果から見ると、全く芝居がかりの不可思議極まつたもので、此の忍術に引掛つて、損害を受けた方の人々から言はせると、其場の突然な出來事と、狼狽と、驚愕と、恐怖とからして、五寸の蟇が五尺にも見え、火藥の爆發は、雷霆雲霧にも見え、仁木彈正は、實際

鼠に乘つて居たとも見え、才藏は霧に隱れたとも見える事であらう。

噓と云へば噓、本當と言へば本當、忍術の妙は、敵手を夢幻境に陷れる處にある。而して之が武術練習の極致でもあるので、今日の樣に板張りの道場に、面を着けて竹刀を構へて、審判官付きの遊藝劍術とはそれこそ霄壤の差がある。不意を打たれたから負けたなどゝ、凉しい顏をして居られるものではない。

大死一番の覺悟

九字を切り印を結ぶ事に依つて精神の統一を圖り、心を平靜にして、危急の場合に活路を見出すといふ事と同時に、人間は又大死一番の覺悟を要するのである。我日本國の武道精神とても、其の根本は死を恐れぬ覺悟から發するのである。死を恐れて苟くも生を得んと欲するに於ては、どんなにしても最後の覺悟が出でず、心の安定を得ない。

「百戰の工夫一杯に出づ」といふ事があつて、人間、分別に餘つたら理窟にこだはらずに、一杯の酒を飲めと敎へてあるが、之と同じ事に心の安定は、死を決する處にのみ生ずる。窮して悲嘆に呉れ、めそ〳〵泣いて居るだけだは、心が愈よ亂れて名案も出ないものである。

一旦死を覺悟して了つたら心朗らかになり、自分の身を第三者の地位から觀察する事が出來る。そこに始めて救濟策も考へられるのである。之が死中に活を得る忍術の極意にも當るので、

其一例として示された一つの譬へ話といふのが極めて興味あるものである。此話は盜賊の事にしてあるが、其の趣旨とする處は盜み其物でなく、人心の機微を示した點にある。人間死を決して始めて生を得るの妙諦を示したものとして、再讀翫味する價値があると思ふのである。是は忍術傳書中に載せられた祕錄である。

昔、一人の盜人が有つて一子を儲けた、此の子成長して思ふやう。

「已れはまだ親父から盜人の術を習つて居ない。此の儘、親父に死なれたら何んで生活し得やう。盜人の子は盜人の外に生活の方がない。こんな山中に人里離れて住み、村人とも交際してないから、正業に就くたよりもない。」

と、そこで一日父親に向つて盜人の法を敎へて呉れといふ。父の盜人、

「宜しい、之も我等親子の宿命ならん。貴樣に盜人の術を今夜敎へ遣はすから、我が跡について來い」

それから日が暮れると、親子二人、村里へ下り、或物持の家へ忍び入り、長持を開いて、中に在つた財寶を取出し、親盜人のいふ事に、

「お前此長持の中へ入れ」
子は、怪訝な色であつたが、親の命に任せて中へ入ると、親は長持の蓋を元の如くにし、外から錠を卸ろし、盗み出した物を皆な取持ち、扨て高聲に、
「盗人よ〳〵！」
と呼ばはつて逃げ去つた。家人大いに驚き皆起きて見たが、盗賊の姿は已に去つて見えず、屋内に異状もないから、長持の事も氣が付かず、やがて騷ぎも靜り又寢て了つた。長持の中に封ぜられた子盗人は扨て困つた。
「親父は何故こんな事をしたのだらう。兎に角自分も今夜中に逃げなければ、夜明けては迚も逃げる方もない。何とか工夫しなくては」
と、いろ〳〵考へた末、絕對絕命、勇氣を奮ひ起して一計を案じ、指の爪で長持をがり〳〵掻いた。それは鼠が物をかじる音に擬したのである。家人又目を覺まし、
「今夜は扨て〳〵物騷であるわい。何かごそ〳〵がり〳〵變な事ぢや、も一度起きて調べて見やう」

と起き出て、

「此の長持の中に鼠が入つて居るそうな、大事な品も有る事故、開けて見なくてはならぬ」

とやがて蓋を開けると、子盗人は中からさつと身を躍らして飛び出で、家主を突き倒して韋駄天走りに逃げた。

「やれ盗人よ！」

と、驚き狼狽して之を追つかけた。子盗人は逃げて屋外に出て、井戸の端迄來た時、しばし息を繼ぎ、何處迄も追ひかけられては堪らないと考へ又一計を案じ、傍の大きな石を見附けて之を井戸の中へ落して逃げた。其の水音が深夜の空にこだまして物凄かつたので、

「扨ては盗人は井戸へ落ちた！」

とばかり、そこへ行つてあれこれと罵る隙に、子盗人は難なく我家へ歸つた。すると親盗人は、

「手前どうして歸つて來た！」

是れ〳〵と子盗人は語る、親盗人は滿足げに子盗人を見て、

「手前は盜人になれるぞ！」
と言つた。つまり親は子を捨てたので、子は必死の覺悟を定めて遂に謀略を悟つたのである。
彼は身を捨て切つて捕へらるゝか、それとも逃げ終せやうか二つ一つの度胸を定めたから、遂に一命を免れたのである。兎つ追ひつ心惑ふて居る間は、智略も出ないが、命を無きものと覺悟したから、此の場合の事情が明かに悟られて、相應の智略が出て身を免れたのである。
又、昔、唐の王鎭惡といふ者が、秦の國を征伐のため數千人を引卒し、兵船に取乘り、遙かに海上を經て秦に赴き、其の清橋といふ處に着いて舟より上り、兵粮衣類をば共儘舟に入れ置き、甲冑、器械ばかりを舟から取出し山に登り、其夜の風に任せて舟を海上遙かに流して了つた。それから王鎭は軍勢に向つて告ぐる樣、
「見る通り舟揖、衣類、兵粮、悉く流して了つた。我が故鄕の長安城へは萬里の路がある。此上は進んで戰ひ勝たざるに於ては、再び本國へ歸る事が出來ないのである」
是を聞いて兵士共一時は怨み顏であつたが、能く考へると、必死を極めて戰ふ一途あるのみといふ點に氣が付き、臆病者も勇敢になり、死物狂ひで戰ひ、身を捨て切り、先きへ〳〵と戰

ひ進んだ爲めに、遂に秦の大國を屈服せしめたといふ事がある。

忍術餘瀝

以下の諸編は、余が多年忍術研究練習の間に得たる副産物である。是又興味ある事に屬し、餘暇あらば之を忍術祕錄の中へ適宜織り込む筈であつたが、本書發行が急なりし爲め其都合も付かず、そのまゝ載せたる次第である。

小武器の研究

力に餘らぬ限り、大きい武器、長い武器の有利である事は勿論である。昔は槍は戰場の長器と言つた位である。封建時代に侍の表道具として、大小を公然手挾む事の許された時代には、各自、自分の手に合ふ日本刀を帶したのであるから、小さい武器、隱し物などの必要も余りなかつた。それでも、萬一の場合を豫想して、用心の爲め護身の爲め、即ち防禦用としていろいろの小武器が考案された。武術に精妙で、用意周到な人程小武器の必要を感じた。それが爲めにいろ〳〵の小武器が考案されたのである。

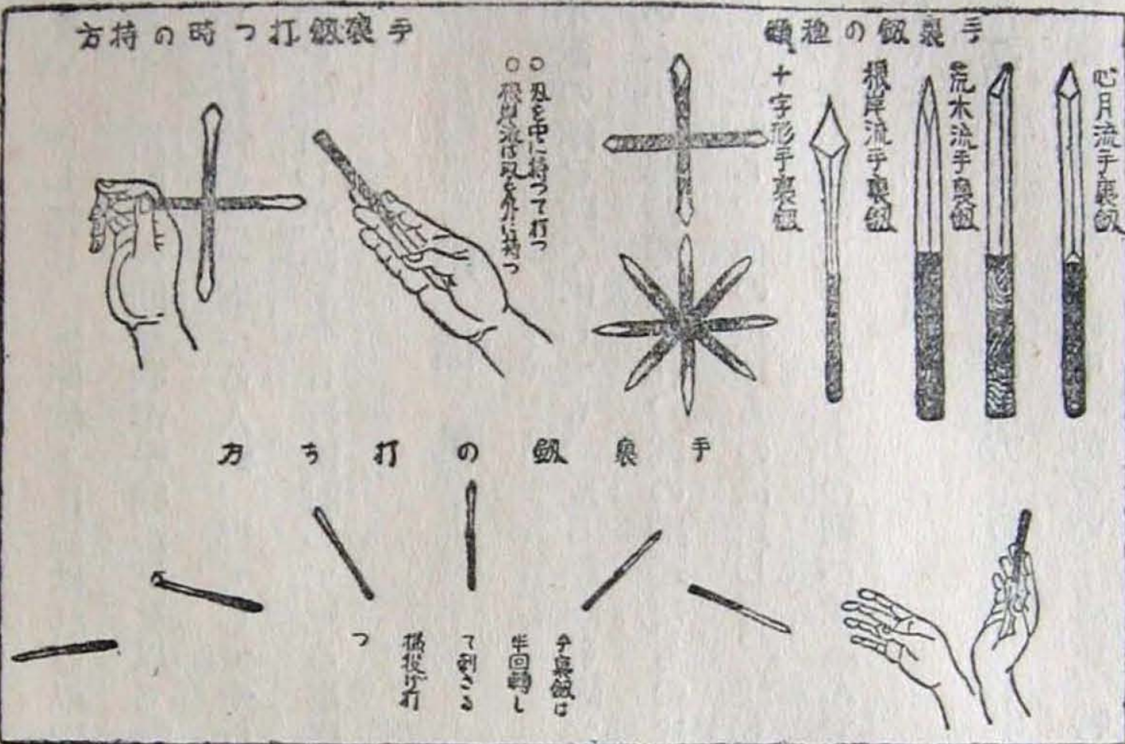
今日、帶刀が禁じられ、而かも人間が幾多の危險に暴露される時代に在つては、小武器に類する物の必要を切に感ずるといふ、用心堅固な人も相當多かるべき筈である。國家に軍隊あり、市町村に警察あるといふ文明開化の今日にあつては、各自の護身術など餘計ものだと考へる人

が多い。併し毎日、新聞紙上に現はれる刄物沙汰、暴行沙汰には、後の祭りとなる事が多いのである。所詮、人間は我が手我が足を以て我身を護る外ないのである。「まさか」「滅多に」などいふ氣休めなぞ考へる人が、得てしてやられるのである。尙武國の日本人が、古來どんな小武器を案出したかを今日再檢討して見る事は、趣味實益共に得らるゝ事と思ふ。

飛道具

不意の敵を防ぐにしても、或る距離を隔てゝ仕事をするのは最も安全である。そこで飛道具といふ小武器が考案され、其の顯著なものは手裏劍である。一體武士に飛び道具は卑法などゝ言はれたから、他の投げものに比して、最も體裁のよい、人目に付かぬ飛道具たる手裏劍が珍重されたも當然であらう。刀の鞘へ仕込んで置かれるので最も便利であり、小柄、其儘で手裏劍にもなるのである。

手裏劍にはいろ〳〵の仕方があつた。十字形や、矢車形などは、其の一端を二本の指でつまんで縱に投げるので命中率が多い。之は、特殊なもので、刀の鞘へ仕込む譯には行かない。何



れかと言へば携帯不便な方の道具であるが、精妙な業を要せず、練習も少くとも宜しい。つまり後代になつて手よりは頭を働かした道具である。敵と近づいた場合には、當節の學生が竹刀の鍔で敵手を打つ様に、此の十字や矢車の尖端で敵を打つ事も出事るので、そこが一つの新案でもある。小刀形の手裏劍の使用法は、尖先きを手前にし、柄の方を向ふにして逆に半周して敵の顔へ刺すといふ建て前であり、之が業の精妙を要する處であり、工夫の優れた處でもある。上達したら三四間の距離から命中する。素人が投げた處で、直ぐ命中するといふ譯にも行かないが、練習といふのは恐ろしい。或人が一文錢

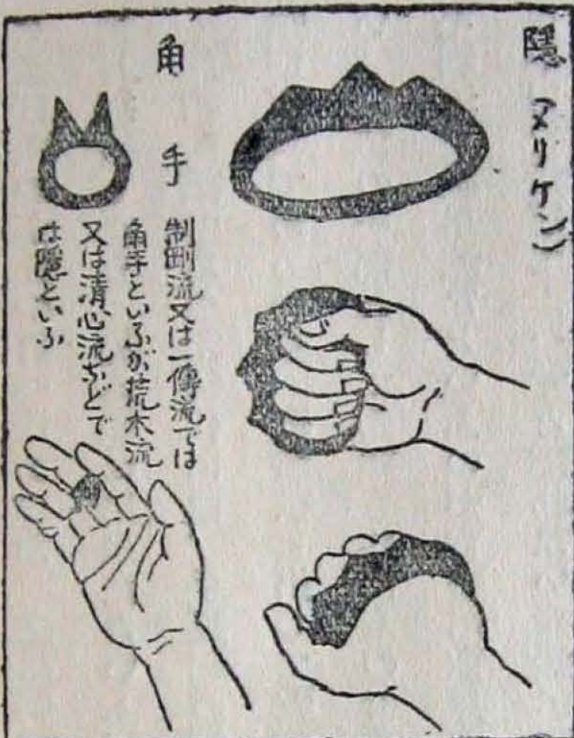
を投げたのが柱の釘へはまつた。之は偶然なので其後繰返しても當らない。それを根氣能く數ヶ月練習したら、思ふ樣に出來たといふ。

武術生業であつた時代には、手裏劍の練習位は心がけのよい人には當然の事であつた。但し飛び道具であるから、表看板を出して教授するといふ事はない。各自密かに練習したものらしい。劍道の一部として修業されたものであらう。それで手裏劍には、根岸流、新月流、荒木流、毛利流、義尾流などいふのが古書に散見する。當節の曲藝として板へ美人を縛し、或る距離から小刀を投げて、一寸と離れない身邊に刺して見せるといふのもある。手裏劍術を見世物にした形である。業として巧妙なものである。

手裏劍代用物には、婦人の笄、かんざしがある。笄には劍形に作つたものさへあり、かんざしも手裏劍用に作つたものがある。又男の使用する針があつた。之は、鬢髮の間へ隱して置いて、いざといふ時、敵面へ投げ付ける工夫である。双鬢へ二本づつ忍ばせて居たといふ。是等手裏劍代用物は、何れも相當重味を持たせて、且つ重心の位置を考慮に入れて作つたものである。

角手、隠し物

次に極く小さい武器では、「角手」や「隠し」といふのがある。角手は、圖の如く指環に角を付けたもので、之を中指にはめ、敵の手を捉へて強く振り、角の爲めに敵は痛さに堪へず參つて了ふ。之は制剛流、一傳流では角手と言ひ、又荒木流、清心流では「隠し」と言つた。本物の隠しには、圖の如き一種のメリケンサツク式の物がある。之は鎖かたびら式の作法で、拳鬪の手套のやうになり、敵の面を打つのである。



又同じ様な材料で、手や掌を保護するものを作り、敵の打つて來る白刃を手づかみにして奪ふといふのもある。メリケンサツクの起因も、東洋傳統かも知れぬ。

同じ隠しの部に入るべき武器に、手の中へ鋭利な刄物を忍ばせて、小指へ角手式のもつと巾の廣

いものを指一杯にはめて、之を手刀にするなどいふ工夫もあつた。手甲や手套をかけて此の刄物を隠し、平手で敵を斬るといふ物凄いことである。或る侍が田舎者の面前で、此の手刀で猫を斬つて見せた。それと知らぬ田舎者が手の肉でも修業すれば、斬れると聞かされて驚嘆し、其の練習法を問ふた。侍は、眞面目に說法して、

「裏の小川へ行つて、早い流れを、毎日、平手で逆に水を切り、それが水流を亂さない位に冴えて來ると、犬でも人間でも首が斬れる」と敎へた。田舎者が程經て此侍を又訪問し、

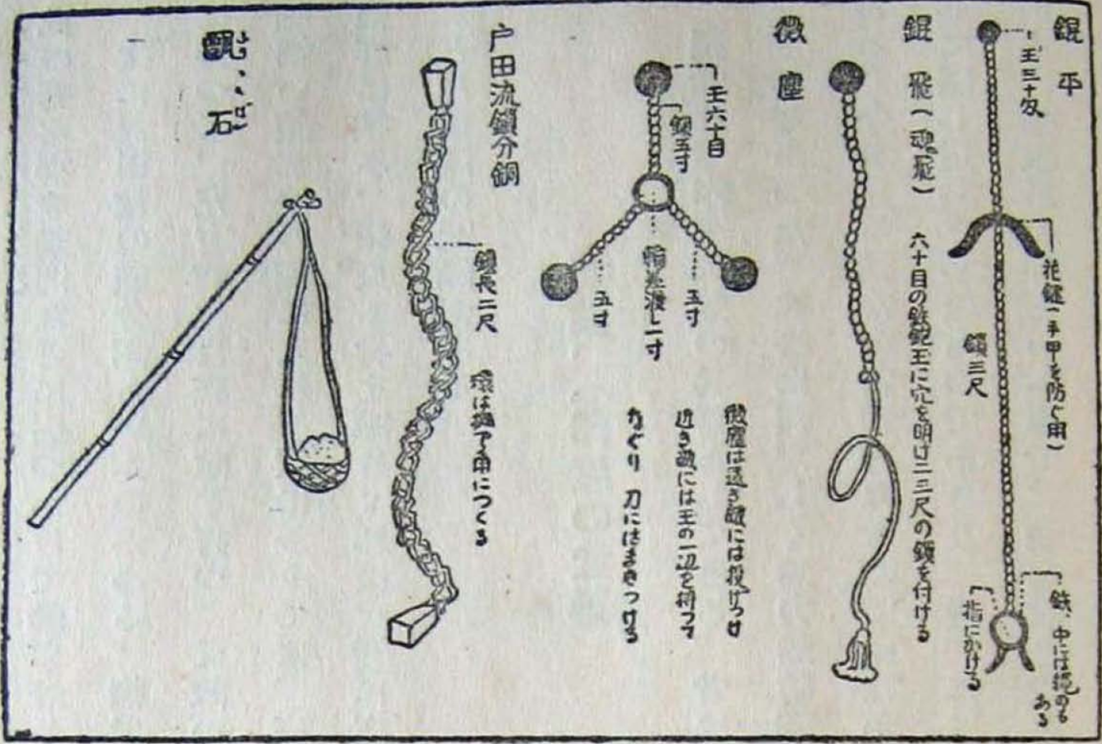
「お陰で、私の手刀も役に立つ迄になりました」

といふ。侍は怪しんで、其處に居る犬をやつて見よといふ。さつと目にも留らぬ早業で、田舎者が手を擧げたと見るとギヤンと一聲、犬の首は落ちて鮮血迸つた。侍は魂消(たまげ)て、後世畏るべしとばかり、其晩此田舎者を闇打ちに斬つて棄てたといふ話もある。講談本などに、掏摸が、此の小指の隠刄を使用した事が見えたやうに思ふ。之などは物凄い小武器だ。

鎖と分銅

鎖といふと、直ぐ鎌を聯想するのであるが、鎌は小道具の様であるが、實地には鎖鎌といふのは隨分と大がゝりな、道場一杯兩手を擴げる大武器である。迚も懷中したり萬一の護身用などいふ建前のものでない。處が鎖と分銅丈けの小道具は、數種工夫された。鎚平、鎚飛、微塵などいふのがある。微塵といふのは圖の如きもので、之は近き敵をば、其一端か又は中央の環へ指を通して丸分銅で打つ。離れた敵へは投げ附ける。敵が刀で斬つて來たら、鎖で捲くといふ仲々考へた道具で、全體の長さ一尺であるから、懷中へ忍ばせるに好都合でもある。

鎚飛は、圖の如く、分銅へ鎖を附け、直端へ紐が着いて居る、之は片手で振つて投げ付けるか、又は敵の面を狙つて打ちからむのである。或る馬方の喧嘩上手が、堅い手綱を作り、いざとなると其の端を結び玉にして、それで敵を打つたといふ。しなやかな鞭位に彈力がある手綱へ、大きく結び玉が付くと相當な武器になつたらしいが、滅多に肉を破つて血を出す事がないので、後が面倒がなくてよかつたといふ。是などは新時代の護身具にヒントを與へる代物であらう。其に似た小武器には、鎖を縮緬の細い長い袋に入れて懷中し、敵をひつぱたく、又切合ひの時は、其儘鉢卷にしたといふ。中々氣の利いたやり方である。捕方などにはお誂へなので



ある。十手が邪魔になる場合にはこんなものが重寶であつたらう。

錏平といふのは、圖の如く、角手と、鎖と、分銅と、手甲を防ぐ鍔を備へた武器で、鎖物では一番工夫を積んだものであらう。下方の角手を左手の指にかけて、三尺の鎖を振る。鎖に通してある鍔は、自由に上下する仕かけである。右手の甲が始終此の鍔で保護されるから、敵刄も恐るゝに足らず、隙あれば、分銅で打つ、又は鎖を左右の手であしらつて、敵刄に捲き付ける。又左手で、敵の手を振ると、角手が利く、敵に取つては容易ならぬ難物である。それで懐中へ忍ばせる事が出來る。忍術者の場合には、

此の鍔を塀や轅門(えんもん)などに引つかけて攀ぢ登る助けにもならう。

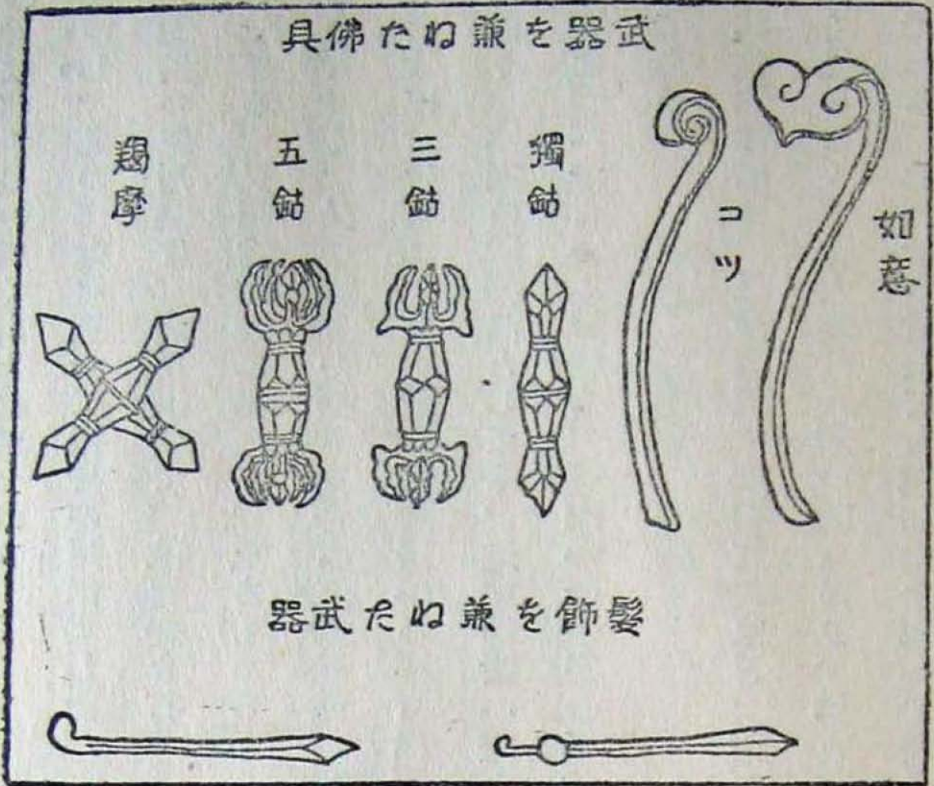
次に戸田流の鎖分銅といふのがある。撫で角二尺の環にして、兩端に角分銅を付ける、兩手に持つて、左右變化自在に敵を打つ。又敵の刀をからみ取る。之は、「細い鎖丈けの袋に入れ、家におりては、座右に置き常に翫となし、戸外に出づる時は、袋の儘腰に挾み、須臾(すゆ)も身を離さゞれば、變に臨みて益あるべし」

と戸田流の記録がある。

獨鈷、(印度の武器)

獨鈷は、本來天笠の兵器としてある。昔は天笠即ち印度では、庶民階級は武器を貯ふる事を許されなかつた。彼等は甚だしく無力無防禦の地に置かれた。そこで案出したのは此の獨鈷である。今日見る樣な相當精巧なものではなかつたらう。小形で一握りのものであるから、懷中して隱し道具としたものであらう。後代には專ら佛具とし、眞言宗などで用ゐる。本名は杵である。摧破用の杵といふ事で、法を說き疑を斷つとしたものである。又一切の俗慾を切斷する

の證としてある。銅を以て作り、其の兩端、各々一尖なるは獨鈷、三叉あるは三鈷、五叉なる



は五鈷といふ。帶地に獨鈷といふ名稱は獨鈷形の織模樣をしたものをいふのである。僧家では、例の酒を盤若湯といふ格で、獨鈷とは鰹節の隱語である。又獨鈷を十字に組合せたのは羯摩と言ふ。

一見佛具と目されはしたものゝ、僧家に取つては、帶刀を許されない身に、重要な武器である。錫杖や金剛杖といふ武器は僧家にあり、彼等は錫杖一本あつたら、山に入つて猛獸毒蛇を退治し、堀立ての堂宇を建て一山の開祖ともなる樣に、勇猛不退轉の氣魄と共に武藝をも練習したものである。殊にも眞言宗

の僧は、手足の利く者と目せられた。そこで彼等は隱し武器として、慈悲忍辱の身に短刀も面はゆし、此の獨鈷を振つて護身の用に供した。

獨鈷の使用法は、之を振つて、敵を突き打つ。柔術者に取つても「當てる」爲めに絕好の道具である。又相當丈夫に出來て、重さもあるから、投げ付けるに手頃である。平たい獨鈷は命中率も多く、又中細りの振り具合も三鈷五鈷の場合にも狙ひが付きよいのである。一つ突かれ又は投げ付けられたら、致命傷を與へる事も出來やう。獨鈷の紋樣は、相稱的で、複雜で雅趣があり、佛家の所持品としても、愛慾切斷の證として振るといふも、應はしいのである。身に寸鐵を帶びずといふ難場も、羯摩形の十字の獨鈷一つ振つて居たら、空拳には百倍も增した武器である。

其他佛像には、毘沙門天、摩利支天など、何かしら武器を振り、右手を高く翳して居るのが能く見らるゝ。殺人劍活人劍の話もあり、佛と言へば、蟲も殺さぬ柔弱一方と考へるは大間違ひである。それで老僧なども鐵如意を携へて居る。之も立派な武器で、わらび手に一端が捲いて作られた如意の一擊は、人の頭腦を破裂せしむるに足る。彼等が座臥之を身邊から放さなか

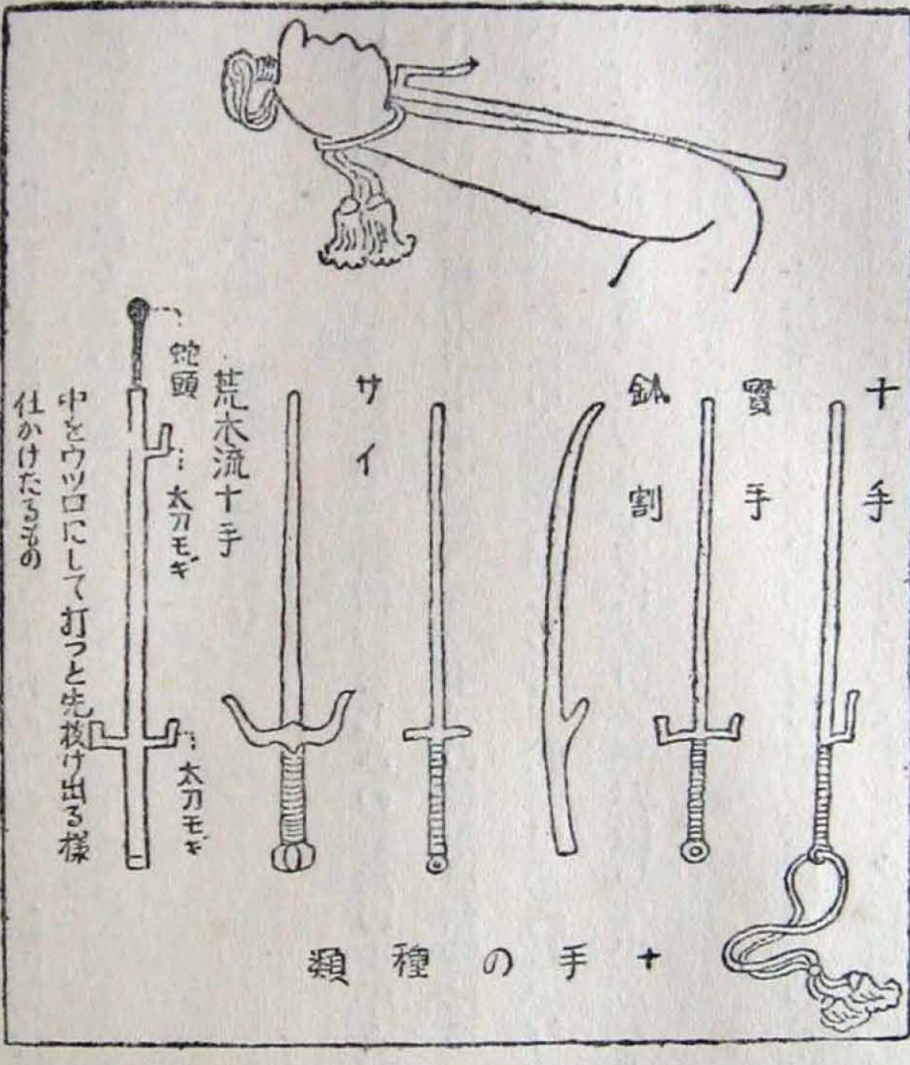
つたといふも、護身の意味があり、武士が兩刀を離さなかつた様なものであらう。衆生を濟度する爲には、剛勇無双金剛力を必要としたのである。叡山の山僧、根來や奈良の法所など、昔日の武力は恐るべきものであつた。

十手、實手、鉢割り

是は當節のチャンバラ映畫で、皆様おなじみの朱房の十手と來る。小武器として一般に能く知られたものは、短刀と十手であらう。十手の種類は無數に多い、變つたものでは荒木流の十手といふのがある。之は中途迄空洞にして、蛇頭に仕込み、打ち込む時、此蛇頭が首を出して敵を强打するのである。上方と下方に太刀モギが附いて居るなど、用意周到である。受ける、打つ、共に完備した道具である。

本來、十手は、十指を合さた程、捕り方に取つて威力があるといふ意で之を名稱としたと言はれる。普通捕物用の十手は一尺二寸としてある。之は逆手に握つて、自分の腕に、手首から肘迄添へ、敵の白刄を受け留めて、共のかぎの手で白刄を引き落すとしたものである。普通人

の手首から肘迄の寸法を一尺二寸としたものである。



十手の持ち方は圖の如く持つもので、寸法は一尺二三寸が定寸。それは肘の長さにあはせたもので、刀で斬つてくれば鐵身で受けて外し、手元にくれば太刀モギで刀身をはさんで刄先をねじり、敵の身邊につけ入りて捕へる。紐は手にからげておいて、組打などの場合でも身體から離れぬやうにし、立合の際は紐を手に持つて十手を振りまはし、敵の頭部面部腕等を打つ用にもする。

別名、實手、叉鉢割、釆などいふのもある。片かぎのものも、兩かぎの鍔となつて居るのも

ある。本來は、逆手に握つて敵の刄をもぎ取るといふ建て前ながら、時には、隙を見て烈しく打ち込んで、敵の手を萎えしめる場合もある。捕方用として最も多く使用された武器で、敵を生捕る爲めなのである。

西洋傳來のものが先祖であるとも言はれる、南蠻船來の十手といふのは、十字架形で、握りは鞘の樣に圓い柄を手の内に付けてある。それ丈け握りが太く、具合がよい。町奉行など、上役の持つた十手は、又一工夫を加へた細身の長いもので、逆手用よりは打込みを主とした拵へである。鍔かぎを付けた上に、西洋式の籠手鍔なりに手の甲を防ぐ作りになつたものさへある。上圖の形である。朱房の威力といふのは、徳川時代には大したもので、鼠小僧の目には猫の尾に見えた事であらう。長い紐の一端を我手に握つて、捕物の場合、十手を賊の足へ打付けたり、拷問の場合に使用したり、十手捕繩を預る身分といふ事は、町内の覇權を握る事であつたらしい。帶刀を許されない町人社會に在つては、十手は最上の武器であつた。

鉢割といふのは、精鐵で作り、刀形に扁平にしたもので、反りがあるし、その一擊で以て鉢金を割るといふ建て前である。小道具としては、力の籠り、打込みに適した作り作である。そ

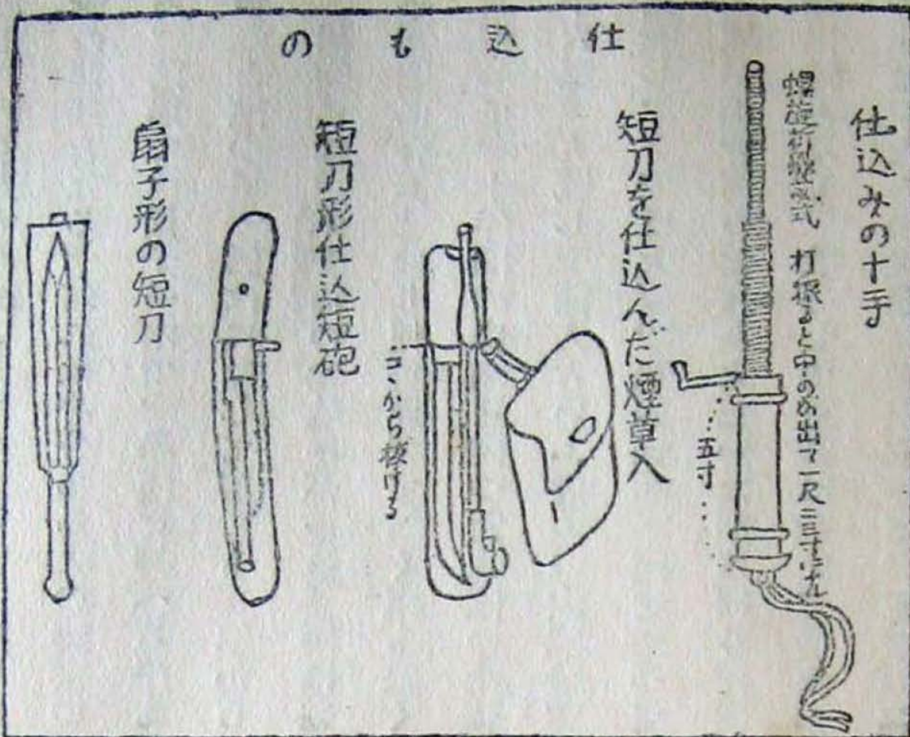
れに錣迄附いたのがある。腰に差せる。十手の形が卑俗に見えるが、鉢割は武士の携帯品としても、見劣りがしない。

次に痿しといふのは、鐵の短い棒で、手元に紐を附けてある。之は、無手よりはよからうといふ處で、念の爲に持つて行かうといふ位の處、一番お手輕な十手である。

近年發明された十手には面白いものがある。主として警察用としてゐる、疊めば五寸、繰出せば其の三倍の一尺五寸になる。長さ五寸に直徑七分位の鉄力の圓筒の中に五寸の螺旋條を仕込み、其中に更らに五寸の一段細い螺旋條を仕込み、之を懷中から出すと同時にぱつと打つて行くと、繰出しのばねが二重に出て、敵を打つ。ばねであるから傷を付けない。滅多に腦震盪も起さない。主として敵の手を打つて萎えさせるのである。遠慮會釋なしに、全力で打込んで宜しいといふのである。直ぐ疊むと五寸の丸棒となつて、邪魔にもならない。仕込もの圖中の最初のものがそれである。

仕込みもの

仕込みものは婦人ものが多い、斧が仕込みになつて居たり、——こんな小さい仕込みでは、



何んの役にも立つまいと思ふは勘違ひで、人間の身體は弱いもの、顔へ裁縫針が一本刺さつたら倒れるだらう。況んや三寸位の小刀で、必死の場合ぐさりとやられたら、たとへ婦人の力でも、不意を討たれた大の男が致命傷にならない迄も、兎に角急所の痛手に一度は倒れる事であらう。戦場の甲冑試合なら、幅廣の肉の厚い鎧通しなどいふ短刀でなくては役に立つまいが、平服の敵へなら、斧の仕込でも十分だらう。

それから、婦人持の扇子の仕込みがある。至つて繊細な、眞物の扇子と見た處は違はない様に作つて、帯の間へ差して居て應はしいものが

ある。長さ五寸の細い刄でも、ぐつと突いて一抉りしたら、六尺男も、あつ、と魂消る一擊で此世の別れとなる。何れは身分ある人の妻女の差料として、相當小細工を利かしたものを見かける。芝居では扇子一本で、暴漢を抑へる手も能くあるので、況んやそれの仕込みが有効であり、懐劍と違つて、露はに差して居ても、他からそれと氣付かれぬ處が妙である。

男物には、烟管筒の仕込みがある。腰に差して柄を拔くと、仕込みになつて居るのだから、早速間に合ふ。餘り便利過ぎて拔く氣もなく、手が先きに行つて、却つて思はぬ巡査殺しを二人迄して、十年間の處刑を食つた大阪の土佐奴、――土井久吉などいふのがある。之は前科三十六犯、人殺し十餘人といふ近來の大賊で、今も八十一歳で頑強に生きて居り、刑期を卒へて出獄し、今では大阪で免囚保護事業をやつてゐる。

彼が烟管筒の仕込みを拔いた話は斯うだ。今から二十年も前の事、終身刑が大赦や減刑で滿期出獄となり、改心して正業に就いて居たが、或る晩の事、微醉機嫌で心齋橋にかゝると、橋の上は只ならぬ光景。殺氣立つて、正服の巡査が右往左往、群衆の間を掻き廻はして、何か探ねて居る樣子。土井久吉、ふと氣が付くと、一人の若造が今網にかゝらうとして、絕體絕命の

場。それが日頃見知りの小僧で、掏摸を働らく相當名を知られた腕利き。そこへ來掛つた久吉を見詰めて、憐みを乞ひ救ひを求むる目附きに燒えて居る。久吉も可愛想になつて見殺しも出來ず、儘よと小刻みの速歩に橋の上へよろ〳〵と進むや、今、其の若造を捕へやうとする正服巡査の腕へ、危なかしく「御免よ！」ともたれ掛つた。

「こらつ、何を……貴樣！」と、巡査が、思はぬ邪魔をされて大喝する暇に、若造は飛鳥の如く人混みの中へ逃げ入つた。「之はとんだ粗相で濟みません！」と久吉は目をとろんとして謝罪つたのであるが、捕へかけた鳥を逃がした巡査は怒氣滿面、久吉を鐵拳で撲ぐらうとする。久吉、多年老功の早業で、燕の如く躱はす。橋の上で、巡査と組打ちになつた。それと見るや他の巡服や和服連が、久吉を眞犯人と見て一齊に走り寄る。久吉は事大袈裟になつて些か困つた。どうにか此場を逃げやうと一歩退ると、巡査は一齊に追つとり込めて、氣の速いのが、「捕つた！」と叫んで突つかゝつて來る。久吉は、「違ふ〳〵！」と絶叫して其手を逃れたが、「逃がすな！」と前後左右一時に襲ふて來る。

捉まつては面倒と、久吉は焦せる。巡査は四方から迫る、其刹那「何をする！」と大喝した久

吉の手が、我知らず、左の腰に差した烟管筒の柄へかゝつて、抜くともなし白刄一閃、潜つて横ざまに刺したが、一人の巡査の脾腹を貫き、返す刄に後から來た巡査の臍の邊を深く抉つた。あつとばかり兩巡査は虚空をつかんで、よろ〳〵と横倒しになる。鮮血が走つて四邊が唐紅。出合頭の一瞬の出來事で、久吉は夢中であつたといふ。一時間經つて兩巡査は死亡した。それで折角正業に就いて居たのが、又十年喰つたといふ。ピストルを有つて居る者が自殺したくなつたり、仕込みを有つて居る者は、抜くともなく抜いて了ふ。但し烟管筒の仕込みは、極めて便利な武器である事は確かだ。

投げ物と鐵扇

「戸田流遠當ての法」といふのがある。「遠當ては、所謂眼潰しなり、水捕りの具ともいふ」と説明してある。之は眼潰しを投げつけるのである。其製法は、石灰のあく水の中に蕃辛細、松脂細、斑猫を入れ、瓶などに貯へ置き、河豚の皮にて造れる水胞（夏季小児の弄ぶ河豚製、俚言、﨟丸潰）しに入れ、之を袂に入れ置き、捕押への時、相手の面部に投げ注げば、忽ち眼

を閉ぢて開く能はずとしてある。當節夜店でゴム水胞を紙で釣る、あのおもちやと見れば間違ひない。但し之は水を用ゐるので、毒瓦斯とか粉未の方が一層便利であらう。例の催涙ピストルなども、水液を射注するものである。紙包みの灰を投げるなど、或る距離を隔てゝ眼つぶしを喫れる法は、昔からいろ〳〵と考案された。卵の殼に灰を詰めて眼潰しにした話もある。

もつと工夫を凝した方法には、扇の中に眼潰しや毒物を包んで、之を敵の顔へ投げ付けるといふのがある。又は細末にした毒物を、擦れ違ひざま、風上から敵に向つてぱつと投げ、それを扇で煽いでやるといふ方法もあつた。之を霞扇と言つた。當節毒瓦斯を使ふと同じ工夫である。

五條の橋で、大の男の辨慶が、被衣を引つかけた若衆姿の牛若を認めて、

「若けいの、待ちねい」

と來る。

「何か用か」

と、人を喰つた大風な物言ひ、

「小倅、生意氣言ふな」
「言つたがどうした」
「何にを！　小僧、其刀を置いて行け」
「ホウ欲しくば取つて見よ。」
「手前の其の背負つて居るのは何んだ、大きな大工道具のやうだが、夜業に橋の修繕でもするつもりか」
「ほざいたりな小倅奴、貴樣の首を修繕して遣はす」
大薙刀を蓆の樣に捲くし立てゝ來るのを、牛若は手にした扇をパッと投げ付ける、それが開いて白い粉が霞と散つて辨慶の顏に中ると、ハクション、眼がピリ〳〵して向ふが見えない。薙刀を無茶苦茶に振り廻はしたが、若造の姿は見えず、橫の欄杆の上から朗かな聲がして、
「木偶の坊、顏を洗つて出直すがよからう、午蒡の根の樣に手前の首などは、鷹が黃金の太刀で修繕するは些と勿體ないぞ、去れ！」
「何を此の俺れに毒つぶてを吳れたな、……あ、眼が開かれぬ、息が詰まる。」

「不覺な奴ぢや、鞍馬天狗のつぶてを食つてくいしやみをするやうでは、まだ若いぞ。オー、此方だ、そつちだ、……それ、手の鳴る方へ、危ぶない。欄杆へ切り付けたら大事の長物が折れやうぞ。」

「何を小癪な、己れやれ、人を盲目にして息を塞げるとは、……」

「はゝ大たわけ。七つ道具を背負つて戰が出來るか、我を誰れと思ふ。驕る平家を西海の藻屑となさんため、近頃、鞍馬山を降つた源氏の御曹子、牛若なるぞ。下郎、疾く鉢卷を解いて降參せ!」

「ハ、、扨ては尊公には源氏のお曹子よな、……」

と、辨慶七つ道具をかなぐり棄て大薙刀を後へ投げて平伏するといふ。牛若の、遠當てに辨慶戰闘力を失つて、あやまるといふ寸法。

扇といふのは、さまぐに利用されたもので、那須與市の扇の的、熊谷直實は扇を擧げて、遙かに海中の敦盛を呼び戻す。大將は戰陣に、床几に腰かけて鐵扇を振る。謙信の麾下の謀將、直江山城守が、諸大名列座の席で珍しい錢を廻して見せたのを扇子で受けた。

「貴公之は御丁寧な事で」

と、隣席の挨拶に對して、

「いや、錢といふ物は、乞食の手にも渡る、きたないもので御ざる。拙者手を觸るゝ事は嫌ひで御ざる」

とやつた見識に、一座をあつと言はせたとやら。昔から、武藝者、武者修業者に鐵扇は附き物であつた。鐵扇で白刄を叩き落す位の業がなくては、一人前でないとしたものである。明治三十年頃迄は、淺草邊で頑固扇と名けた木扇を賣つて居た。之は上野彰義隊で名を取つた榊原健吉の作つたものと言はれた。講釋の方では、榊原健吉が彰義隊の戰爭で、勤王方を八十何人斬つたと讀んで居るが、其實一人も斬つて居ないといふのが本當らしい。但し創意の頑固扇が一本あつたら、榊原は、二十人や三十人は叩き伏せる腕を有つて居たらう。親骨丈けを精鐵にして上品作りの鐵扇などには、普通の扇としか見えないのがある。一寸腰に差して、相當に役立つたものであらう。尙ほ投げ物には石投器がある。かの、ダビデが、ゴリアテを石投げ器で討取つたとあるが、我國にも飄石(ふりつんばい)といふものを使用した例がある。軍書などに闘が見えるが、

使用された實例の記錄は餘り見當らない。

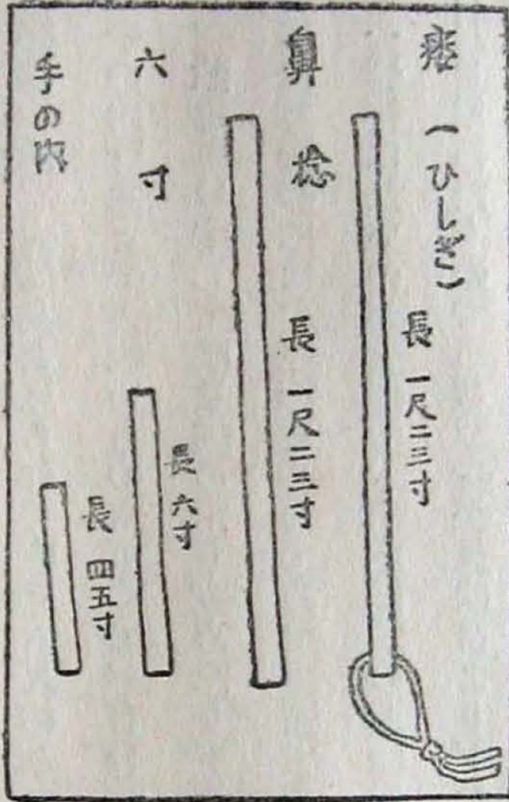
短棒、（鼻捻り、ひしぎ、六寸、手の內）

棒は普通、大道具と見られ、直ぐ六尺棒といふのが持ち出される。併し、「鼻捻り」「六寸」「手の內」などいふ短いものもあつて、有合せ物を利用する點からいふと、手取早く便利であり、敵を傷けずして喉を絞めたり責めたりするに好適である。今日の樣に血が一滴出たら大騷ぎになる時勢には、短棒を心得てゐて重寶であらう。

一體棒は長いのが普通で、山本勘助の兵法奧義書などには、長さ八尺としてあるが、普通は六尺を用ゐたものである。身長又は目より下の寸法を各自の體格に合せた棒が宜しいとした流義もある。神道無念流などでは、杖と言つて、四尺二寸が定用としてある。兩手を擴げて手の內に納むるを定寸としたのもある。そこで長棒は六尺、半棒は三尺といふ定寸もある。ステツキは、杖と半棒の中間物といふ處であらう。

近頃は老人達の間に、ステツキ術といふのが練習されて居る。昔の帶刀は今のステツキであ

るから、天下太平の時代、紳士に護物は無用と言つても、どうせステッキを持つ位なら、ステッキ術も考案されて然るべく、何よりも、芋殼(いもがら)の様な飾物では護身の用にはならない。用心深い人のステッキは、犬殺し式の太物も殺風景ながら、要件は體裁のよい事、折れぬ事、狂犬や、亂心者や人違ひの不意討を防げる事などに屬する。細くて輕くて折れない物が宜しいのである。



都會地では成る丈け短い方が宜しい。小武器としてのステッキは、有功なものである。嘗つてステッキ一本で、土地の憎まれ者の暴行者を三四十回も撲つて殺した例がある。普通常用のステッキであつたといふのが有利條件で、三年間の執行猶豫になつたといふ。昔ならば、惡漢を斬つたので、斬り得といふ處だ。ステッキも武術家の目から見ると大したものだ。

手頃の小武具としては、「捻鼻り」、「ひしぎ」、「六寸」、「手の內」と段々短かいものになる。

鼻捻りは、大抵木製で、長さ一尺四五寸、徑一寸位の太さである。製圖用の丸定木といふ處で

あらう。之は坐右に置き、又窓の下、襖の處など、目立たぬ處に備へると、何か火急の場合、主人丈けに在處が解つて居るから、直ぐ役に立つのである。人に見付けられても木の丸棒で短いから、別段極りが悪いやうな事もない。護身の意味で結構である。鼠が出た猫が入つたと言つては、能く物尺で叩いて、それを割るのであるが、そんな場合にも此の鼻捻りは能く間に合ふ。中には、青貝散しの漆塗りにした上等なものもあつて、大變おとなしい道具に見える。又、眞物の方では、鐵製で長さ二尺位のものもあつた様だ。

「ひしぎ」は、一尺二三寸の丸棒で、之は、鐵扇と十手の合の子の様な使ひ方をした。六寸は、長さ六寸が定法、手の內は手掌中に入る位の鐵製の棒で、圓又は角の作りがある。何れも握り持つて、急所を打つ突く。六寸の方は、逆に持つて喉を締めたり、手や腕の處を締めつけたり、又は指の間に差し入れて握り、責めつけて敵を參らす事に用ゐる。此の術は、筆でも、鉛筆で小物があれば利用出來るので、道場の擊劍柔道練習ばかりでなく、昔の人は大膽小心兼ねて、も、ペン軸でも、文鎭でも、四五寸のこんな細かい處迄氣が付いて、自身獨りで練習して居たのである。

短刀の使用法

小武器の王は當然短刀なのであるが、短刀の型は無數で、甲冑に屬して使用するものは厚く丈夫に出來て居るし、平時の用心ものは、細く輕いのは自然であらう。能く芝居で懷劍や短刀を逆手に握つて、白刄の間を切り拔けるが、見えを切るには、どうしても逆手でないと凄味が映らない。併し時と場合で、必ずしも逆手と限つたものでない。一人々々で、敵を正面に取つた場合には、誰しも尖先きを突き付ける。當時、刄を下にするのが普通であるが、是は考へものだといふ。上から叩き落される虞れがあるし、又其儘上から拳ごと抑へられては、用を爲さない事になる。それで刄は上に向けて、尖先を少し落して構へるのが一番有利である。其儘敵の喉を突いて行つても、反りが下へ向いて居るから、上へ外れる事はない。そして、敵が抑へる事も出來ない。但し拔き打ちに體を潜ませて、大勢の間をくゞり拔けやうといふ場合には、當然逆手に握つて敵の下腹部を刺すといふ事にならう。逆手で正面から、敵の上半身を狙ふといふは、迚も勝手が惡いとしてある。正面の敵へなら、逆手よりは下から刺し突くの構へ業が

早くなる。
西洋の短劍（ダッガー）といふのは、細長く先が尖つて、鑢形に出來、十字形の鍔が附いて居る。懷中用には鍔が邪魔だらうが、腰に手挾むか革で釣るには便利だらう。素人には使ひよいやうに出來て居る。惡漢の出刄を逆手に構へるなどは、芝居形では絕好であるが、どうせ素人同志の喧嘩で、相手は素手と來たら、逆手でも何んでも勝利は出刄にある。海軍將校の短劍、交通巡査の短劍は、西洋ダッガー形で、あれは、素人にも使ひよからう。又普通警官用の佩劍は、細身で輕くて、昔で言つたら女持ち、片手用として、籠手鍔もあり、亂鬪の際には、打つてつけのものである、燕返しの早業位には行きさうだ。
小武器小武具として數へ立てらるべきものは、まだ〳〵澤山にあらう。含み針、鉢金、懷中鏡を手拭で包んでの鉢金代用など、護身用として考案されたものが幾らもありさうだから、他日補ふ事とする。唯だ以上の記述から見て、更に工夫をしたら、日常有り合せの小道具で、護身の役に立つ物が澤山に發見利用される事と思ふ。大工道具でも、裁縫用のコテでも、彫刻刀でも、文鎭籤用の紙切りでも利用すべきものは無數にある。石を投げ付けるといふのが、子供

の時代からの飛道具第一位の利器である。當節の野球狂連中が、手頃の石を三四間の距離で百發百中と來たら大したもので、果實や、鷄卵なども、頗る面白い役目をする事であらう。往年講道館の鬼と言はれた横山作二郎氏、喧嘩上手で知られた男で、つまりは用意周到でもあつた。喧嘩の仲裁に入るに、素手で飛び込む樣な事はない。或時は、體操用の木製啞鈴が有り合せたのを握つて、大勢亂鬪の間を押分けたといふ。

今日現在、有りの儘の擊劍柔道を完全な武術であると思つてはいけない。今日は武術がスポーツ化されて居るので、「プールの水泳」と似たものである。激流や怒濤に出會つたら、今のレコードホルダーも、普通の川師や漁夫の足下へも追付かなからう。武德會の立派な免狀を有つて居ても、づぶの素人にのされるといふのは、どうしたものか。日本精神だの尙武國だの、神州男子だの、と言ひたい人間は、根本からの立て直しが必要である事を考へなくてはなるまい。

人間は、武器を凡て取上げられると、肉彈戰を考へる。手と足で働く。さうして琉球の樣に空手術が工夫された。柔術も徒手空拳で、白刀を携へた敵に當る工夫迄したのである。又武技

を學び得ない婦人には、自と穽やかんざしの類を以て身を獲る工夫もあつた。又殿中とか人中では大武器をもてないから、自然小武器を懐に忍ばせる事になつた。從つて小武器は大きい武器以上に實用された場合がある。支那朝鮮の青龍刀などいふ大武器は、こけおどしで、實用武器は小さいものが多い。大小二本差した德川時代の侍も、一生に一度眞劍で斬り合ひをした人間は、幾人もなからうが、小武器で手柄をしたり、難を免れたりした例は無數であらう。

最後に一言したいのは、今日一番優良な小武器は、一握りのピストルである。併し、ピストルは普通人の手に迚も入らない。國家が之を禁止して居るのである。一般人の武器として推奬する事が出來ない。唯だ敵のピストルに對して、此方はどうしたらよいかといふ重大研究が殘る。其は喧嘩指南の一つとして次項に詳細述べる事とする。

現代喧嘩法指南

生兵法は大疵の基

喧嘩指南といふと不穩な項目であるが、之は亂暴者に出會した時の心得といふ意味である。で、以下賣られた喧嘩に對し、萬止むを得ず之に應じて取挫ぐの術を說かうと思ふ。從つて之を利用するに當つて、强い者同志、又は强弱相對する喧嘩の場に、强者の參考になるべき話では毛頭ない。故に我と思はん腕に覺えの猛者たちは、この一篇を玆まで讀んだら、もう後を續けて讀む必要はない。

さて以上の前おきに依つても明瞭な通り、本篇は弱者が强者に對する場合の秘術である。故に本氣になつて之を活用すれば、相手がたとへ柔道何段、劍道幾段、梯子段何段目と名乘る程の達人でも、ビクともするものではない。こちらがよく見た所、如何に弱々しく貧弱であらう

とも、やせても枯れても生きて動く人間一匹、決して底拔けに弱かるべき筈はない。弱い者は弱いなりに又特殊の武器を與へられてゐる。又實にこの事實こそは一切の武術の生れる原則であつて、武術の必要と効果は玆に在る。

たゞ古來、生兵法は大疵のもとである事だけは常に變らぬ眞理であつて、實地に當り、あらゆる場合の知識と心得とを充分に頭に入れた上で事を行はない限り、とかくに間違ひのもとゝなり易い。なほ餘談ながら、由來、武は戈を止めるの意で、受け手であり、防禦を主とするを以て本體とする。

先づ氣を落付ける

ところで之が一朝喧嘩となると、受け手であるからには勿論吹きかけられた側になる。從つて身に降りかゝる火の子は拂はずには居られないが、しかも出來れば火の子のかゝらぬ所に避けるを以て上乘の策とする。即ち三十六計にぐるに如かずといふのは、決して戯談でなしに戰術の極意である。

從つて旣に刄を合せるのは、戰ひの最上のものではない。喧嘩の最初に當つては、出來る限り機を見て逃げるに越した術はない。雨が降りさうだと見たら、降らぬ先に雨具の用意を忘れないのが策の得たるものであらう。喧嘩も亦之と等しく、最初に身をかはして、吹きかけられても相手にならぬのが第一である。そのためには、たとへ事が突嗟の間に起つても、先づ逃げられるだけは最初にお逃げなさいとお勸めする。

例へば女の方々が、單身暗夜の裏道などで暴漢に遭遇した場合には、よしや前後に人ッ子一人見えなくても、相手を恐れる心持ちだけは決して外形に現さず、平然として之に應接すべきである。

當然おそれる筈の女が、案に相違して落ちつき拂つてゐるのを見れば、相當亂暴な男でさへ、却つて底知れぬ薄氣味惡さに襲はれて、おぢけづくのが常である。

先づ落ちつくと言ふこの一事は、あらゆる武道に共通した第一の秘訣であり、玆から一切の機に應じ變に臨んでの變化、活手段が生れて來る。故にこの際にも先づ落ちついて、環境と相手とを觀察し、出來れば他の人の居る邊まで相手を誘導して來て、脫兎の如くにげてしまふの

が最上の策である。

不意の一擊

然し、さうする餘裕もない程、突如後から羽搔ひ締めに抱きすくめられた場合には、落ちついて奥齒をギリ〳〵嚙み合せる氣持で滿身の力を込め、後頭部を以て相手の顏に猛烈な一擊を喰はせるが良い。敵は必ず鼻血を出すか齒を折るか、いづれにせよ相當の痛手をうけて、抱きついてゐた手を緩めるに相違ない。

若し又、相手が不意に片手をかけて來た場合、卽ちしいなだれかゝるなり、女と油斷して肩などに手をかけた時は、かけられた側の肘を、それとなく充分に引いておいて急に之を力任せに橫に突き出して見る。つまり俗にいふ肘鐵砲一發！　體術の方で言へば之卽ち「電光の當身」の一手、痛烈に敵の脇腹をつくことになる。大がいの相手なら、先づ此の一擊で完全にダア……となる。

不幸、現れ出でた惡漢が大兵肥滿、たとへば拳鬪選手に類する怪物で、容易にのがれられな

いと見てとつたら、いきなり地面にこゞみ込んで、うづくまつてしまふ。そしてさも突然の恐怖から持病のサシコミでも起つたといふ恰好で、場合に依つては齒をかみ鳴らし、ひく〳〵唸り壁など立てて見るのも面白い。

かうすれば、いかに怪物でも、さすがに面喰つて、或は又多少鈍いのになるとこれ幸ひと、急に猫撫で聲になつたりして、ともかく油斷し切つて寄り添ふと共に、一しよにこゞみ込んで近ぢかと顏をすり寄せて來るものである。途端にこちらは滿身の力を込めて、頭なり額なりで相手のツラに猛烈な一撃を喰はせながら、忽ち飛び立つてのがれ去るがいゝ。

或は不幸、一室に監禁せられ、絶對絶命の危機に際會した場合などには、相手の男の肝心な急所を蹴上げるなり、毅然として之を握り潰すといふ手もある。若し又事は瞬間に起つて、之等の妙手を施すに暇なく、接吻を強要せられたりしたら、遺憾ながら汚なさ口惜しさを暫く忍んで、相手の望むがまゝに任せたらしく取りつくろひながら、突如暴漢の舌の先を嚙み切つてやるのも面白い。非常の場合、これしもなほ汚し犯されるよりは良からうではないか。然しまづこゝらが、又思ふに最後の手段でもあらう。

死地に陷つて生きる

ところで今までは男對女の場合、次は男同志一人と一人の喧嘩に移る事とする。こちらも一人相手も一人なら、たとへ其の相手がデンプシーのやうな乃至はバンクロ型の、又は太刀山、出羽ヶ嶽そつくりの力士であらうとも、先づ最初に落ちついて相手の隙を窺ひ、力と力の對抗では所詮勝算はない相手にせよ、イキナリ敵の目の中に指を突き込むか、乃至は目玉を突きつぶすか、鼻ッ柱を打ち折つてやる覺悟で、電光石火の捨て身の一擊を見舞ひさへすれば、大體に於いて先づ勝を得るものと斷言できる。

要するに此の場合も先づ、最初に落ちつき拂つて、敵の急所につけ入るのが最上の策である。もし相手がこちらを甘く見て、不用意にも眼鏡をかけた儘で迫つて來たりすれば、傷つけてやるまでもなく、先づその眼鏡を拂ひ落したゞけでもう充分に、逃走の隙を得る事が出來るものである。また非力のものが强力な敵に向つた時、たとへ一旦無念にも壓し伏せられたとしても、なほ且つ相手の肉を喰ひ、千切る位の意氣込みで狂犬のやうに滿身の力を込めて咬みつけば、

十中八九敵は悲鳴を上げて手を弛め、充分に虎口を脫して逃げ去る位の餘裕は得られるものである。

多數の暴漢に襲はれた場合

多勢の暴漢壯士等に襲はれ檻禁せられた場合には、逆上の餘り發狂した如くよそほつて、自ら着衣を引き裂き、手に當る器物を破壞し、唄ひ叫び泣き笑つて、充分に狂態を演出しさへすれば、多くはさすがに呆れ果てゝ暴行を加へ得るものではない。之を實演する自信がない人々は、心痛の極、急に病を發した形をよそほひ、打ち臥したまゝ吻も言はずに苦悶して見せ、何事をも知らぬ顏にすごすのも亦一法である。

强盜その他に押し入られた際には、之にも先づ第一に心を靜めて驚かず恐れず、平然として無抵抗に相手が望むまゝの金錢を奪ふに任せ、愈々彼の夜盜氏が事終つて心をゆるめ、いざ歸らうと立ちかゝる其の瞬間を狙つて、俄然大喝一聲するもよし、又獲物をとつて足拂ひの一手見事に相手をなぎ倒すも妙であらう。とにもかくにも彼が氣を拔いた其の虛に乘じ、突如敵膽

を寒からしめるのを第一の祕訣とする。

相手が兇器を有する場合

相手に依つては兇器を有する場合もある。たとへば先づ刄物を以つて迫つて來たと假定しよう。これにも第一に落ちついて驚かぬ事を絶對必要とする。そして身を退いてこの敵から逃れ去らうとは企てずに、相手に果して人を切らうとする意志があるか、乃至は單なる怖がらせの道具にすぎないかを、先づ以つて見極める必要がある。そして相手に斬る氣のない場合には、刄物の如何にはかゝはらず、すべて前段、兇器のない時の法を利用する。

もし又、眞に相手が殺氣を有すると見てとつたら、彼が斬りかゝらうとする隙を窺つて瞬間にその手許にとび込み、忽ち間近に迫つて兇器を叩き落し、急所に一撃を加へ得れば申分ない。

いづれにしても之等の刄を持つ敵に向つた場合、これから逃れやうと企てる事は最も拙劣な下策である。神影流の歌にも、

「打ちおろす大刀の下こそ地獄なれ、踏み込みてこそ浮ぶ瀬もあれ」

と言ひ傳へられてゐる。

敵手が拳銃を持つ場合

敵手が拳銃を持つ場合、これを二つに考へよう。その一つは間に相當の距離があり、ねらひ定めて火蓋を切らうと付け狙はれてゐたとする。

實は最近のピストルのやうに彈丸の型の小さい場合には、たとへば一發や二發、からだの中にそれが飛び込んだ所で、よく〳〵運が惡く當り所の面倒の時のほか、メッタに一命にかゝはる程の心配はない。むしろ意氣地のない人間が、ヤラレタ！といふ自己暗示に依つて絕命する位のものである。だが然し彈丸などには當らない方が、確かに有難いには違ひない。

所で相當の距離さへあれば、足を殊更に千鳥に運び、からだを前後左右に不規則に搖り動かして、ピストルの的を常に動搖させながら近づき、一躍その手もとに飛び込むか、乃至は數步の距離をおいて睨み合つてゐるうちに、敵が曳金を引かうする瞬間、突如デングリ返しを打つて先方の足もとを襲ひ、之を倒すと共に急所に一擊を喰はせるも良い。

第二は冷たいピストルの銃口が間近に突きつけられ、甚しきに至つてはそれがからだの一部に接して差しつけられてゐる時、敵は必ず我が目に注意を集中してゐるものである。かういふ狀態に置かれると、素人は兎角銃口や曳金の部分、或は敵の目付きに注意を奪はれ易いけれど、之等には斷じて氣をとられてはならない。勿論この時も亦平然として、敵の背後に我が視線を置き、さながら曲者の後方より、我が應援者の近づき迫りつゝあるが如き氣配をよそふ必要がある。その上なほ出來得るならば、この假想の味方に微笑を送り、目くばせを交して、敵を挾擊する勢ひを示すが良い。

この場合、曲者は必ず之に注意を奪はれ、その背後に不安を感じて、思はずふりかへつて後ろに目をやるか、乃至はチラと傍見をする筈のものである。この相手の視線の變つた隙に乘じ、ピシリ相手のピストルを横に叩き落すか、乃至は片手をもつてピストルを横に押し外づすと共に、一方の手を伸して組みつくか、目又は鼻に猛烈な突きの一手を加へるが良い。

其の他喧嘩に際しての足場、器物の撰びかた、照明その他光線のとりかた、暗夜、月夜、水中、山中の駈引き、戰法等、數へあげると際限がないけれども、一と先づ茲に打ち切つては置

くが、筆者は單に誌上指南に止まらず、望みの向きには實地指南の勞をも惜むものでない事を、特に玆に改めて明言して置かう。

仁義仲間の種々相

俠客仲間の仁義

我が日の本は仁義の國。俠客にも博徒にも香具師にも、土方、馬方、船方、何れの社會にも仲間に對して仁義を立てるならはしがある。其中にも俠客は最も義を重んじ、節を尙ぶ精神が旺盛である。

處が、此の仁義といふ事が一轉して、初對面の挨拶口上を述べる事の意味にも取られる。此の口上といふのは、普通の人の口上とは異り、一定の型があつて、なか〳〵やかましいものとしてある。先づ俠客の仁義口上の作法から述べる。

今一人の俠客の子分が、旅をかけて江戸の俠客の家を訪ねる場合を見ると、彼は先づ自分の肩にした振分け荷を其家の戸構への外へ卸ろす。決して荷を持つた儘玄關へ入つてはいけない。

それから羽織の紐を解いて入口の外へ立つたまゝ、兩手は眞直ぐにして膝頭へ付け、
「お願ひ仕ります」
と始めて聲をかける。其處へ其家の若い者が出て來て、旅人の樣子を見てから、
「お入りなすつて下され」
と挨拶する。
「御免蒙ります」
と言つて旅人は先づ玄關を左足から入る。此際、人殺しなど兇狀持ちの者は右足から入る定めで、之は大事な事である。普通左足から入る者は、修業に歩く者と認められる。
扨て、土間に入つての仁義、
「お願ひ仕ります。當所貸元さんの佃さんお宅はこちらさんでごんすか」
「手前でござんす」
「しがない者、旅中でござんすが、お願ひ仕ります」
「お入り下さい」

「御免下さい」
と言つて、それから、外へ置いた荷物を持つて入る。此際羽織の紐を兩手に持つて挨拶するといふは譯のある事で、何處の何者とも知れぬ旅人故、其れが敵の廻し者であらうも知れず、そんな疑ひを受けない爲である。若し懐手でもして居ると匕首でも振つて、近よりざま刺しかゝるといふ危險があるから、全然敵意の無い證據に、手の置き處を羽織紐と一所に膝頭へ置くのである。長い間の習慣上、そんな作法が出來上つたものであらう。

扨て、荷物を取つて、敷臺へ近づき、

「親分さん、お姐いさんは、お宅でございませうか」

「夫婦共に不在で御ざんす」

此の問答も一つの定まつた作法で、親分夫婦に敬意を表して曰ふのであるが、之に對して、夫婦共不在と答へるのは、强つて面會する要もない事故、居つても居らんといふのが普通である。

旅人の方では、更らに、敬意を表して、

「外、上さん、お宅でございますなれば、お引合せを願ひます」

である。
といふ。之は、取次ぎに出て居る者の上に立つ兄分の者が居るなら、其人へ宜しくといふ意味
「折悪しく不在で御ざんす」
手前以外の者にあいさつは要らぬといふ意味。
「早速お願ひ仕ります」と旅人の方では、立つて兩手を膝頭にあてて「手前はしがない者、旅中でございますからお控へ下さい」
「どう仕りまして、手前共、しがない者で御ざんす、お控へ下さい」
「お控へ下さいますのが本意で御ざいます。」
「お言葉に從ひ控へ居ります。正座は失禮でございます」
「早速お控へで、有難うございます。初のお目通りでございます。從つて下劣は、上州は國定忠治親分の家の若者某とはつする者にございます。御覽の通り未熟者の旅中でございます。」
然う言つて、包んだみやげの手拭を差出して、
「上さんへ、早速で御ざいます。御覽の通りな粗末なもの。勝手元のお手拭きにもと存じまし

て」

「早速の御好意頂戴仕ります」

と受けて自分の左へ置く。それから茶が出る。氣を利かして、

「お樂になさいませ」

といふ。茶は、三口に呑み、三分殘して土間へあける。

旅人は其際にも羽織紐を指へ挾んで居る。之は着る貫祿のない人間であるといふ謙遜と、手を自由に使へない處を見せる。しがない者の旅中と自分を卑下する意味である。そしてから、

「結構なお茶頂戴致しました」

と向うへ二三寸返して、

「早速御馳走になりましてお禮申上げます」

といふ。すると、今度は受ける方で帖面を出して、

「御姓名を一つお記しを願ひます」

と促す。

「粗筆でございますが」

と手に帖面を持つて書く。上州何某親分方の某と書いたのを伏せて渡して、

「どうぞ御判じ讀みを願ひます」

此時、帖面を見て、普通二十錢包んで路用を助けるといふ事にする。親分の名に依り又五十錢、一圓と出す事もある。受ける方では三度迄遠慮して、

「結構なものを、……かやうの御心配を頂きましては」

「御遠慮には及びません。こちら宅夫婦共不在で御ざいます。御辭退なくお納め下さいませ」

「御上樣の御好意で、懷中致します」

然う言つて、錢を懷へ入れる。

「どちらの方へお出になります」

「新橋へ參ります」

「新橋に長谷川といふ親分さんが居ります」

そこへ道順の案內をしてやる。

「お暇致します」と立つて手を下げ、「早速お目通り、御手厚き御配慮おみやげ迄頂戴致しまして有難うございます。再應お目にかゝる時も御ざいませうから」

之れで仁義も終り、路用を貰つて立別れて行くのである。

罪人を隱匿する場合

以上は玄關先きでの仁義であるが、若し晩遲く行つたものとか、又は喧嘩とか人殺しとかして、其家に隱匿（かくま）つて貰はうといふ場合には、又仁義挨拶も自然異る。若者の方ではそれと察して好意を述べる。

「暗い事で御ざんすから、草鞋を取つたらようござんせう」

といふのは、夜になつたから泊つて行けといふ意味である。

それで家へ上つて泊つた時には、お膳が出て、飯はてんこ盛り二杯と定まつて居る。例の『居候三杯目にはそつと出す』などは、此の二杯の規則を破るのであるから、內證でそつと出すのである。ていてんこ盛り二杯で、お膳に附いたものはきれいに皆な食ふのである。殘しては粗末に

なるからである。

兇状持ちの場合だと、例の右足から入るので、最初から解つて居るから、之は罪人隱匿で、二階へ寢かす。着物は着たまゝで足袋も穿いて居る、三ツこはぜの中二ツ丈けはこはぜをかけて居る。直ぐに立上り逃げる用意である。異變があると、下から「エヘン」と咳拂ひの合圖をする。上では直ぐ之に應じて「エヘン」と受ける。若し受ける事を忘れる程に眠つて居ると、水をかけられる。又は不用意を叱られて、木劍で擲られると言つた嚴しいものである。

泊つた者は、一宿一飯の義務として、其家に出入り――他の親分との間の喧嘩などがあつたら、一命を失ふ危險があつても加勢に出なくてはならぬ。泊つて居る間は、客分ながらも其の配下と同じ事である。

それから、此の喧嘩が仲裁が入つて仲直りの場合となると、又嚴めしい儀式を行ふ。仲直りの場所は、四方席にして上下なしの坐を設ける。そして神前で手打をするので、普通に三社樣、即ち三神を祭る。近年になつてからは、天照皇大神宮、春日大明神、明治神宮とした。以前には橿原神宮、八幡大神宮などもあつた。

神は千日しめを張ると雖も、邪慳の家に來らずと言つたもので、室内を淸め、正直な心で仲直りをするといふ事にした。三寶の上へ、生きた鯛を腹合せに、向ひ鯛にして神前に供へ、御神酒德利を添へる。三々九度の手拍ちで圓く收める。最後に「ちよちよん」と拍つから、つまり十回になる。

香具師の元祖は神農様

次に仁義仲間としても最も廣く知られ、今日に續いた者は「やし」である。「やし」の事を「香具師」「矢士」「野士」などゝ書く、其の守本尊は神農様である。神農は支那の「炎帝神農氏」として十八史略に出て來るので、人身牛首としてあるが、之は牛に似た顔で、兩角を生して居たと言ふ。神農は人民に農業耕作の方法を敎へ、又百草を嘗めて始めて醫藥を發明し、更に日中市を爲し、交易して退かしむとあり、之は市場を開き物々交換の法を敎へたのである。「やし」は藥師の略稱であるとも言はれ、又神農の發明した耜、臺、小鉞(まさかり)などが十一二種もあつて、それが香具と稱せられ、神農は香具師の元祖であると見られて居る。此の香具師が今日の露店

商人と迄發達したので、彼等は自分の家業を神農業と呼び、神農樣を神壇に飾り、神酒を供へ、親分子分の盃事は此の神農の壇前で行ふのである。

それで一般露店商人、即ち大道商人の事を香具師と呼び、之を「やし」と讀ませる。其の「やし」が前記の如く「藥師」「野士」などとも書かれる理由は如何といふに、藥師は神農の本領で、從來我國の醫者仲間が、藥師樣を祭るのは、醫藥の元祖たる神農樣を祭るのである。

西洋では、ヒツポクラテスが醫道の元祖であると同じ事である。ヒツポクラテスは、西洋紀元前に生れた希臘人で、ピタゴラス派の哲學者として一代の碩儒、「未だ天を知らずんば焉んぞ能く人を知らんや」と喝破して、先づ天地自然の大法を講究し、それから轉じて人體の研究に入り、醫法を發明したのである。彼は西洋の神農樣である。其學說は北海道大學敎授、今裕博士の浩瀚な著述に依つて可なり詳細に我國に紹介され、前陸軍々醫總監、石黑忠悳翁などは此の書の著に讃辭を呈して其の勞を謝して居る。之は主として、陰陽自然の大法から人體の生理を論じたもので、今日に殘された問題が澤山に此書中に含まれて居る。そして二千餘年を經た今日迄、夫等の重大問題は殆んど解決されて居ない。それといふのは、ヒツポクラテスより二

三百年後に現はれた醫道の大家が藥物治療を主とし、生理病源の根本研究を次ぎにした爲に、今日の西洋醫は其の流れを汲み藥物學が發達して、生理學が發達しなかつた爲であると言はれる。今や日本文明の復興時代となり、頻りに皇漢醫學が提唱せらるゝ氣運に在り、和漢洋を綜合した眞の醫道が、我々日本人に依つて大成せらるゝ時期が到來したものであらう。即ち草根木皮の神農醫術が大成せらるゝのである。神農の醫道を語つた序でに、西洋の神農たるヒッポクラテスの名著ある事を紹介して以て、世人が之を一通讀してそこに稽古徴今、大いに發明する處あらん事を希望する次第である。

香具師の名稱の起源

扨て最初我國に起つた「やし」は大道商人として、或は戸別に觸れ賣りなどもした。其の賣品は製藥と香具であつた。越中富山の藥賣りなどは其の傳統に屬したものである。又我國の中世暗黒時代と言はるゝ鎌倉時代、足利時代には、知識の本場は各地の寺院であつて、此の寺院が多く藥を賣つたのである。商僧と言つて高野山の僧自身が廣く天下に行商した。それが主と

して藥種や香などであつた。又東大寺、西大寺などでも家傳の妙藥といふものがあつて、それが天下に賣廣められたのである。

そして「やし」は藥師の詰まつた名稱であると言ふ事になる。又彼等は同時に細々しい諸道具を賣つたからそれが家具師であり、主として藥種と似よりの香の道具を持歩いたから香具師となり、それが、重寶がられる處から、段々に藥よりは雜品が多くなり、香具師となり、それを矢張り「やし」と讀ませる事となつた。尙「野士」と「矢士」の說明が殘るのであるが、「野士」は「野武士」の轉訛、矢士は弓矢を立て道具にして藥や香具を賣り歩いたから起つた名稱であるといふ。卽ち我國には、戰國の間に、其主家が滅んで浪々の身となつたものが、何等の定業もなく、所謂野武士と稱して山賊風の者となり、正しい方へ進んだ者は、行商又は露店商人となつた。卽ち香具師なのである。其の野武士を「野士」と讀んだ。又彼等は武士の表道具たる弓矢を看板に持ち出して、松井源水の獨樂(こま)廻しの如く、永井兵助の居合拔の如く行客の目を惹き、それに依つて本商賣の藥品を賣るといふ寸法にしたもので、之は文字通りの矢士なのである。

香具師仲間の仁義口上

香具師の仁義――仁義とは彼等仲間では、挨拶口上の意味に使はれて居るが、前にも述べた通り、本來は堅い交際の間に仁義の精神を主として、團結を强固にする意味から來たものである。併し、仁義を述べるといふ風に使ふので、初對面の口上をいふのである。こんな口上挨拶は、俠客仲間でも、香具師仲間でも、土方、馬方何れにあつても、人情と義理が同じであるから、其の文句も略ぼ同じものである。唯だ簡粗の差と、丁寧と荒つぽいとの別があり、時と場合で多少づゝ異ふのである。俠客に比して香具師の方は大分粗雜な物言ひをする、又は、浮はついた洒落（しやれ）言葉も交るのである。

一寸言ひ返すが、一般には香具師の事をテキ屋といふ。之は何から來たか。其の初め、「やし」の事を「や的」ともじつた。忠助を忠公とか忠的とかいふ、あの通用稱呼である。あの「や的」がと言つて居る中に、今度は、逆に物の名を呼ぶ習慣から「やてき」が「的や」になつて了つた。之が今日片假名で書く「テキヤ」の起原で、あの香具師的といふ處を「テキヤ」がと

洒落れて呼ぶ事になつたといふ。之は頗る當を得て居るやうに思はれる。

此のテキヤと言はるゝ香具師なるものは、全然、官憲の制裁外に置かれたかに見ゆるが、實は然うでない。ちやんとした掟があつた。それは、德川幕府の享保二十年に、町奉行大岡越前守が制定したもので、五ケ條に規定され、公儀の法度條文は堅く守り、物の賣買も堅實に致す事とか、武家に對して慮外な事をしてはいけない。他所から來て押賣りをする者は早速國元へ追ひ返す。香具師仲間は商賣の場所では、互に相援け、連れ立つて歸る事。仲間が病氣の際は見舞をなし、病人を介抱する事。香具師の親分は、子分から願證文を取り、行衞出所不定の者は仲間に取つてはならぬ事などである。

それで、外國から藥屋などの密輸入する者を防ぐ爲め、又、不逞の者を取押へる爲に、町奉行は、香具師の親分に十手捕繩を與へたといふ事である。斯ういふ關係から香具師は、一種の探偵を兼ねた時代もある。そこで同じ香具師の姿をして居ても本物か、又は僞物であるかを見究める爲に仁義口上に依つて之を試みる必要も起つた。それで彼等の間の仁義は大變やかましいものになり、之を自在に言ひ得るやうでなければ、いもぐりとして制裁を加へられる。其爲に

彼等の間の初對面の挨拶は可なり嚴格なものになり、自分達より上手の俠客仲間の仁義を見習つて、相當威張つた口上を取替はしたものである。

仁義口上は晴れの舞臺

何處ぞで未知の香具師同士が出會はしたとする。互に、相手が仲間らしいと見ると、氣の早い方から先づ口を切る。

「之はお初に御ざんすが、間違ひやしたら御免なせい。お友達さんと見受けやしたが、……」

と、相手の面をじつと見る。

「さやうにござんす。お控へ下さい」

と相手は、自分が香具師仲間である事を承認して、自分の方から先づ謙遜つて、挨拶を述べるから、控へて呉れといふのである。すると此方も謙遜して、

「先づお控へ下さい」

と向うへ花を持たせる。

「いやお控へ下さい」

と又譲る。二三回押返しつゝ相手が上位を取つて控へる事となる。すると、此方は本文の挨拶に移る。

「早速お控へ下すつて有難うござんす。揚げます言葉前後致しましたら御免下さい。手前生國は東京にござんす。東京と申しても廣うござんす、下谷は上野東叡山、五重塔がござんす。其下に坂下町は二丁目二番地、稼業親分は藤政一家中野方と申しやす。手前姓名を揚げますは矢體さんに御ざんすが、いがみの權太と申しやす。稼業は未熟のかけ出し者にござんす。いづ方に参りましても、土地の親分さん、又お友達さんに御面倒をおかけ申しやす。何卒面體お見知りの上、今日後萬般御昵懇に願ひやす」

丁寧に頭を下げる。此際、羽織の紐を解き、兩手は膝頭に付けて左右程能く搆へる。相手が相當な親分と見て一層丁寧にする場合には、先づ下駄を脱いで鼻緒の上から下駄へ乗るといふので、之は俠客と異つて草鞋は穿かず、大抵下駄穿きだからである。それから此の羽織紐を解くのは、商人の作法の一つと見られたものである。商家では、古から小僧雇人には羽織を着せ

ない習慣で、成長して一人前の番頭格になつた時始めて羽織を與へられるのである。それで此の香具師の仁義の際に、自分は未だ羽織を着る様な身でない、ほんの駈け出しであると謙遜し、羽織を脱ぐつもりで、紐を外して挨拶するのであるといふ。

も一つには、前の俠客の仁義の場合と同じく、相手に對して敵意のないといふ表明をした形である。懐手といふのは得て物凄いものであるから、兩手は眞直ぐに膝頭へ付ける。處が之を反對に解釋していざといふ場合、羽織が、邪魔だから、直ぐぱつと脱いで敵に突撃する用意だといふ説もある。之れも一理あり、兩様に取つても差支ない。但し「お控へ下さいまし」といふのは、相手を控へさせて自分から先きに名乘る、即ち先方を立てた作法である。斯うして二三度讓り合つた上、相手が自分より下位のものといふ見當が付くと、「それではお言葉に甘えまして、逆位かは存じませぬが控へさせて頂きます」と挨拶するのである。若し順を間違つたとなると、後で具合が惡い事になる。

扨て一方が右の通り仁義を述べ終ると、今迄控へて居た相手方は、同じやうな作法で以て返禮をする。

「申しおくれやして失禮さんで御ざんす、手前生國と申すは、南海道は紀伊國、長濱の海は廣うござんす……」

と言つた工合、同じやうな受け應へをして最後に、

「宜しくお願ひ申しやす」

と結ぶ。

「手前こそ宜しくお願ひ申しやす」

と受ける。

此の作法が立派に出來ないと、相手から馬鹿にされる。平生から能く稽古してよどみなくしやべるのである。勿論、香具師稼業でもしようといふ者に辯舌の達者ならぬはなし、口八丁手八丁で持つた商賣。大道で人を釣るには、身振り格好から、目の配り方から、口を開いたら風を嘲り月を弄するの快辯と來なくてはならぬので、しやべる間は誰れにも負けないといふ自信を持つて居り、仁義口上が其の最も得意とする處、晴れの舞臺を勤めると言つたものである。俠客仲間の重々しい仁義に比べて、此の方はずつと碎けて氣輕く爽かなものである。

昔の源平合戰などで、「我こそは武藏國の住人、熊谷次郎直實なるぞ……」と名乘つたあたり、同じ心意氣であらう。何れの社會でも、名乘りを揚げて見參と來る處が、日本人の此の上ない譽れとする處で、之が昔の雲助駕籠屋、馬方、土方、何れの社會にも及んで居た。それぞれに仁義らしい仲間の挨拶もあり、又尻を捲くつてごろつく時の言ひ草もあつた。彼等が、旅人を囚へて強請(ゆす)る場合、又武家に盾突いて喧嘩を賣る場合の言ひ草こそは、痛快無類なもので漫罵、嘲弄を極め、自分は日本一のえらい人間であるやうな、誇張した口上が芝居や講談の見世場、聞かせ場となつて居る。要するに此の仁義なるものは、武士の名乘り揚げの眞似から起つたものらしく、それを低級にして、「ござんす」とか「發するものは」とか、「やす」と言葉でやる處が面白いのである。

仲間の不文律

上述の香具師仁義は、一人が一人に向つた時の事で、仲間の大寄合などの時は、又異つた口上を述べる。當節は、人間も文字を知り、智識も豐富で、名刺交換會などといふ輕便な事もやる

が、彼等香具師仲間には無學文盲が多いから、名刺などいふものは持たない。それに、名刺交換は碌に顔を見もせず、袂へ入れて了ふので、どれが誰れやら後では解らない。そこで彼等は大勢居並んだ前で、一人々々仁義を言ひ交はす。それに依つて面體や牲格がはつきりと現はれて相手に記憶されるのである。大勢圓座の場合、順位に廻して仁義を述べるのであるが、彼等仲間の順位は普通と逆に左廻しである。之は隣りの男の懐ろへ、しかと物を入れると言つた氣分である。

こんな時の仁義は、先づ主催者側から口を切る。

「斯様、高座借受けましての仁義は失禮さんに御ざんすが、御免蒙りやす。手前到つて口不調法に御ざんす。上げます言葉に前後間違ひのありました節は、平にお許しを蒙りやす。……」

是れ以下は、前の一人々々の場合と同じである。斯うして一人々々、當節で言へば一分間の自己紹介をやる形である。

香具師仲間は、勿論表面は不正ならぬ稼業を白晝大道で營むものであるが、併し共の多數は、何れかと言へば××の集合で、はたけばごみの出る者が多い。それで洗ひ立てる事は禁物、仲

間同士の喧嘩など、大怪我をしようと、殺されようと、明るみへ持出さず、仲間内で始末を付ける。其代り喧嘩へ仲裁が入ると、一先づ其人へ義理を立てゝ預けるといふ堅い慣例である。それからモ一ツ仲間の規則として特に嚴重なのは、人妻に手を出す事と、場費即ち營業上や持場所の收入を誤魔化す事に對する制裁で、之を犯した者は破門、所拂ひ、輕いのは指詰めと言つて指の先きを切つて詫をするのである。

こんな仁義口上の面白い場面も、普通の人には一寸見られないので、是は映畫に作つてトーキーなり、巧者な活辯諸子の冴えた口調でやつたら、一寸呼びものにならうと思はれる。香具師も、店賣り、大道賣り、又は立賣りなどゝ、賣り方がいろ〳〵あつた。今日でも京都に上立賣、下立賣などいふ町名がある。立賣りをしたとは何んの事か、亂離の間、京の女人貧困の極、立賣りをした。上半身に屬するは、紅、白粉、櫛、笄、油などである、之が上立賣。下立賣りは下駄、雪駄、草履、足袋、脚絆、都巻腰紐と言つたものであるが、夜店の方では、暗い軒下で接吻は×××、それから……×××もあつた――江戸だつて柳原河岸の材木置場の間で、毎夜、女共がいゝもつ焼きを賣つたといふから、買ひ手に事を缺かない限り、上下何んでも賣る

のが昔からの掟であつた事か。

香具師の現はれたのは、奈良朝の頃と言はる。此の時代に支那、朝鮮あたりから奇術師が渡來した。それは呪師（のろんじ）と言はれ、ロに呪文を唱へると、變幻奇怪の術が生ずる。刀を呑んだり、種子を播いて卽座に花を咲かしたり、繩を天上へ投げて、夫れへ攀ぢて天へ登るなどいふのだ。こんなのは皆な大道藝人で、それが又藥だとか、强壯劑だとか、不老不死の廣告などで人を釣る。三國誌に出る左慈といふ男は此方の大家で、支那では其頃から疾くにこんな奇術が發達して居たのである。之は大衆に對する催眠術のやうなものであつたらう。

舊幕時代には、政府に楯突いていざとなつたら武士に反抗した者に俠客仲間があつた。此の俠客氣性から起つた新代の壯士が、政黨を作り政府に反抗して政黨内閣迄漕ぎ付けた。香具師の露店商人が、今日ではデパート迄漕ぎ付けて、金權の主位を占むる迄に成長したと見たらどんなものだらう。泥下駄の儘、眞直ぐに入つて行つて、歩きながら七階迄の飾り品を物色する處は、大道商店の延長と見られぬ事はない。そして七階の食堂といふ、ぎつしり鮨詰めの椅子一つへ喰付いて、十錢の蜜豆から五十錢の洋食を大急ぎに酒氣もなしに詰め込んで、さつさと

立退くあたりは、三昔前の砲兵工廠前の五厘飯の進化位に見たら、今日の大方の淑女諸子の間違ひのないお樂みの一つたる大デパートも、つまりは神樂坂なり、廣小路なり、新宿なりの大道香具師店を一所に綜合したものに外ならないのであらう。

空氣のよい、靑天井の下で、二月の寒風佛骨冷やかなる夜店に、長廣舌を振るつて、路行く紳士の足を停めしむる、香具師道の威風は、正さに堂々たるものでもあらう。

香具師も最初は野武士、藥師から出發したものと言はるゝ丈けに、初對面の名乘りをする習慣を持續したのであらう。そして初期には、義理堅く、所謂仁義を重んずる風があつた事と思ふ。それが、時勢の變遷と共に、種々なる不良不逞の徒が其の領分に雜つて、兎もすれば、不正な方面へ趨り、香具師と言へば、いかもの、いんちき、棒にも箸にもかゝらぬしれものと見らるゝに至つたのである。今日仁義社會で、一般良民の間に割り入つて其の區別を判然と付けかねるものは、多く此の香具師仲間であり、特に昭和五年頃、警視廳が一般露店を許して失業救濟の一端となして以來は、傳統の香具師と良民露店商との區別も付かぬやうになり、露店物に良不良が混在して玉石混交の形である。油斷がならないのである。

生神様脫走記

（一）

人間は神樣にはなれない、天には昇れない。と言つて地の底へも潜れない。つまり人間は天と地との間にある存在だ。神と禽獸との間を往來する生物なのである。併し、人間は誰しも神樣になりたいと望む。だが、一方神樣扱ひにされた人間は、

「もう懲り〳〵だ二度と神樣にはなりたくない」

と、眞夏の炎天に、溫室から出て來た人の樣に、ほつとして汗を拭く事であらう。

私自身が一度神樣にされた經驗から、然う思ふのである。

（二）

抑々私が生神様にされた由來といふのは、明治四十年代の千里眼透視の流行の潮に乘り上げさせられた結果であつた。私が當時流行の透視といふ不思議な現象を考へて、自ら之を練習して、再三適確な其の實驗を世人に知られた事が、遂に私をして生神樣たらしめたのである。

明治四十三年以來、御船千鶴子の透視實驗を初めとし、長尾郁子、眞鍋誠一、本莊鐵次郎、鹽崎孝作、川崎進などといふ透視能力者が續々と現はれたので、やがて福來、今村などといふ博士迄が熱心に眞に實驗研究に從事して、一時は學界を騷がしたものであつた。然るに未だ充分なる成績の擧がらぬ中に、千鶴子の自殺、次で郁子の病死となり、やがて激烈なる反對論も出て、透視能力者といふのは一種の山師であるとなし、其後に出て來る透視者は、直ちに壓迫を加へられて、透視術などといふ話も無くなつて了つた。

だが、私は透視とか千里眼とかいふ事を聞いて、忽ち思ひ當つた事がある。是は人間に誰しも持つて居る、一ツの精神作用であらうと考へたのである。昔から高僧の、智識のと言はれた者がさま〲の豫言をしたり、透視をやつたりした話は澤山あるし、例の神懸りなどと言ふて、神意が人間に憑り移つて、神秘な自問自答をやり、千里眼、透視、豫言などをしたといふ話も

ある。それに例の催眠術といふのがある。そんな事で、私は其頃此の催眠術に凝つて、精神統一とか自己催眠とかいふのに心を潜めて、いろ〳〵と工夫をしてゐた折りの事とて、此の透視術といふ事にいたく心を惹かれ、直ちに之が研究に著手した。

（三）

元來私には、こんな精神作用に關して幼時から一ツの機緣があつた。といふ事は、私は純江戸ツ子として淺草は公園の附近に生れたのであるが、其後或る事情で七八歳の頃五日市に移り、日夕秩父の連峯を見て暮らす身となり、山の神秘にあこがれを持つ事となつた。そして、其頃、五日市邊から秩父の山入りをする行者、山伏などの姿を見ては、母に向つて、然ういふ人達の生活狀態を問ひ、其の山上生活の神秘らしいものを考へて、朝な夕なに、附近の峯々の奥へと心を馳せたのである。

子供の頃から斯ういふ神秘のあこがれを抱いて居た爲に、私は又御祈禱とか、禁厭とかいふ事にも心を惹かれ、何時とはなしに、その方法を習ひ覺え、一種の妄想に驅られて、自身、山

伏にもなり、行者にもなつた氣で、他の子からは半氣狂ひに扱はれた事もある。それが嵩じて、遂に私は三峯の行者生活の中に入つて行つた。そしていろ〳〵彼等の行動を見、之を練修したのである。私は彼等行者の山中生活の狀態を、日夕仔細に見るに至つて、其の餘りに人間離れのした奇蹟的な行動にすつかりおどかされて了つた。

彼等行者連は我々里人の樣に、三度三度米の飯を食ふといふ事をしない。山中に生ずる自然の物を採つて食ふ。飯でなければ食へないなどいふのは新參者で、此の社會では下の下なるものとされてゐる。然して是等新參の米の飯を食ふ連中とても、又却々やかましい掟があつて、勝手に火を焚く事は出來ない。皆な行者の本部へ行つて火種を貰つて來る。つまり行者仲間では、火といふものを神聖視するので、火を作るには天眼鏡で以て日輪の光線を焦點に集め、其れを木に移す。雨天の日には竹と桐の木を摩擦して火を起し、輕い鍛冶屋炭に此火を移して火を作るのである。火を本部に貰ひに行く者は、此の炭火を手掌に受けてぷう〳〵吹きながら一丁二丁と運んで來る。そして飯を炊くにしても、普通鍋釜を用ゐず、專ら自然を利用する。彼等は米を麻布の袋に入れ、溪流へ下りて袋の儘にざぶ〳〵と洗ふ、それから袋の口を縛つて地へ埋

め、上から火を焚く。斯うして火に當りながら話をして居る間に、米は蒸れて軟かい飯になるのである。

功を積んだ行者になると、殆んど米の飯は食はないやうだ。松の甘皮とか、山中に得られるいろ〳〵の木の實とか、特有の食物を攝る。朝鮮金剛山の仙人と言はるゝ者は、松の甘皮などを常食として居ると言はれ、彼等は今に、水と空氣丈けで生きる工夫をするのだと語つたとか。所謂雲を吸ひ霞を呑んで生きる仙人修業なのであらう。私が見た三峯の行者も、そんな修業を或る程度迄試みたのであらう。酒なども、猿の造つたものを見付けて來て飲むのであつた。又行者は一本齒の足駄を穿いて往來するが、あれは山の上り下りに都合がよい。三峯の杉の密林の間を、片方の手に法螺の貝を抱へ、片手と一本齒の足駄穿きの兩足を突ツ張つて木登りさへするのである。

彼等は又生きながらにして遠隔の地と通信をする、天眼通を有つて居るかに見えた。默想して坐つて居るかと思ふと、彼等はつと立上り、指を空に向けて動かして、信號通信のやうな事をする。それで以て、加賀の白山とか羽後の羽黑山とかに話をする。「何日には他から行者が

來る」といふ通信が來たのだといふ。それが適確に當るのである。こんな事は不思議であつて、少年時に之を目擊した私にしては、今に疑問となつて居る。彼等は山路を行く時には、隨處に草を結んだり、木の枝を結んだりする。それで後に來る者は、此の草や枝を見て、先行者が幾人有つたといふ事を知る。又は何日頃にどういふ事をするといふ通知をするのである。折り折り又彼等は、金剛杖を揮つて兩人相擊つ練習をする。今の杖術、棒術のそれである。武術を練習するのであつて、かくして猛獸毒蛇を退治する腕を磨くのである。精妙な術を得た者は、十數間も離れて居る、猛獸を斃す事が出來るのである。

こんな事を私は見やう見眞似に、多少練習したのである。之は手を取つて敎へる種類のものでなく、自分で工夫を凝らし、いろ〳〵と練習を積んで眞の境に達するの外はないので、下根は敎へがたいとしてある。先達のする事を見習つて行を積むので、一々方法を敎へる事はしないのである。靜座瞑想して只管に工夫を凝すのである。私は折り〳〵五日市の町から三峯へ行つては、行者の仲間入りをしたので家庭からは不良兒扱ひにされた。併し本當に樣々の事を見覺えたのである。速步の方法などは重寶なもので、行者の中には一日四五十里から六七十里を

行く者さへあつた。百貫目の物を背負つて二十里も行くと云ふ强力風のもあつた。

斯ういふ不思議な行者生活を一度見覺えた私は、學校に入つて後も學科には一向身が入らず、何時も神秘な事、不思議な事にばかり心を囚はれて、校内でも變り者であつた。それが遂に、或時學校の試驗問題を、何といふ事なしに思ひ當てゝ物議を醸した。それが後で考へると、精神統一して瞑想した一種の透視作用のやうなものであつたやうに思ひ、忽ち之が千里眼として持て囃され、大いに評判されると、自分ながら神通力があるやうに考へさせられた。

（四）

斯ういつた地の出來て居た處へ、時は明治四十三年、前述の千鶴子、郁子の透視が評判されて遂に學界を騷がしたのであるから、私も之に唆かされて、頻りと透視術を研究して見た。處が最初の中は却々巧く行かない。當時の透視といふのは、密封した木箱、嚴封せる鐵瓶の中の紙片の文字、或は物體を透見する――卽ち不透明な隔離障碍物を透して其中に在る物を明かに透見するといふので、此種の事は三千年の昔から六神通の內に數へられたもので、古來幾多の

實驗談は東西何れの國にも傳はり、各國の心靈學界では競ふて之を研究して居るのである。
扨て私は、右の樣に實驗に取りかゝり、其の透視物を凝視して觀念を凝し、徐々に精神の統一を圖つて見たが、そこへ自分の想像で以て種々の事物を造り出し、其の選定に心を惱まして、ただ迷ふばかりである。之ではいかぬと氣を取直せば、今度は選定した一物のみがちらついて離れない。遂に氣がいら〳〵して中止する。暫くして又實驗に着手しては又中止、遂には根氣も盡きて止して了ふ。又次の日も同じ事を繰り返す。かくして十數日を過したが、斯かる失敗の間に、何時とはなし、茫と透視が出來るやうな氣がし出した。そこで私は愈々勇氣を振ひ起し、自ら種々の實驗を試みた。即ち、失踪者、紛失物、病氣など、いろ〳〵とやつて居る中に、失敗もすれば成功もする。斯うして辛苦の結果、私は自分の透視能力に、或點迄自信を持つやうになつたのである。

（五）

大正三年の春の頃、一日、友人の紹介で私を訪問した男があつた。彼は、失踪者の行方を透

視して貰ひたいといふのである。私は幾度も斷はつて見たが、是非にと乞はれて、止むなく透視に取掛つた。但し一旦やるとなると、決心が出て自信も加はり、精神が異狀に緊張して自ら神通力ある者の如き昂奮を覺えた。最初私は靜座瞑目して、じつと觀念を凝らし、それから徐々に精神の統一を圖つて行くと、初め耳の邊に聞えて居た騷音が段々と聞えなくなつた。と思ふ頃又もやゴウ〳〵と凄まじい音響と共に、何んだか停車場と覺ぼしい場所が見え、やがて其處に一人の女の姿が認められた。髮の毛の多い眉毛の濃い、そして鼻の低い口の大きい、白粉をつけた女で、淺黃色の棒縞の着物に茶と黑の腹合せの帶をメめた、何處となく商賣上りらしいと思はれる小柄な女である。同時に女の手には、古い信玄袋が持つてあり、紫色の風呂敷包を小脇に抱へて居るのが私の目に入つた。それが今停車場前の或る旅館へ入つて行くのである。

私は透視から覺めて、今見た光景を話すと、其男は目を瞠つて、

「其の女の姿や服裝は恐く適中して居ます、その通りです。して其の停車場といふのは何處で御ざいませう」

と問ふ。私はもう一度觀念を凝らして無我の境に入つて居ると、ぼんやり、何處からともなく

「千葉」の二字が頭の中に浮んで來たのである。是れで此の透視は完了したのである。其男は喜び勇んで、早速千葉へ行つて捜索すると、私の透視の通り停車場前の旅館に其女が潜在して居たといふので、歸つて來て私に感謝を述べて居た。

私が此の透視に費した時間は僅か五分間であつたが、夫が爲に私の身體の疲勞した事は非常なものであつた。併し此の一回の經驗に依つて、精神の統一を圖つて、眞の無我一念、眞の空三昧に到達すれば、何事でも透視し得るといふ確信を得たのである。

（六）

其後、實驗を重ね經驗を積む中に、私は大して骨を折らんでも、或る點迄透視が出來るやうになつた。同時に、私が透視をするといふ噂が傳はつたらしく、いろ〳〵な人が訪ねて來ては、私に透視を頼む。病氣の判斷、紛失物の行方、扨ては運勢とか相場とか、或は縁組みなどを言つて來る者もあり、中には、私をまるで賣卜者か何んぞのやうに思ふて訪ねて來る人も少くない。私は當然、夢中になつて透視術に凝つて居たものだから、何も實驗の材料だ位に考へ

て、夫等の申込を片ッ端から引受けて實驗をやつて見た。其結果は無論失敗も多かつたし又成功したのも少くなかつた。併し、斯うした幾度とない實驗の結果は、遂に私をして透視術に關する一ツの纒まつた概念を得せしむると同時に、獻身的に之が研究をやり、學術的方面からの研究に取掛らしめたのである。

其中大正五年の秋、私は非常に面白い透視實驗をした。一日、友人の紹介で私を訪問したのは、五十歲位の品のよい婦人であつた。其の語る處は斯うである。此の婦人に一人の娘があつた。昨年の暮、或人の世話で婿を取つた。處が夫迄身體の强健であつた娘が、婿が來てからは兎角健康勝れず、家の中も面白く行かず、此頃では何んとなく憂鬱病に罹つたやうで困つて居る。或る有名な易者に觀てもらつたら、驚くべし娘には生靈が憑いて居るとの事である。それから早速不動樣だの、行者だのと尋ね廻つて、其の生靈の正體を見てもらつたら、それは北の方の男の生靈だとか、南方の女の怨みだとか言つて、種々雜多の生靈が現はれ、之が爲に娘が却て惱まされて氣が變になる。母親にしても、終日生靈の事ばかり思ひ煩ふやうになつたといふのである。處へ、私が前述の千葉の失踪人を透視した話を聞き傳へて、私に生靈の正體を見

届けてもらひたいといふのである。

之は些と突飛な事で、却て私の方が驚いた。一旦は斷つて見たが强ひての賴みなので、私は生靈はあるかないかといふ事は別問題として、兎に角、其娘が何の爲に憂鬱病に罹つたかといふ事を透視することにした。最初型の如く靜座瞑目して觀念を凝らし、徐々に精神の統一を圖つて行くと、漸次雜音が消えて恍惚とした狀態がしばし續いたと思ふと、突然私の腦裏に、三十前後の、背の高い角刈の、意氣がつた男の姿が浮んで來た。次で其の男が下町風の小綺麗な格子戸の嵌つた家へ、這入つて行く處が見えたのである。その家の表札には「本間」といふ二字が見えた。

私は此透視を終へて舊の狀態に復へる迄には、僅か五分と三秒間を要したのである。早速其の婦人に今視た處を話すと、婦人は「まア！」と言つてしばし呆れ顏に私の顏を視て居たが、やがて聲を顫はしながら語る。

「恐い〳〵、ではあの本間といふ男の生靈でしたか。それですつかり解りました。其の本間といふのは、私の娘に最初結婚を申込んだ男です。それが、少し都合があつて斷つたので、大變

に恨んで居るとの話を聞きました。……然うでしたか、あの男の生靈でしたか！」

婦人は、それと解つて、永い間の謎が解けた様に喜んで歸つた。私が本間を木間と見たのは透視力が足りなかつたのか、それとも表札の文字が消えて居たのかはつきりしない。

（七）

以上、私の神通力の一班とも見るべき經歷を一寸物語つたのであるが、已に幼時から、或る特殊な精神作用の研究に思を潜めて居た私に取つて、こんな事は、當然の歸結である様に思はれる。

處で、私の透視が愈々評判になつて、一部の人から、生神様の降生でもある様に噂された。といふのは其頃、隱田の神様といふのがあつて、羽振りよく大した噂なのでつまり、神様はやり熱が昂まつて居たからである。夫れに私は其頃異様な長髪姿であつたので、一層神様らしく思はれた。といふのは、私は生來頑固で強情で、劣ける事が嫌ひで、從つて人に頭を抑へられる事が大嫌ひ。床屋へ行くと、髮を刈るに頭をつかまへて抑へるから、それがいやさに滅多に

床屋へ行かない。加へて生來の不精者とあつて、髮が伸び放題、長く肩にかゝつて居る。それも一部は、少時から憧がれた山伏、行者の姿にあやかる稚氣も手傳つた事であらう。兎に角白面長髮、神樣にはお誂への風體であつたに相違ない。

「此の私の稚氣と街氣に附け込んで、私を暖かく抱き上げた智惠者が現はれた。其男は私を抱き込んで、板橋の神樣にしたのである。私もいたづら盛りの二十三四歲の青年時代であつたから、それア面白からう位の處で、うかうかして居る中に、其の男が主となり、數名の仲間を作り、或る傳道式の場所を板橋の町に開き、私をそこへ勸請したのである。私は其氣もなく、每日さまざまの人が入り替り立ち替り訪問するのを好い加減にあしらつて、大抵の事に生返事をして居たのが崇つて、今は否應なし、そこの神座へ着いて、端然と俗人を見下ろして、皆んなから拜まれなければならぬ不思議な身分となつて了つたのである。何んだか夢の樣な話で、何時どうして神に奉仕する身になつたといふのか自分にもしかとせぬ。

(八)

扨て神様といふものは、大層えらい物であり、又大變窮屈なものでもある。
「之は攝州御影の淨土院の僧侶だつた利平が、破戒の罪で俗界に墮落したのを、倒幕念願の爲め、軍資金を作らうといふ野心を抱く小泉百介に拾はれて智識様と立てられ、生佛様として芝は愛宕の山で雨乞ひの祈禱をする。それが當つて、百姓共の信仰を得て本當の生佛様にされる」といふのが、吉川英治作の「遊戯菩薩」の本體であるが、多くの場合、神様といふのは擔がれる御神輿で、之を擔ぐ智慧者が後ろに控へて、それを自分の生業にするのである。されば神様としての私の役目は、至つて能のない仕事である。
私の透視能力が評判になつて世間では之を神通力と呼び、それが信者を呼ぶのである。遊戯菩薩の雨乞ひが偶然に當つたのとは異つて、私のは自發の能力の結果であるが、人間は萬能でないから一から十迄何んでも見透すといふ譯には行かない。甚だ覺束ない次第であるが、愈々、神壇の下の圓座に端然と坐つて、神慮を伺ひに來る人々と接する段になつて、始めて解つた事は、來る人々が自分で自分の事を皆んなしやべつて吳れるから、此方は居ながらにして何んでも解り、判斷も付くといふ事であつた。それに重大な事であると、私が頼みもせぬ中に、總務

の人々がその旺溢する俗智に依つて、ちやんと答案を作つて呉れる。

最初は私も愉快であつた。覇氣滿々人を壓服して、血氣盛んな二十四歲の白面の書生が、一躍して神樣と祟められ、神殿造りの相當な建物の奧殿に、白衣白袴に長髮をさばいて十二疊の間に神壇を設け、しめを張り、其下に藁で造つた圓座の上に端座して、自ら私は神なるが如くに誇るのであつた。總務あり執事あり、書生十數名あり、玄關番が控へて、妄りに人を近さず大した威風である。一寸考へると全く大したものである。總務の方では、どんな宣傳をするのか知れぬが、神慮を求むる者が日增しに多くなる。一般俗人、市井の賴りない者ばかりが迷信的にやつて來ると思つたに、豈に圖らん、堂々たる大官、大臣時めく實業家、政黨の領袖など迄がやつて來て神樣否私へお伺ひを立てる。其の求むる處は、政界の異動、實業界の變動、株の高低などの判斷である。本名は並べる事はしないが、あんな人迄と驚かるゝ地位に居る人物に、少なからずあつたのである。私も全く意外の感に打たれた。

私にそんな事の適確な判斷が出來る筈のものでないのであるが、そこは重寶なもので、一般賣卜者と違ひ、神樣の前へ來る是等の亡者は、先づ自家、自黨の內情を詳細に申上げて後、神

體を伺ふ事にするのであるから、間違ひのない政黨の眞相を居ながらにして知る事が出來る。それが、其場で即答しなければならぬといふでもない、彼等は自家の內情を詳述して、其の最も機微な或る一點、岐れ目の大事な處だけ右か左かと伺ひを立てるのであるから、殆んど自問自答の形である。私は之を默つて聽いて居ると、何とでも好い加減に、ぼろを出さない程度の返答をする事が出來る。或は數日中、ゆつくり神慮を伺つてお返事をするなどゝいふ手もある。

然うして居る處へ、今度は反對の政黨人が來て又自黨の內情眞相を逐一神に奉告して、右か左かの岐路の判斷を乞ふといふ事になるから、私にしては兩政黨の內情が手に取る如く解る。之を加減乘除すると、差引殘りの判斷は必然に出ても來るのである。何んとも變な、滑稽な事で賣手と買手とが肚を割つて各自の思わくを語つて行くとしたら、中に立つ者は十分に美味い汁を吸ふ事が出來ると同じ事である。神樣の前では嘘を言ふ事はならぬとしてあるから、態々費用をかけて神慮を伺ひに來る者が、心にもない出鱈目をいふ事はない。何れも切端詰つて苦しい時の神助けを乞ひに來るのであるから、くど〳〵と愚痴を並べ他人には滅多に口外せぬ事迄打明けてしやべる、之を聽いて居る私には、大凡その判斷は必ず付くのである。丸きり當人に

解らない事を聞きに來るのでなく、解り切つた事の岐れ目に迷ふて居るのであるから、私にしては尤もらしい、どつち付かずの受け答をする事は造作もない。且つ其人の弱點をつかむ事も出來る。中世頃の羅馬法王のお役得らしい眞似は何時でも出來るのである。毎日の賽錢が多い時には四五百圓も上つたとかいふ。

（九）

「神様にお伺ひをするには、隱し立てをしてはいかぬ」といふ嚴重な掟を掲げて置くのであるから、來る者は皆なさらけ出して内情を自白する。そして「是はどうしたものでせう」と神慮を求める。私の方に準備智識のない事に、何とも判然した答をし得ない場合には、何れ二三日中に又來いと言ふてやる。或は總務の方から好い頃合に取なして歸す、どんな難題でも、神様の御深慮は即答を避けるなどといふ逃げ手はある、神様の箔を落す様な事はしない。愛宕山の雨乞ひの智識様と異つて、此方は本物の透視能力者なのだから、折り／＼總務達を驚かすやうな名判斷を下す事があつて、愈々生神様の評判が高くなる。

政界や實業界の一流者の第三番目が來る頃になつては、前二者の語つた處に依つて、內情が大體判つて居るのだから、彼方から言はぬ內に此方から言つてやると彼らは驚嘆する。新聞記者達が、板橋の神樣の正體を見屆けやうとて押しかけて來る頃には、此方は大分功を積んで、此方は敵味方相方の極秘情報を握つて居るのだから、機微な消息を逆襲的に聞かせてやると、彼らは驚嘆して、流石は神樣の御宣託であると目を瞠る。

大隈候座して天下の形勢を知り、世界の知識を集め、前客の談を受賣して後客を擒着たらしめたと同じことに、神樣の智惠は他から集めるのであるから、それが透視であり、神秘であるが如く見え、聽く者之を神意なりとして之を實行しないと罰が當る樣に思ふ。板橋の神樣が能く當るのではない、來る者が花札をさらけ出して見せて、自づと當てさせるのである。斯うなると大官の重役のといふのも馬鹿の樣に見える。そして、自分は本當にえらい神樣になつた樣にも思へて、一種の夢遊病者らしい氣分にさへなるのである。

「己れは神樣だ、本當にえらい生神樣だ、世間の者が貴賤老若皆な判斷を乞ひに來るのだ。己れは天下を取つた」

といふ氣になつて、全く愉快な事に考へられた。少し馴れて來ると、此の神樣商賣は大變氣樂なもので、元來神意といふものは、きつかりと具體的に示さるゝ筈のものでなく、神學的に漠然と隱語の樣に出るのが古今東西の例なのだから、どうでも拔け潜りが出來る。

一般の俗人が神樣にお伺ひを立てる場合を見ると、老若に依つて異る。老人の來る者は少い。其の用件といふのも、男女間の關係などは稀れで、多くは子孫の事とか相續問題に關して居る。憂欝不安の顏をして來る者は、我が子女の行衞とか、家屋地所の問題で困つて居る場合などである。反對に其の老人の嬉しそうな顏をして來るのは、我が子女の結婚に就て何れに決めやうかを迷ふて居る場合などにある。又若い者の場合を見ると、不安の顏をして來る者は、前途の不安、相續問題、學校の試驗成績に關する事、又就職問題、戀愛關係などで、家庭の事情から相當複雜な事柄もある。何か慌てゝ來る者は「失せ物」の判斷で、時には易者の紹介に屬する樣なのも來る。私が神壇下の圓座に坐つて默つて其の人達の顏を見て居ると、大體の見當が付く。

「君は何々で來たやうに思ふが……」

と問ふと、來者は忽ち口を切つて詳細に說明する。有りそうな問題の大きい範圍に觸れて行くと、來者は之に共鳴して問はず語りをする。

「オー其の事は、顏に現はれて居る」

と言ふと、來者は神樣の明察が大したものだと感服して居る。十中の二三當れば、彼等は度膽を拔かれて鷲嘆し、他の七八が外れてもそれを問題にもしない。

「神も未來の事は適確には解らないものだ」

といふ、世間一般の概念らしいものがあるので、誠に私に取つては都合がよい。何等か不安を感じ心迷ふ者は、神の托宣を求めるのが人情の常で、正直、愚直な者程神樣の寵兒なのだ。つまり亡者は招かずして附いて來るのである。易者の場合よりもずつと仕事が樂なのだらう。

是ら亡者に向つて、

「君は世間から剛情者と言はるゝが、實は大變柔順な氣質なのだ」

といふと其人は喜んで有難く私を禮拜する心になり、自分の思ふて居る處を正直に言ふ。それだから私の判斷が當る。私が當てるのではない、向ふから當てさせてくれるのである。對手

の持ち札を見て了つたら、此方の持ち札も間違ひなく決まると言つたものだ。人を見て通有性の一部を捕へ、そこから出立しては後の辻褄を合せて、對者の氣に入る樣な事を言ひくるめる處が此方のコツである。不正直者と見ても、

「君は正直だから」

と言へば相手は喜ぶ。そして、

「其の正直な心根の爲めに何時も椽の下の力持ちをして損をする形だ」

と言へば彼れは非常に喜んで、流石は神樣だけあつて人の心の奥底迄見透して居らるゝと感心する。極めて通俗なる精神分析を行へば、神樣位ひは勤まるのである。

易者に較べて百倍もえらく見える神樣になり、判斷の仕事は大變樂なのであるから、一度神樣になつたら止められない愉快なものである。遂には羽目を外して尻尾を出したりするのが多い。若し私がもつと意氣地なしであり臆病者であり、又もつと無學で、精々小學校程度の敎育しか受けて居ない人間であり、從つて自己反省の能力もなかつたのなら、もつと〳〵えらい神樣にもなれた事であらうと思ふ。が併し、神樣といふ生業は私には適しなかつた。

（十）

私は、神樣に崇められて、最初は愉快であつたがやがて、つく〴〵と人生に對する悲哀を感じた。私の神樣生活が餘りにも馬鹿々々しかつたのである。私のする事が餘りに無意味で、それに窮屈であり、退屈であつたからである。檻の中に封ぜられたやうな生活は、無意味で飽き〳〵したのである。

第一に私は神樣であるから、成る丈け口を利かないやうにしなければならぬ。冗談一ツ言ふ事が憚(はゞか)られるのである。親が訪ねて來ても直ぐ飛んで出て面會する譯にも行かない。三十分も玄關に待たせてからでなければ、自室へ請じ入れる都合が付かない。思つた事も滅多には口に出して言へない。一言一行盡く束縛される。便所へ行く時も五六人の書生が附いて來る。神樣であるが故に、俗人の樣に屁を放つて好い氣持と笑つて居るやうな不謹愼な事をしてはいかぬ。便所の中でも音を立て、放屁する事が出來ないのである。

外出の時とても同じ事で、豪勢に書生が五六人附いて來る。燒芋をかじつた書生當時の眞似

などは出來ない。ほしい物があつてもそれを手輕く、おいそれと買ふ事も出來ない。途で友達に逢ふても、迂潤に話も出來ない。一々監視が附いて居る形である。高貴の人は野人趣味を發揮して、繩のれんへ入つて見るなどいふ樂みは得られんと同じ樣に、秩父の山中で行者の弟子入り迄した野人たる私が、到底こんな生活には堪えられないのである。何か吉例とか、富者の招請とかで、豪奢な御馳走の席に臨む場合にも、宴酣にして是からが座が賑かになり、袴を脱いで大いに寛いで愉快を盡さうといふ段になつてくると、必ず生神樣たる私一人丈けは取除け者にされる。

「俗人の亂雜なさまを、神樣のお目にかけては……」

といふ樣な事で、私は寶の山に入りながら手を空うして歸らなければならぬ、途中から獨りで、好き勝手な處へでも行かれるでもなし、誠に以て不都合千萬な生活である。勿論、私は自分から計劃して神樣商賣を始めたのではなく、或る策士のお神輿となつたのであるから、其人の爲に餘計の束縛された點もあらうが、併し、地方の學校の先生はそば屋へ入つて、いゝもりかけ一ツを註文する事も後めたいと同じ樣に、此の神樣は方々の人から廣く顔を見知られて居るから、

第一不作法な處でも見られたら一遍で神様の價値が失はれる虞れがある。六十を越して俗世の快樂に、何等野心のない寒巖枯木の人間なら知らず、二十四歳の私には、迚も我慢のならない窮屈なものであつた。

「神佛は西に居るとは愚かなり何處にもなし、南にぞあり」

といふ歌があるやうに、皆身にあるといふ事と、南方にあるといふ事とを引くるめて言つたのであるが、まあ、一寸痩せぎすな、姿の何處かしまつた處のある、低腦に近い者が、神様と立てられるに適して居る。悧口者は神様になつては居られない。

（十一）

是より先き神様の御威光が強くなるに連れて、書生も多くなり、社會的にも大なる勢力を張つた。政界人の間にも、又警察方面へも私共の手が伸びて行つて、段々無理押しが利く事になる、世間では我等一黨を憚り、一歩を讓る形である。多勢居る書生達は、私の威力を嵩に着て傍若無人の振舞をするやうになり、昨今の暴力團にも似た傾向を生じた。板橋の生神様は、社

會的に俗世の權勢を握る事となつたのである。それ丈け、兎もすれば書生共の行動には恕しがたい惡癖さへ伴ふので、私は內心甚だ苦しい。神樣の弟子が不良暴擧を行ひ、一歩間違へば不正行動に陷らぬとも限らぬ。之れでは私の一分が立たない。神樣も三年勤めて、竊盜ばかりでも堪へがたい處へ、こんな書生の目に餘る不良ぶりは、私をして二重に厭氣を催さしめた。私は思ひ切つて、生神樣の圓座から離れやうと考へた。それと打開けては總務の方では承知しないし、書生共も言はゞ木から落ちた猿になるので、どうあつても私を引留めるに相違ない、私は人知れず板橋の神壇を去つて、一時身を隱そうといふ事を考へて居た。

共折り勃發したのは、彼の難波大助の虎の門に於ける不敬事件であつた。天下の青年は大いに憤慨して、時の內務大臣K氏の責任を問はなければならぬと言ひ出した。直接責任のあるものとは言へなからうが、要路の責任者としてK氏が衆目の的となつたのである。遂に彼等青年は暴力に訴へ、K內務大臣の邸宅に闖入し、共の不都合を詰り、果ては戶障子、襖、延具の嫌ひなく手當り次第之を破壞し、棺桶さへ擔ぎ込んで、K氏に自裁せよと騷ぎ立てたのである。是等青年の中に私の方の書生も一二、加はつて居るとかいふ噂が生じた。斯うなつては事が收ま

らない。警察が暴力取締りの手入れをする事ともならう。さなきだに飽き〳〵した神樣の地位が、書生の暴擧に依つて煩はされる事は心外の沙汰である。私は熟慮は已にしてある。今ぞ斷行の好機と考へて、其時、板橋を脱して大阪に赴き、生神樣の樣な氣持を取捨てたのである。

大阪では私は長髮を切り、俗人となり國粹會の爲に盡力した。是が又波瀾を生み、面白い話になるのであるが、何れは他日私の自叙傳の一部として發表する機會もあらうと思ふ。兎に角、神壇下の生活から脱して後幾星霜を經た今日、之を回顧して見ると、世に何處其處の生神樣だの生佛樣だのと言つて居る、何々敎何々園などいふものを信仰する人の氣が知れない。大官でも大實業家でも大政治家でも大富豪でも、とんと馬鹿げて見えるのである。先年、猫の死體を椽の下から引出して拜ませ、商人や株屋方面の迷信を煽つて、一時評判になつたのが忽ち消滅したなどは、新代日本に在つて當然のことである。昔であつたらあんなのが、邪祠淫祠になつて、大いに世人を惑はした事であらう。怪しげな迷信を流行させるなどはつまらない。

私は若氣のいたづら氣分から自分の透視能力を試して見る好機會とも思ひ、板橋に邸を構へて世人から生神樣だのと評判されたのであるが、何んだか茫として熱に浮かされた患者の如

き心境であつた樣に思ふ。世間には神懸りと言つて、神意が我身に乘り憑り、自問自答に依つて、神宣を確めるなどいふ信仰者も少なからず存在するもので、私の透視も精神統一の必要上、神壇の下に白衣姿で端座し、品行方正、實に神に奉仕する人の心で居る方が、餘計に能力を發揮したかに見える。私自身は生神樣とも何んとも思つて居ない。唯だ神に事へる心で居たに過ぎない。世に神佛の加護といふ事があるが、弱い人間の力で出來ない事も、神佛を念じ、眞の加護に賴よる事に依つて願望を達しやうとするのは人情の自然であらう。但し此の弱點に付け入つて、いろ〳〵のトリツクを用ゐ、人の耳目を欺き、而して之を精神の靈妙な作用であり、神佛の加護に依るものであると稱する者がある。神樣にされた懺悔話の序に、以下少しく、此種トリツクの二三をさらけ出して、世人の迷夢を覺ましたいと思ふ。

(十二)

昔から、心靈術といふものがあり、之は一種不可思議な心靈作用に依り、神秘的な事を行ふもの、そこに神佛の加護があると主張するのである。彼の「探湯術」とか、燒火箸を扱いても

火傷しない「鐵火の術」、全身に太い針を刺し貫いても、痛みも感じない血も出ない「無痛刺針術」。「火渡術」、「刄渡術」「金剛不壞身術」、「嚼火術」など澤山にある。私の實驗に依ると、是等の術は何んの不思議もない事で、全然科學的に證明し得られるし、何人も實地之を行ひ得るものである。

第一の探湯術を行ふ者は、先づ鹽水で手を洗ひ清め『臨兵鬪者皆陳列在前』といふ九字の呪文を唱へ、そして指頭で空中に四本の縱線を畫き、次に其上に五本の横線を畫いてから、「さら〳〵と沸く湯なれども立寄れば、池の清水と早くなるべし」といふ呪文を唱へ、扨て徐ろに、ぐら〳〵と沸ぎつて居る湯の中へ手を差込むのである。其態度がいかにも神靈の秘力を借り來つて人間業でない樣に見えるのであるが、併し其の裏を見ると、生理的物理的理論で解釋されるのである。彼の行者などが、此の探湯術を修するには、富士山とか御嶽山とかいふ高い山上で行ふ。之がトリツクの一つである。高山は空氣稀薄にして氣壓が低いから湯の沸騰が早く、平地で百度乃至百二十度の火力を要するものが、僅か七十五度位で沸騰する。そんなら少し熱加減な風呂湯位のもので、手を入れても身體を入れても何

んともないのである。それから、先づ手を清めると稱して鹽や水を着けるのが一つの仕かけで、それが遮斷物の用を爲して、湯の熱さが直接皮膚に觸れない。鹽は熱を吸收する力の强いものであるから、熱を皮膚面で遮へぎる効がある。鹽の代りにアルコールを着けたら一層有効である。行者は探湯には、鍋よりは釜を用ゐる。鍋は淺く廣いから一面に熱くなるが釜だと底が深いから、中央は早く沸くけれども緣の方は沸き方が遲い。そこを狙つて此の微温い部分へ手を差し込むのである。之を見世物にする香具師連だと、湯の中へ重曹を入れる。すると忽ち沸騰して、いかにも熱いやうに見える。要するに此の如き探湯は、心靈術も神佛の加護もいらない、誰にでも出來る仕かけになつて居るのである。

「劍の双渡り」は一名踏双術ともいふ。光鋒陸離として秋水したゝる如き白刃を立てた上を、素足で渡り又は梯子の如く組んだ劍の双を昇降するので、觀る者をして膚に粟を生ぜしむる、一見危險至極の術である。此術は昔は眞言秘密の法術となし、秘密六方の一つとして、最重大視され、門外不出の秘術として、唯だ口授口傳に依つて僅かに奥儀を授けた。之を行ふに當つては、様々な呪文を唱へ、印を結び、一心不亂になつて神佛の加護に賴ると信じて行つたもの

である。眞言秘密の法を修する一行者の打明話に曰く、

「自分は最初の程、眞面目になつて身を淨め、それ〴〵祈禱などして劍渡りの印を結び、呪文を唱へて、それで刄の上を渡つて居たが、其の後幾度も之を行ふ間に、印も呪文もいらぬ、誰れにでも出來る事の樣に思はれ、唯だ氣を落着け、注意して靜かに劍の刄を渡つて見ると、少しも足が斬れて居ない。そこでいろ〳〵考へて見ると、人間の足と限らず何んでも眞直ぐに刃物の上に置いたなら、滅多に斬れるものでない。それが斬れるのは、畢竟刄物の上を滑らすからである。刄渡りの術も斯う解つて見ると、生理、物理の問題で、祈禱、結印、呪文などは用のないもの、唯だ初心者が、自分の氣を靜め、自信力を得る爲めの一方便に過ぎない」と。現に私は此の刄渡を一場のお慰みとして幾度も實驗して居るのである。

も一ツ「眞劍白刄の術」といふのがあつて、是は昔、柳生流や眞影流などで、極意秘傳の一つとして非常に重大視したものと言はる。即ち氷のやうな眞劍を以て腕を打つて引き、或は白刄を握つて引き、又は頬へ一文字に白刄を引いても決して斬れないといふ法である。興行師などが此の術を行ふ時には、刄に蓁の油など塗る。但しそんな無駄な手段には及ばぬ。實は斬れ

ない物理法則に依るもので、神佛も不思議もいらぬ事である。之は刄を引く時、力の平均を失はないやうに注意する丈けで出來る。平均を失ふと斬れる。であるから反のある刀や、鍔のある刀は引く時に、力の平均を失ひ易いからやりにくい。術者は大概白鞘か仕込杖のやうな反りの少ない、鍔なしの刀を使用するのである。是も私が度々實驗して居る事だ、何時でも試めして見られる。唯、一般人は萬一斬れやしないかと考へて躊躇し、それが爲に手元が狂ひ、過失を生ずる事がないと限らぬ。兎に角、道理上決して斬れるものでない事丈けは保證する。

次に「火渡術」といふのは、相當仕かけが大きいので、觀者を驚かすのである。此術は能く御嶽山の行者又は山伏などが行ふ方法で、先づ松割木又は木炭を長さ二間、巾五尺位に置き並べ、其の四隅に竹を樹て、注連縄を張り御幣を立て、四隅から火を放つて炎々と燃えて居る間、行者は「火祓詞」や「火鎭祝詞」を上げて祈禱を行ふ。扨て木炭が悉く火になつた頃、助手は棒を以て餘燼を萬遍に叩きつけ平らにする。殊に人の渡るべき眞中の路筋丈けは、まるで火の氣の見えない程固く叩きつける。それから方々に鹽を撒く。特に人の渡るべき路筋の入口には澤山の鹽を積んで置いて、渡る人には其の鹽を兩足の蹠で能く踏みしめさせ、充分濕して置い

てから渡らすのである。

行者は先づ火に對して九字を切り、續いて「淼」といふ字を書き、次に「賦」の字を火に向つて書いて、最後の一點だけを足元に打ち込み、そして大海の印を結び「オンアビラウンケンカンマンボロン」といふ呪文を五唱七唱しながら、素足で小足に早く渡り、後信者や參拜者を續いて渡らすのである。是が火渡術なのである。

此術を所謂心靈術家は、法力とか神力とか稱して、非常に神祕不思議の祕法の如く吹聽して居るのであるが、併し事實は決して不思議でも神祕でもない、物理現象の一實驗に過ぎぬ。

何故ならば、元來、松薪や松炭は、他の炭に比して火力が弱く又消え易い。今試みに松の炭火を疊の上に落して直ぐ拾ひ上げると、燒痕がないのみか、却つて火が消えて居るものである。松炭は斯樣に火力の弱い處へ、其上へ澤山の鹽を撒くから一段と火力を減じ、素足で渡つても火傷をする程に熱くは皮膚に感じないのである。

こんな樣な所謂心靈術、神祕現象なるものは、他にも澤山あるが、是は又一括して詳細に述べる機會もあらうし、私の生神樣の實驗談は是れで一旦終りとする。

忍術傳書目錄に就て

古來忍術に關する傳書——文獻といふものは絕對秘密にされ、滅多に世に示されなかつた。忍術其物も門戶を張つて誰人でも隨意に學ぶといふ事も出來ず、第一忍術者が何處に居るかさへ知れぬ樣にしたのである。從つて、其の傳書なども一子相傳——師から弟子へと傳へられ、他人の窺ひ知る事を許されなかつた。そして、大事な點は記錄にも載せられず、唯だ師弟の間に口で傳へ殘されたのである。之は忍術其物の性質上當然の事であらう。前にも述べた通り、何藩の誰某は忍術者であるといふ事が明かになつたら、世間は之を注意人物にするから、忍術者も忍術を施すによしなしで、存在の價値が無くなる。已に忍者自らの存在をも秘密にした程であるから、其の傳書の極秘されたも當然である。

それでも忍術者は夫々自心覺えの爲め、術に關する記錄物を作つたもので、殊に德川時代天下

泰平の間諸々の學術も進歩し、各般の調査も綿密になつたから、此の風潮に乘ぜられて、忍術の文献も各自の筆寫で相當の量に達する迄書き殘されたのである。今、著者の手元に在る中の一部を左に錄す。

萬川集海　天地人三冊
萬川集海　十冊（延寶九年）
忍術傳書　上下　二冊
伊賀者大由緒　一冊（寛政九年）
軍法侍用集中窃盗巻　三巻
甲賀忍之傳未來記　一冊（文化二年）
忍術秘傳竊忍日錄　一冊
甲賀組由緒書　一冊（天保十年）
伊賀者由緒　一冊（享保二十年）
伊賀之者御由緒之覺書　一冊（寶曆十一年）

甲賀二十一家先祖書　一冊
伊賀者火術秘書　一冊（寛永元年）
伊賀者火術秘傳書　一冊（寛文十二年）
竊盜秘密手鑑　一冊
忍一流密書之卷　一卷
萬川集海軍要秘記　一冊
甲賀流炮術傳書　一冊
鄉家流竊盜秘傳　一卷
忍術奥之卷　一卷（慶長九年）
忍術具之圖會　一卷
忍術極意秘密卷　一卷
訓閲集中天透論　一冊
陵問三略　一冊

八門遁用之卷　一冊

忍秘術　四卷（永祿三年）

正忍記　上中下三卷（延寶九年）

一子相傳當流忍大極秘　一冊（享保十二年）

忍極秘傳　一冊（享保十六年）

忍道梯楷論和漢忍利證語抄　三卷（延寶四年）

忍問答　皇漢由來事　一卷（延寶四年）

萬川集海　二十一卷（延寶四年）

甲賀流忍之法　上中下三卷（寛文元年）

甲賀流忍術秘書應義傳　一卷（天正十三年）

軍隨應寘記忍之卷　一冊

軍鑑訓閱集　六十一卷

忍術奥義秘書　一卷

昭和十一年八月十四日印刷
昭和十一年八月十八日發行

「忍術祕錄」奥付

【定價一圓五十錢】

著作者　藤田西湖
東京市麹町區九段四ノ五

發行者　大島憲二
東京市神田區神保町二ノ二九

印刷者　瀧井清

東京・麹町・一口坂

發行所　千代田書院
電話九段(33)二九五五番
振替東京八四〇八三番

（東京・宏英社印刷所）

米窪太刀雄著（日本海員組合副會長）

海洋精神（メル・エスプリ）を讃ふ

四六版美裝本
九ポ組ルビ付
三百五十頁
定價一圓五十錢

内容目次

日本海員界を脊負つて立つ著者は、またその雄渾なる筆をもつて、盛名を謳はれてゐる。ペンネーム米窪太刀雄の名は、曾つて高等商船學校を出るや「海のローマンス」を著して洛陽の紙價を高からしめたのである。海洋に關する文學を語つては、恐らく著者は我國における最高峰であらう。

今やまた「メル・エスプリを讃ふ」なる題名の下に、海に關する文學、詩歌、物語、戯曲、漂流談、奇談、紀行、研究、論文を集めて世に贈る。海洋日本を讃へる我々は、また此の一書「海洋精神（メル・エスプリ）を讃ふ」の名文を得て、海洋精神の眞髓に觸るゝを得たり。

乞ふ上述の内容目次を瞥見して、必讀されん事を。